

博士学位論文

思春期・青年期女性の
アイデンティティ形成過程への心理臨床的援助
— 青年・両親関係における第二の個体化過程の視点 —

<一部要約>

首都大学東京 大学院

人文科学研究科 人間科学専攻

篠原 恵美

2014

目 次

第 1 部 序 論

1. はじめに.....	1
--------------	---

第 2 部 理 論

2.1. 思春期・青年期の第二の個体化の概念	
2.1.1 思春期・青年期の心理的問題と心理臨床的課題.....	3
2.1.2 分離 - 個体化過程の概念とその変遷.....	4
2.1.3 分離 - 個体化の拡散が青年期におよぼす影響.....	5
2.2. 思春期・青年期における第二の個体化過程	
2.2.1 第二の個体化の概念とその変遷.....	6
2.2.2 第二の個体化とアイデンティティ形成の関連.....	7
2.2.3 第二の個体化過程と家族との関連.....	9
2.2.4 乳幼児期の愛着と第二の個体化との関連.....	11
2.3. 女性のアイデンティティ形成とその様相	
2.3.1 女性の第二の個体化過程の特徴.....	12
2.3.2 女性の第二の個体化過程の問題点.....	13
2.3.3 女性の第二の個体化を促進する心理的援助.....	14
2.4 本研究における第二の個体化過程の検討について	
2.4.1 従来の研究の問題点.....	16
2.4.2 事例研究法を採用する理由について.....	17
2.4.3 本論文の事例研究法の理論的背景.....	17
2.4.4 本研究における第二の個体化過程完了の特徴.....	19
2.4.5 研究方法.....	19
2.4.6 (補注)事例記述について.....	20

第 3 部 臨床事例研究

第 1～5 事例 要約.....	23
------------------	----

第 4 部 成人期事例

第 6・7 事例 要約.....	24
------------------	----

第 5 部 総合考察

5. 1. 第二の個体化過程における青年 - 両親関係の変遷とその特徴

5.1.1 各事例の状況の概要	217
5.1.2 Cl.の自己理解の変遷とその特徴	218
5.1.3 母親との関係性	226
5.1.4 父親との関係性	230
5.1.5 本論事例の第二の個体化過程の状況と母娘関係と父娘関係の関連 ..	234
5.1.6 その他の関係性	242

5. 2. 第二の個体化過程を促進する心理臨床的援助の検討

5.2.1 第二の個体化過程における Cl. - 筆者間関係の変遷	247
5.2.2 第二の個体化過程を促進する Th.の援助の検討	254
5.2.3 まとめ	259

引用文献一覧	266
--------------	-----

第 1 部 序 論

1.1 はじめに

筆者のこれまでの心理臨床活動において、特に困難を感じた事例はさまざまな理由から不登校、ないしはひきこもりに陥った女子高校生達の場合であった（篠原・佐野, 2001; 篠原・佐野, 2002）。そしてこれらの論文や発表より見えてきたものは、援助的關係を形成する要因として、①家族—特に母親への援助とその枠組みの構築、②援助者（以下、Th.と略記）とクライエント（以下、Cl.と略記）との相互成長的關係など、Cl.のアイデンティティ形成における対象關係ないし相互連関（mutuality）についての課題であった。

更に、中学 3 年生女子の不登校についての事例（篠原, 2010b）では、不登校等の主訴の主要な課題の背後には、母子葛藤を含むより深層な根本的な課題があることが確かめられ、また、進路決定できずに混乱した高校 3 年生女子の事例（篠原 2012）において、約 10 年間の面接過程から、Blos, P. (1967) のいう＜第二の分離 - 個体化過程＞の存在、および援助者が Cl. の＜new object＞であることの意味等が明確になった。

以上のようにこれまでの実践研究を振り返った時、援助過程において最も重要でありながら、更に探究の必要性のある課題が、思春期・青年期女性のアイデンティティ形成過程への心理臨床的援助として、青年 - 母親關係における第二の個体化過程の視点である。

Blos, P. (1962/1971) の第二の個体化の概念は、Mahler, M.S. (1975/2001) によって提唱された乳幼児期の発達過程の再現として指摘されたものである。また、思春期・青年期におけるアイデンティティ形成の何らかの障害は、この最初の分離 - 個体化過程に障害があったことも指摘され、特に Masterson, M.D. (1980/1982) などの青年期境界例の精神療法はよく知られている。

一方、青年心理学の分野におけるアイデンティティ研究では、女性の生涯発達の過程はアメリカ (Kimmel, D.C. Weiner, I.B. 1995/2002) においても、日本 (岡本, 1999) においても、それぞれの固有の文化の影響と共に、男性の場合と大きな相違があることも指摘されている。

当然のことながら、青年期境界例の精神療法の場合は発症後、入院治療が必要な重篤な症例が殆どであり、青年心理学分野の研究は主に質問紙調査に基づくものが大半であり、被調査者への長期的継続的な援助關係はない。従って、両者の中間領域である学校臨床や大学心理臨床センター外来で出会うような Cl. を対象とした研究は殆どない。

特に研究を困難にするのは、Cl. の思春期・青年期女性のアイデンティティ形成の課題に加えて、母親の側には中年期女性の発達課題が重なり、更にその相互の関連があり、第二の分離 - 個体化過程の情況は一層複雑微妙である。

このような相互性 (mutuality) については、単純な因果關係の探究ではないだけに、長期的

援助関係のなかで、しかも参与 - 観察(participant observation)によって捉えることが最も効果的と思われる。

思春期・青年期クライアント(以下、Cl.と略記)の心理臨床では、性別や病理的な問題の有無にかかわらず両親からの情緒的・精神的自立が大きなテーマであり、自立の促進とサポートが心理面接の大きな鍵となる。それにはセラピスト(以下、Th.と略記)が面接内容より Cl.と両親との分離の状況、ならびに分離の不徹底さの要因を把握することが必要であるが、その際の第二の個体化過程(Blos,P. 1962/1971)の観点は重要な指標となるであろう。

また、Erikson.E,H.の青年期理論は基本的には男性の発達に適応するもので、性差を無視しているとの批判(Kimmel,D.C.& Weiner,I.B. 1995 /2002)がある。女性独自のアイデンティティ形成過程を確認することは、思春期・青年期女性の心理的援助を行う上で必須である。

なお、本文中では幼児期における分離は＜分離 - 個体化＞、青年期における分離は Blos, P.(1967)より引用し＜第二の個体化＞と統一して表記する。また文献により同一性地位と記載されたものは原則としてアイデンティティと統一表記して論ずる。

第 2 部の理論は篠原(2013)を基に更に文献を加えて加筆した。第 3 部・第 4 部で使用した資料一覧は 2.4.6 表 1 に示した。

第2部 理論

2.1 思春期・青年期の第二の個体化の概念

2.1.1 思春期・青年期の心理的問題と心理臨床的課題

思春期・青年期の心理臨床的課題は、いわゆる非行を始め不登校に限ってみても、常に社会的にも注目を集め話題とされてきている。対人恐怖症、心身症（1960年代）、スチューデント・アパシー、モラトリアム（1970年代）、DSM-III（Diagnostic and

Statistical Manual of Disorder-III）の導入紹介に伴い人格障害や摂食障害（1980～1990年前半）、更に下って PTSD（心的外傷後ストレス障害）、社会的ひきこもりなど（1990年後半）が、そして、現今（2000年代）ではニート（Not in Employment, Education or Training）やアスペルガー障害などの発達障害が注目されてきている。思春期・青年期の時代的変遷から見えてくる臨床像は、その時代的狀況と密接に関わった特徴を常に反映している（永井，2007）。

こうした心理－社会的特徴を内在している世代的課題は、本論で取り上げる不登校の場合でも同様であろう。現在は「不登校」で定着しているこの名称も、当初に誤解された「学校さぼり」や「退学」を除いても、「学校嫌い」「登校拒否（症）」「学校恐怖症」などの変遷がある。名称や呼称の変化は、社会的イメージに変化を与え、その背後には専門家による診断や援助法・治療法の変遷が伴っている（稲村，1994）。

不登校については、斎藤万比古・生地新（1996）をはじめ数多くの事例が発表されている。また援助法・治療法についても従来の援助や対応（内山喜久雄，1983）に加えて Hirschi, T. のボンド理論（social bond theory）（森田，2007）、side-by-side stance・群れ体験的アプローチ（鍋田，2007）、new object 論（乾，2009）等社会学から精神医療の領域まで大きな広がりを見せている。つまり、「不登校」はその原因や背景の如何にかかわらず状態像を表す名称であり、複雑多様なその原因や背景のどこに力点を置くかによって援助法に相違が生じている。

筆者は後述するように、その時どきの状況の中で心理臨床的要請にしたがっているが、基本的援助姿勢は Rogers, C.R. (1957 / 2001) の client centered therapy であり、個人に対するカウンセリング的援助によっている。

また、Erikson, E.H. のアイデンティティ（identity）論は、複雑多様な個人の感情や行動を、生理学的次元、心理学的次元、社会的・文化的次元と多層的に捉え、その一つが欠けても十分ではなく、この3次元は相互に心理－力動的（psycho-dynamic）に影響し合い、不可分の全体性をなしているとしている（Erikson, E.H. 1950 / 1977）。彼の人格論はライフサイクル（life-cycle）論として集大成されているが、発達歴史的相対性を免れず、その人間理解の基本的立場は現象学的統合性及び弁証法的全体性にあるといわれている

(Erikson,E.H. & Erikson,J.M. 1997 / 2001)。

一方、同じ Freud,S.の流れを汲み Erikson,E.H.と共に自我心理学を發展させつつ、とりわけ乳幼児期からの発達関連のなかで思春期・青年期に光を当てたのが Blos,P の第二の個体化過程であった(Blos,P. 1962 / 1971)。青年期の発達課題としてはアイデンティティが青年の心理社会的状況の説明に用いられる(鑑, 2002)のに対し、Blos,P.の第二の個体化は精神内界の発達課題として捉えられている。

思春期・青年期の心理的問題の検討には、前述したアイデンティティの概念、及び世代的・社会的課題の影響と共に、青年が親から精神的自立を果たす無意識的な過程と、その心理臨床的課題についての検討が必要と思われる。そのため本章では Blos,P の第二の個体化の概念とその先行研究について論述する。

なお Blos,P の第二の個体化の概念が発表されたのは 1960 年代であり、それに基づく研究も既に 40 年以上経過したものが主で、文献数も極めて限られていることを付け加えておきたい。

2.1.2 分離 - 個体化過程の概念とその変遷

小児科医・精神分析医である Mahler,M.S.は、母親との共生状態にあった新生児の精神内界での自己像と他者像(対象像)の分化と発達を、主に母親との相互的な関わりの中から把握することを目的に、精神分析的観点に基づく実証的な直接観察法を導入して乳幼児の内的世界を探究し分離 - 個体化過程(separation-individuation process)として提唱した(讃岐, 2004)。

その過程について Mahler,M.S.et al.(1975/2001)は分離 - 個体化以前を正常な自閉段階(normal autistic phase 生後最初の数週間), 正常な共生段階(normal symbiotic phase 生後 2～6 ヶ月), 個体化の過程を ①分化期(differentiation period 5～9 ヶ月頃), ②練習期(practicing period 9～14 ヶ月頃), ③再接近期(rapprochement period 14～24 ヶ月頃), ④個体化の確立と情緒的対象恒常性(consolidation of individuality and emotional object constancy 25～36 ヶ月頃)に分類している。

特に再接近期については、分離の意識が発達すると現実直面して全能感に満ちた幻想を保持することができず、自分自身の幻想と両親の全能に対する確信を放棄しなければならない。その結果分離不安が高まり、親の拒否に極度に敏感になる時期としている。この再接近危機に失敗した幼児は潜伏期及び思春期における境界例症候群に通じる可能性を挙げている。また分離個体化過程は生涯に渡って反響し続けると述べている。

近年の乳児研究では、自閉期、共生期の段階で既に乳児は母親の応答から間主観的に社会的関係性を確立するとの報告があり、Mahler,M.S.の記述の実証的難点が指摘されている(Stern,D.1985 /1989;Fonagy,P.2001 /2008)。

然し、分離 - 個体化理論は現在も青年期境界例の中核病理論の基礎となっている(渡辺,

2012)。また、分離 - 個体化論は対象関係を査定する心理学尺度の開発にも貢献し、発達の対象関係尺度、分離 - 個体化尺度およびロールシャッハ法における対象関係査定尺度等に寄与している(鈴木正義 1997;Kleiger,J.H.1999 /2010)。

2.1.3 分離 - 個体化の拡散が青年期におよぼす影響

Mahler,M.S. et al.(1975 /2001)の分離 - 個体化理論は後の精神分析に大きな影響を与え、特に再接近期の概念は Blos,P.や Masterson,J.F.の思春期・青年期心性と境界例病理論等へと展開を見せている(齋藤, 2002)。

Masterson,J.F. et al.(1980/1982)の青年期境界例患者の発達理論は、基本的には Mahler,M.S.に準拠した上で、境界例患者は再接近期に母親の支持が得られず見捨てられ抑うつに陥った結果、患者は対象恒常性を得られず再接近期に固着、発達停止に至ると述べている。

同時に境界例患者の母親の対応の特徴として、①子どもを非人格化し、両親や同胞のイメージを投影する,②母親自身の見捨てられ感情を防衛するために、子どもの個体化の動きを妨げる,③子どもが退行するなら応じ、分離 - 個体化しようとする支持を撤去する,等を挙げている。

その結果、境界例患者の母親像は報酬型と撤去型の 2 つの部分対象表象に分裂し、報酬型は愛情供給型対象関係単位(ROBU)となり、母親との再統合空想の持続のためこれを投影した相手に、退行的受動的行動を取ることで承認と支持を期待する。一方残酷で攻撃的な母親の部分対象と怒りに満ちた空虚な自己像からなる撤去型の対象関係(WORU)は、周囲に投影され内的なものとして体験されないと論じている。そして 24 時間の室内拘束(患者が望んだ場合のみ)から構造化された入院治療を行いつつ精神療法で、①試験期,②徹底操作期,③分離期,の段階を経る治療モデルを紹介している。

Kernberg,O.(1976/1983)も Mahler,M.S.の分離 - 個体化の理論で、母親表象の病的分離の発展は再接近期の病的解決の結果として生じ、そのことが小児と成人の境界例病理で中核的病因になると見なす自らの理論との一致を指摘している。

成田(1986)は境界例患者の理解に分離 - 個体化理論は有用なモデルとしているが、その問題点として境界例の病理を分離 - 個体化の再演ととらえて青年期固有の問題を見失う危険を指摘している。尾久・狩野(1986)も境界例の要因を過度に母親に帰している点を挙げている。

青年期の病因論について、小此木(1980)は乳幼児期決定論とは別に、各発達段階に発達上の作用を認める発達相対論の立場から、援助においてどちらの立場を採るかはその個人の状況によると説明している。

無意識過程には同様な心的メカニズムが働いているとはいえ、幼児と青年で親からの分離のあり方が異なるのはむしろ当然であろう。つまり分離 - 個体化の様相は、＜病理性＞

の観点のみでなくそれぞれの＜青年性＞の視点からも、同時に考察する必要がある。次章で青年期での個体化過程が具体的にはどのように行われるのか概観する。

2.2 思春期・青年期における第二の個体化

2.2.1 第二の個体化の概念とその変遷

思春期の精神力動について Freud,S.(1905/2009)は、幼児期の性対象を断念し新たに性器期領域下で対象を発見する対象選択の二節性と、その際における両親への近親相姦的空想の棄却及びその権威からの分離が行われることを指摘している。

Blos,P.(1962/1971;1985/1990)は思春期・青年期の過程を詳細に検討し、青年期の発達において内在化された幼児期対象から独立する過程を、Mahler,M.S.の概念を用いて第二の個体化過程(second individuation process)として提唱している。その内容は幼児的对象からの感情的解放に付随した心理的な構造的変化の達成であり、その目的は“家族の依存関係から脱皮し、大人の世界で一般的な社会のメンバーとなるために幼児期の縛りを緩めること”(Blos,P.1967)とする。

この青年期の発達課題の克服には、限度内での退行の必要性が指摘されている(Blos,P.1985/1990;馬場 2008)。Blos,P.(1967)は第二の個体化過程に退行が果たす役割について以下の4点を挙げている。

① 安全の拠り所となっていた潜伏期の自我状態、およびストレスのコーピング法を捨てさせる。

② 幼児期のトラウマ(trauma)の残余物や葛藤を引き出し、再現させる。

③ 幼児的な自我と欲動のポジションを回復させる。

④ 最初の分離 - 個体化段階の肯定的・否定的質を徹底的に引出す。

そしてこの退行する索引力と進歩する力動の弁証法的緊張関係を通して青年期的自我の再構造化が発生すると説明している(伊藤, 1980)。

その一方で Blos,P.(1967)は、青年の通常発達的な退行と疾病による退行の識別の重要性を挙げ、青年期臨床において最も繊細な課題であると指摘している。同時に青年の自我は親から離れる対象喪失とそれに伴う貧困化によって脆弱になるため、同世代との接触が不可欠であり、更に心理臨床は感情的養育を可能にすると述べている。

さらに Blos,P.は青年期を5つの時期に分類し、その特徴を退行の状況とともに精神力動的に以下のように説明している(皆川, 1980)。

(1) 前青春期 10～12歳頃

第二次成長による身体的変化に伴う欲動の増加により欲動と自我の均衡が不安定になる。

(2) 初期青春期 12～15歳頃

内的には幼児期の愛情・依存対象であった両親像からのリビドーの脱備給が始まり、家族外の交友関係と自己愛リビドーに変換される。同性の交友には自己愛的な選択が行われ、

性的な興味を共有するような同性愛的関係となる。この時期には万能感が高まり、現実検討識は低下する。

(3) 中期青年期または固有の青年期 15～18 歳頃

性欲動が異性に向かうとエディプス葛藤(Oedipus complex)が再燃する。性器的性欲動が両親に向かわないよう両親へのリビドーは更に脱供給され、その結果リビドーは自己愛に向かい、自己を過大評価または過小評価するようになる。同時に現実検討識はさらに低下、精神病と精神病様状態の判別が困難になる。自己の過大評価は権威への反抗として表現される。この一時的な自己愛段階を経て、異性愛を可能にするアイデンティティを獲得する。

(4) 後期青春 18～20 歳頃

この時期の発達課題として ①自我機能と自我の関心の安定 ②葛藤領域外の二次的自律自我の拡大 ③安定かつ非可逆的な男性性・女性性の確立 ④対象関係における自己および他者表象へのリビドー供給の安定化 ⑤精神装置の安定化 の 5 点がある。

(5) 後青春 20 歳～30 歳頃まで

後期青年期に合成強化された自我を中心に、パーソナリティの各部分間の統合を行う。

上記に加え、Blos,P.は青年期の一過性の混乱として 7 類型の青年期(典型的・長引いた・短縮された・見せ掛けの・外傷的・遅延された・失敗した)に分類し、短縮された青年期までは正常範囲としてそれぞれの特徴を記載している。また、Blos,P.の知見は現在日本の臨床的青年理解においても極めて有用であるとの指摘もある(五味, 2000)。

2.2.2 第二の個体化とアイデンティティ形成の関連

Brandt,D.E.(1977):宮下(1998)は Mahler,M.S.の分離 - 個体化と Erikson,E.H.のアイデンティティ形成の類似として“ある依存的な関係からの脱却と、その結果として分離した心理的実体として自分を見る”という中心的葛藤にあると指摘し、特に再接近期危機(rapprochement crisis)とアイデンティティ危機(identity crisis)の成果は両者とも最終段階に統合された感覚をもたらすと述べている。

アイデンティティ形成と第二の個体化との関連を検討するには、まず第二の個体化が青年にどのように意識されているか検証する必要がある。第二の個体化過程を質問紙によって実証的な検証を試みている研究はいくつか見られる。Levine,J.B.,Green,C.J. & Millon,T.(1986)は Mahler,M.S., Blos,P.の理論より青年の親からの分離の項目として ①養護 - 共生, ②のみこまれ不安, ③分離不安, ④要求否認, ⑤自己中心性, ⑥健康的分離. を想定した分離個体化尺度(Separation-Individuation Test of Adolescence:SITA)を作成している。

これを基に高橋(1989)は、日本の文化に合わない項目を除き、新しい項目を補った 100 項目からなる SITA 日本版(JASITA)を作成、小 6 から大 4 の 942 名を対象に施行し因子分

析を行った結果、①両親からの分離欲求、②対人交流の拒否、③うぬぼれ、④共生欲求、⑤分離個体化の達成、⑥友人関係の確立、⑦1人でいられなさの7因子を抽出している。さらに学年毎の考察として、「自惚れ」もChamもなくなる中3～高1・2が最も困難な状況となるも、大1からは第二の個体化が達成され自我が固定化し、危機的反応が少なくなることを指摘している。

山本(1993)は先述のJASITAを元に青年期の個体化過程と不安との関係について、実証的な観点から検討を行っている。第二の個体化達成は大学段階でその時期に入ると考えられるが、個体化過程のよりプリミティブな段階の青年の不安が人間的成長を抑制する不安と関連しており、移行対象としての友人関係を持つことが、分離不安を乗り越え、個の確立に向かう危機的過程に退行的不安を持ちにくくなると述べている。そして個体化の程度が進むにつれ、病的な不安(抑制不安)よりも成長を促進する不安(成長不安)との関連性が強まると指摘している。

井上・佐々木(1992)はMarcia,J.E.(1966)のアイデンティティ地位(達成・モラトリウム・早期完了・拡散)を参考に各地位と個体化の関連を検証し以下のように指摘している。

(1) アイデンティティ達成地位は、両親からの分離は果たしているようで親密さ欲求は低い、分離欲求はある程度の高さを維持し、のみこまれ不安はまだ残っている。他者との境界の確立がなされて、両親から友人への備給の転換も適切に行われ自我理想の形成が進んでいる状態である。

(2) 権威受容(早期完了)地位では、分離不安が強くのみこまれ不安が低いことから両親との心理的な共生状態が継続、非現実的な全能感に基づく自惚れが強い。友人関係に不適応感はないが、他者との境界が不鮮明で両親との共生関係を友人にそのまま適用しているため、強い葛藤を経験する事態に陥ると現実的対処の困難が予想される。

(3) モラトリウム地位では、アイデンティティ達成地位に移行する途上で自己投入の対象を希求している。自我理想を形成する上での友人の存在が必要な状態である。

(4) アイデンティティ拡散地位では、分離欲求と親密さ欲求共に高い。のみこまれ不安も分離不安も強いので、両親にアンビバレントな感情を抱いている。他者との境界を形成することに失敗、適切な友人関係が困難。周囲からの自己評価にも否定的な感じをもち、自我理想を形成できない。

質問紙による研究の多くは大学生で第二の個体化を達成するとの結果を提示しているが、それが真の達成であるか否かは臨床的に見ても疑問の余地がある。

一方面接と分離不安テストの併用によってアイデンティティ地位と第二の個体化の関連を調査したKroger,J. (1985)は、結果として愛着のスタイルと各地位との間に相関は見られなかったとしている。彼はこの一因に地域性も挙げているが、第二の個体化はそれだけ複雑微妙な歴史・文化的な様相もはらんでいるといえよう。

2.2.3 第二の個体化過程と家族との関連

青年期の第二の個体化と、家庭の状況および両親との関係性を検討している研究がある。鈴木乙文(1997)はアメリカの青年が家を離れても出戻るケース(home-returning)が多いことや、経済的事情により親の家から離れられない青年が増加している状況を示し、アメリカでは第二の個体化過程は青年が家を離れる課題の研究となっていることを紹介している。また、親の離婚群の男子には情緒的分離の困難さがみられたが女子は相対的に影響が少なかったとした Moore,D.& Hotch,D.F.(1982)や、離婚した親と青年期の子どもとの関係性の3パターンの提示(Smollar, J.& Youniss,J. 1985), また青年期の自殺は共生期への退行によって起こるとする(Wade,N.C.1987)等の研究も報告している。

Sabatelli,R.M.& Mazor,A.(1985):(岡本 1998)は第二の個体化が青年のアイデンティティ課題の達成に必要な不可欠であるが、その困難さは家族システムの分化のレベルに決定付けられると述べている。分化の高い家族は凝集性と適応性が適度な状態だが、分化の低い家族は情緒的反応性と融合の高さが特徴のため、青年の個体化は不忠実の行為と見なされ抑制されると指摘している。

Anderson, S.A.& Fleming,W,M.(1986):(岡本 1998)は家族の融合と三角関係の程度とアイデンティティ地位の相関を調べた結果、青年が知覚しているアイデンティティ拡散状態と、家族の分化の高低との高い関連があったことを指摘し、臨床的知見を支持している。先述の鈴木乙文(1997)によるアメリカの状況、および青年と家族との物理的な距離が、個体化が完全になる指標とはならないとの指摘(Sabatelli,R.M.,Mazor ,A.1985) (岡本 1998)からも、アメリカにおいても青年の第二の個体化が困難な課題であることは間違いないようである。

日本では、内藤・土屋(1995)は大学生青年の分離個体化と家族との関連について調査している。家族の「凝集性」が高得点だった青年は、低得点群の青年と比較して友人関係は安定し、両親からの分離欲求は低いものの親に対する親密性の欲求、うぬぼれ、共生欲求が強く分離個体化の達成が進んでいないとしている。

家族の「凝集性」の次元では、まとまりが良くないと考える青年の方が、第二の個体化過程のプロセスをたどっている現象が見られ、家族機能が良好だと考えられる家族という青年群の方が、個体化からみるとあまり望ましい状態ではない結果となったことを報告している。

金沢(1993)は日本の大学生の調査から第二の個体化の状態を家族システム理論の立場から検証し、日本人大学生の分離個体化には、家族システム論が指摘するほど家族の重要性は高くなく、また個人の分離度と家族の分離度の間に有意な関係が存在しない場合や、両者が相反する場合があることを指摘している。

伊藤・丸島(2006)は、親の養育態度と第二の個体化過程の関連について、大学生を対象に調査を行っている。その結果、父親の養育態度は受容的な態度であるほど、青年の「自惚れ」を強めると指摘、その理由を常に自己承認されるため青年は過剰な自信をもっている。

母親の養育態度は男女により異なり、男子の方が母親の養育態度を強く認識し、友人関係に移行する際に母親との関係が重要となる傾向が見られる。

また「個体化の達成」には母親の受容的な態度が重要とし、両親とも受容的な態度に加えて、干渉も拒否もしない適度な親子関係の重要性を指摘している。

さらに、ロールシャッハと TAT の図版を使用し、アイデンティティ地位それぞれの対人関係を検討した Donovan,J.M.(1975)等、投影法を用いて第二の個体化過程における親像の変化を調べた研究も行われている。

近藤(2010)は SHTT 法を用いて第二の個体化の達成群・自立群(達成群より親からの分離欲求および自己愛の高さが特徴的)・回避群が描く絵から検討を行っている。

達成群では人物に「笑顔」「対面」「同方向」が特徴的で、人物像の情緒的絆および肯定的な感情の共有と共に、両親からの適切な距離と友人との関係構築を示唆している。自立群は「人物の表情」に空白が多く「人物の相互作用」が葛藤的なことから、自立と見えるのは他者との関わりの否定と恐怖を示している可能性をあげている。

回避群は人物像を家・木から離れたところに配置し「空白の人間・棒人間」「付加物少」の特徴が見られることから個体化の危機により消耗しているが、それを回避、抑圧している可能性を指摘している。

また榊田(1996)は 10 名の女性に TAT を施行し、良い対象・悪い対象に分裂していた親像が、依存から自立する葛藤、親をモデルとした異性愛を経て統合された人間としての親を許容する過程を示している。

大矢(1999)も集団施行 TAT に見る親表象との関係から青年を「同一性達成地位」「積極的モラトリアム地位」「同一性拡散地位」の三群について、第二の個体化の状況について検討している。それによると「同一性達成地位」では親との現実的な関係が特徴的であり、肯定的感情を基調として、外的存在としての親への配慮が見られるとして、第二の個体化達成後の親像の特徴であると指摘している。

積極的モラトリアム地位では、「象徴的な親殺し」の課題に直面しているが、親像を全体像として体験できているとしている。しかし拡散地位群は親像に両価性の葛藤を感じるのが困難で、孤立と拒否のみで離脱の試みができない心的状況にあると指摘、拡散地位も個体化の過程にあるが、その親像はより分裂した対象であるため、分離の困難さとの関連を示唆している。

2.2.4 乳幼児期の愛着と第二の個体化との関連

愛着研究でも、乳幼児期の愛着の個人差が思春期・青年期以降に及ぼす影響について検討が行われている。愛着研究には膨大な資料があり、また我が国では愛着の概念自体が混乱している(Lewis,S.M.&Takahashi,K.2005/2007)ことから、本論文では主に乳幼児期の愛着が青年期以降に及ぼす影響に対する研究結果を中心に採り上げる。

既に Bowlby,J.(1973/1977)は個人の発達経路の決定要因として、アタッチメント対象からの分離や喪失の経験が唯一と考えるべきではないと警告しているが、従来の研究では、例えば乳幼児期に安定性愛着を示すと分類された子どもは、彼らが発達する際の生活の重要な領域においてうまく成し遂げる(Levy,T.M.&Orlans,M.1998/2005)と指摘する等、乳幼児期のアタッチメント・スタイルは固定的で成人期になっても強い影響を及ぼすとする文献が主流であった。しかし近年では、“アタッチメントが発達段階を通して変化しないと信じられていることは、アタッチメント理論の誤解の 1 つ”(Rholes,W.S.& Simpson,J.A. 2004 /2008)と指摘されているように、成人期でも愛着スタイルが変化する可能性が示されている。

Fonagy,P.(2001/2008)は、乳幼児期の愛着の状況とその後の予測については、数多くの研究があるにもかかわらず、縦断的調査においてはいずれも明確な結果を得ることは不可能で、愛着がのちの適応の基盤となる証拠とはならないとしている。

Cooper,L.M.et al (2004 /2008)も、青年期・成人前期のアタッチメントの個人内適応の効果については限定的な結果しか得られていないと指摘しており、遠藤(2007)は、従来の研究より乳幼児期のアタッチメント・パターンは、その後のパーソナリティ特性等のある程度予測するという結果を得てはいるが、同時にまず長期的縦断研究そのものが僅かであるとも指摘している。

Davila,J.&Cobb,R.J.(2004 /2008)は、乳幼児期と成人のアタッチメント分類との一致率を検討した長期縦断研究でも、極僅かな一致率しか見られなかったと述べている。高橋(2013)は乳児期から青年・成人期まで愛着の質を調べた大規模な研究の 10 例を紹介しているが、愛着の連続性には実証性証拠が乏しく、2 年以内は継続しても 15 年以上の連続性はなかったこと、むしろ養育環境が愛着の質を左右するという結果を報告している。

青年期・成人期を対象として、自己報告式を用いた質問紙調査によって実施された短期的縦断研究では、時間とともに愛着スタイルの変動性を示し、それらの発達時期における愛着スタイルの変化が示唆されたとしている(Davila,J.&Cobb,R.J. 2004 /2008)。

さらに高橋(2013)は自身の共同研究より、乳児期に不安定な愛着と測定されても、青年期にはその多くが安定した愛着に変化したと指摘し、その要因として本人自身の努力の可能性を示唆している。

また、成人期に愛着が変化する契機について Rholes,W.S.& Simpson,J.A. (2004/2008)は、自分自身やパートナーの行動が、現在の作業モデルと一貫しないと認知する場合に起

こると指摘している。それは人生の大きな移行期である場合が最も高く、愛着対象からの身体的・心理的分離、愛着対象との関わり方の劇的な変化、新しいアタッチメント的絆の形成を伴うと述べている。

これらの研究結果からも、乳幼児期の愛着は青年期以降も、そのパターンと質共に変化が顕著であることが窺われ、そこには第二の個体化が大きな契機になっている可能性が想定できる。

2.3. 女性のアイデンティティ形成とその様相

2.3.1 女性の第二の個体化過程の特徴

Josselson,R.(1973)は女子大学生 48 人の女性にインタビューを行った結果、女性のアイデンティティ発達の特徴として、女性のアイデンティティ形成には最大限に自己確認が可能な関係性が必要となる為、同一性形成と親密性形成の段階が併合していること、そして単なる異性関係を除いた親密な関係性がアイデンティティの強化の為に重要であると指摘している。

女性のアイデンティティ発達が男性と異なる経過を辿るとする記述は実証的研究にも見られる。高橋(1988)は同一性と親密性の危機の解決における性差を検討したところ、男性はアイデンティティ地位が親密性地位と連関するが、女性は連関が見出されなかったことを報告し、女子ではアイデンティティ地位の高低と親密性地位の高低が関連なく進展するとしている。

女性のアイデンティティ発達における親密性の重要性については齋藤(1990)も指摘しており、“基本的な女性同一性は母親との愛着や原初的親密性に根ざしている”と述べ、男性同一性を脅かす原初的な親密性が、女性同一性の基盤であることを指摘している。同時に女性の全体的なアイデンティティの実現には、原初の母子次元の未分化な関係様式からの親密性の質的変換の必要性をあげ、女性自身による関係性の直面化が求められるとしている。

女性の自立には、母親との関係性で親密さを維持しながらその質を変換するという困難な作業が必要になるが、岡本・上地(1999)の統計研究では、女性は青年期前期に一度崩れた理想的な母親イメージが、理解の深化により青年期中期に再度理想化されることを挙げ、女性は母親と密着した関係を維持しつつ成長すると指摘している。

また、杉村(1999)は、面接調査からその過程について、主に両親を含む家族葛藤が女性にとって重要な契機になるとして、更にその心的作業について ①両親との関係性の中で現れた自己の視点を他者との関係性の中で拡張、②自己の視点を他者の視点と突き合わせ評価し、価値判断および統合を行う、③両親との食い違いを相互交渉し、解決の手順を日常的に繰り返し、最終的に両親中心の関係から他者を含む関係へと、関係性の布置の再構築を行うと述べている。

しかしこの過程は容易ではなく、母 - 娘関係が葛藤的で第二の個体化が不完全に終わる状況も珍しくない。Josselson,R.(1973)は前述のインタビュー内容から被験者のアイデンティティ段階を早期完了群・達成群・モラトリウム群・拡散群に区分して分析した結果、各群の両親関係の特徴を以下のように挙げている。

(1) 早期完了群では母親との強い陽性一体感、家族外の世界への強い恐怖、葛藤への非洞察性、無意識下での強い攻撃性、仲間との関係形成の失敗が顕著である。

彼女らは自分が母親の望むようにあることを願い、彼女らに母親が満足するという関係性でのみ愛を感じる。娘との親密性と引き換えに排他性を要求した母親がいた可能性が示唆される。

(2) 達成群は両親への正と負の一体感を持ち、それによって自我と超自我構造の複雑さが増加する。

両親からの分離への罪悪感はあるが、同時に自らの人生を持つことに専心し、自分の能力を信頼し友人や恋人と進歩的な関係を築く。

(3) モラトリウム群では、母親に親密感を持っているが、分離に罪悪感を起こさせる母親に対する恨みと、母親が自分に払った代償への罪悪感の間に強い葛藤を抱えている。母親への依存を否認したとしても、その否認は母親への従属の感覚そのものが要因となっているので、結局母親と同様の行動形式をとる。

(4) 拡散群の女性は、基本的に両親と自分の過去を全否定しているため葛藤を意識しない。母親との関係では、陽性の一体感を形成できなかったか、あるいは理想化された母親と自分との違いに深く失望している。拡散群の両親は一貫性がなく日和見主義のため、娘たちは内面化された基礎が欠乏しており、反抗も分離も困難な状態である。

これらの指摘より、女性のアイデンティティ達成には、母親からの精神的分離が密接に関係している状況が見て取れる。女性のアイデンティティ形成には、母親からの分離と母親との親密性の発展という、相反する作業を同時に行う困難を乗り越えなければならない。

なお、Pine,F.(1985/1993)には早期の分離 - 個体化過程に基礎を持つ病理を抱えた女性の他者関係について、臨床例を提示した論考がある。

2.3.2 女性の第二の個体化過程の問題点

女性の第二の個体化が困難な要因については諸説あるが、まず Freud,S.(1905/2009)は女兒のペニス羨望(penis envy)を指摘し、母が自分に完全な性器を授けてくれなかったという女兒の非難が母親からの離反に繋がると述べている(Freud,S.1931/2011)。

この理論に対する批判は少なくなく、例えば Horney,K.(1926/1971)は女性の社会的状況の不平等さの影響を指摘する等、当時の男尊女卑的な思想とされることも多い。然し Mahler,M.S. et al.(1975/2001)は再接近期の末期の幼児観察において、特に女兒はペニスを発見することで自分の不完全さに衝撃を受けるとした上で“性差を発見して、女の子は

母親を非難し、母親に要求し、母親に失望し、にもかかわらず両価的に母親に結び付けられる傾向がある”と記述し、分離した個体になる課題は、女兒にとってはより困難になる可能性を示唆している。

また Josselson,R.(1973)は、両親を喜ばせることは女性の早期の超自我形成に重要であるが、青年期の自立にはこの自己愛の断念が必要で、その喪失により失敗の経験に対し脆弱になると述べている。更に女性は、家庭的であることや養育の価値について母親よりその本質を実感するため、その母親像を統合できないのはアイデンティティ拡散に繋がるとの指摘もある(Josselson,R. 1987)。その一方母親は、中年期のアイデンティティ危機を抱えており(岡本, 1985)、状況によって母娘の関係は更に複雑な様相を呈する可能性がある。また別の視点から高橋(2013)は、Bowlby,J.の愛着理論の欠陥として「母親偏重」「幼児期決定説」「世代間伝達」を挙げ、その要因として Bowlby,J.自身が家父長制イデオロギーに影響されており、殆どが男性だった当時の心理学者も同様に家父長制イデオロギーに拠ったデータ解釈を行っていたこと、それは同時に性的役割の分業で生産性向上を意図する当時の施政者の価値観と一致していた点を指摘している。その結果、現代社会に「母性は本能」「母親は自分を犠牲にして子どもを育てる」等の“幻想”が生まれ、母親は育児に過剰な不安を抱えるようになり、その不安を自分の母親の育児のせいにする問題が現れたと指摘している。

母娘問題は、単なる心理的要因に止まらず、研究者の姿勢のみならず、生み出された知見の影響を受けた現実の母娘関係にまで、伝統的価値観や社会的風潮、政治的動向にも左右されており、女性の第二の個体化過程の様相をより複雑にしている。

2.3.3 女性の第二の個体化を促進する心理的援助

これまでの女性の第二の個体化をめぐる研究より、①青年期のアイデンティティ形成と第二の個体化との関連 ②第二の個体化過程の年齢的推移とそれに伴う親像の変化 ③第二の個体化を促進させる家庭状況と親の対応 ④女性のアイデンティティ形成過程の特徴とその課題.の4点が明らかとなった。しかし、第二の個体化過程の詳細な経過と、その過程が進捗する具体的な契機、更に促進に効果的な臨床的対応についての知見等については、未だ大きな検討の余地がある。

また同時に、上記の結果を研究法の視点から概観すると、その多くは先ず質問紙調査法の試みがあり、それに投影的手法が加味され、面接調査も工夫されるがそれらは、研究資料収集のために暫定的になされたものである。長期間の臨床実践から生まれ育ったこの概念の探究は、高橋(1984)の指摘のように、長期的・継続的面接以外の試みでは困難であり、日常の丹念な臨床的実践活動の中にこそあるといえる。

思春期・青年期女性の第二の個体化がテーマと考えられる事例研究は、筆者が確認した範囲では井梅(2007)、小野田(2006)、田村(1996)の3事例があり、そのうち田村について

馬場(1996)は、CI.の情緒的関わりへの抵抗を指摘している。医療でも分離 - 個体化の概念は活用されているが(小橋・武田 2010)、重症例は病状の沈静化が主であり、思春期・青年期独自の心的状況も見通し難い。

篠原(2012)は青年期女性との約 10 年の心理面接過程から、第二の個体化の進捗により母親との関係性が ①陰性感情および怒りの自覚→ ②葛藤の体験とその行動化→ ③新たな母親像の発見→ ④愛情希求の洞察と諦め→ ⑤承認と敬愛、と変容発展する過程を記述し、それに伴う母親、および筆者との関係性の変化をも考察し検討している。

このように長期臨床事例について、第二の個体化過程の検討を積み重ねることにより、その進展の様相および進展を阻害する要因、さらに個体化過程を促進援助する対応の検討が可能になるであろう。

また女性の第二の個体化にはエディプス葛藤や対照視(西平, 1990)等、父親が重要な役割を果たしているとの示唆もある。これらの点を踏まえつつ、更なる研究を進める必要がある。

2.4 本研究における第二の個体化過程の検討について

2.4.1 従来の研究の問題点

これまでの先行研究を概観し検討した結果、第二の個体化過程研究の問題点として以下の点が指摘できる。

1. 両親からの分離の質が問われていない。

自己申告による質問紙調査の限界については、先述の高橋(1984)の他、アタッチメント研究者によってもその信頼性に疑問が出されている(Davila,J.& Cobb,R.J.2004/2008)。質問紙による調査では、言うまでもなく被験者が意識して回答出来ている自分の状態しか測定することができない。先行研究において、第二の個体化過程がほぼ18歳で達成されるという研究結果からは、被験者が両親から真の意味で心理的距離を取れるようになったか否かが不明である。親子関係の問題そのものの否認や、大学進学等により家族から物理的に離れたことで一時的に親子関係の問題が回避され、それを心理的距離が取れたと錯誤している場合や、或いは質問から研究者の意図を読み取り、周囲(研究者)が年齢にふさわしいと期待する答えを予測して記入している可能性も否定できない。青年が両親からただ物理的に距離が取れたことに意味があるのではなく、むしろ「どう離れたか」(外的)と同時に、「いかに離れたか」(内的)という質的側面にこそ焦点を当てることが必要である。

2. 青年自身の言葉での記述が不足している。

アイデンティティ形成の研究では、該当する個人へのインタビューを実施しその過程を検討する研究が数多く行われている。特に Josselson,R.(1973,1987,1996)は同一の女性に年数を経てインタビューを試みており、その変遷の様相は貴重な資料となっている。

然し無意識的な要因が大きい第二の個体化過程については、数回のインタビューでは把握が困難と思われる。両親からの分離の問題は、非常に私的かつ微妙で、人間性に関わる重大な意味をもっており、個人によってはそれを意識化するだけでも強い不安や葛藤が喚起される。その上その状況を第三者に伝えるにはそれなりの緊張や勇気が必要であり、場合によっては大きな痛みを伴う可能性さえある。実際に Josselson,R.(1973)の論文でも、両親からの分離を女性達自身の言葉で記載している個所は極めて稀である。

それらの危険を乗り越えて被験者が両親からの分離の過程を語るには、面接者との信頼関係のみでなく、長期的な時間経過が必要である。

3. 「青年自身の主体的な生き方」の視点が希薄である。

青年が両親から自立するためには、自らの人生を生きる自覚と決断がなければならないが、そのためには両親とは異なる独自の青年自身の価値観を持つことが必要である。青年自身が自分の価値観による選択が可能になって初めて個体化が達成されたとと言える。

然しそれは前述の統計による研究や、インタビュー等の調査では困難である。

2.4.2 事例研究法を採用する理由について

Blos,P.(1967)は、その論文中で青年期の第二の個体化過程を検討するため男性3名・女性2名の計5事例をあげ、そのうち分離が未分化な青年が危機的状況に陥った3事例と、青年期に特徴的な退行状態にあった2事例を簡潔に記載しているが、そのうち1事例に年齢の記述があるのみで、具体的な家族状況等や面接経過は全く記載されていない。そのため青年たちが個体化を達成する具体的な経過や、Th.との相互交流の状況は殆ど不明のままである。また、個体化過程の性差についても女性の方が、葛藤が身体化され易いとの指摘があるのみで、それ以上の記述は見当たらない。

また、Josselson,R.(1973)のインタビューでは、Josselson,R.自身も論文中に記述するように、彼女たちがそのアイデンティティ状況に至った葛藤や契機等は語られていない。これは女性たちがあくまで自らが意識できる範囲でしか話をしていないことや、数回程度のインタビューではその女性の詳細な家庭状況の把握が不可能だったこと、更にはインタビューアと十分に自己開示できる程の関係性を持つのが困難だったことが推察できる。

そのため本研究では、青年の第二の個体化過程の解明には、分離の長期的・具体的な経過と、それに伴う家族等の関係性への検討こそが最も重要であると考えた。同時に2.1で指摘した従来の問題点を満たし、思春期・青年期女性により効果的な心理臨床の在り方を考察する上でも、事例研究法を採用することにした。

2.4.3 本論文の事例研究法の理論的背景

本論考が事例研究法の立場に立つことは、同時に第二の個体化過程の先行研究を広く概観した結果である。心理臨床的援助関係そのものから生まれた臨床的知見は、同様な、つまり長期的な継続的援助関係の中で〈臨床の知〉として、捉えるのが妥当のようである(中村,1992)。河合(2003)は事例研究法の意義を臨床の知として詳述しているが、ここでは本論考における観点として、以下の5点を挙げる。

1. 先ず本論文の事例研究法の基本的概念はSchön,D.A.の〈反省的実践(reflective practice)〉である(Schön,D.A.1983/2001)。事例研究の理論的枠組み(paradigm)として、問題の把握や状況との対話による省察というこの実践知は、単なる技術論やその伝達論に止まらず、臨床実践における対象との相互関係性(mutuality)にも及ぶところに大きな特色があり、欧米の対人援助関係の諸領域に強い理論的影響を与えている。

2. 各事例の面接(援助)、及び考察の展開は弁証法¹に基づいて記述する。

Freud,S., の精神分析を始め、Rogers,S.,Gill,M.M., Kohut,H.等の心理療法の統合的ア

¹ 元もとは古代ギリシアにおける問答、対話の技術を意味するデアレクティケー・テクネー(dialectike techne)に由来し、ソクラテスによって真の知に至るための問答法として位置づけられ、更にはプラトンによって知に至る最高原理とされた。従って、第1次的意味は対話の成立条件として、人々が随順する規範的法則といわれている(上山,2005)。

ブローチは弁証法によることは多くの研究者が指摘している

(Ellenberger,H.F.,1970/1980; Greenberg,L.S.et al.,1993/2006; Kahm,M.1997/2000)。

既に篠原(2010)は弁証法による事例の考察を試みている。本論文の事例も弁証法を用いて記述することで、Blos,P.の第二の個体化過程の展開がより明確になると思われる。

3. 更に、本研究で行う質的研究法の理論的背景として、〈発想的推論〉とも邦訳されているアブダクション(abduction)がある。abductionとははアメリカの論理学者で、弁証法的論理学の科学的再編成で成果を上げた Peirce,C.S. (1960)によって提唱され、科学的探究法のひとつとして定式化されている。帰納法(induction)はそれぞれ個別の具体的事実から、合理的整合性のある一般化を試みるのに対して、アブダクションは事実レベルでは導きえないような別次元への飛躍を含んだメタ認知とも言われている(米盛, 2007)。

Abductionが採用された研究法としては、川喜田(1970)の〈発想法〉におけるKJ法はよく知られている。また乾(2009)の思春期・青年期の精神分析的アプローチもAbductionを背景にしている。本論考での援助過程全体を俯瞰する図式化は、その一つの試みである。

4. 事例中の思春期・青年期女性の生活感情、即ち気分の解明には現象学的²探求を行う。哲学史において弁証法を定式化した Hegel,G.W.F(1832/1998)の書名が「精神現象学」であるように、現象学は弁証法と重なり、更により根源的な研究姿勢といわれている

(Ellenberger,H.F.1958/1977)。精神分析との関係は、精神活動の志向性(intentionality)を提唱した Brentano,F.の哲学を、Husserl,Eは意識の志向性として追求したのに対し、Freud,S.は無意識における志向性として探求している。共に人間の現実的意味性を求め、人間存在そのものを捉える努力をした点では同一の基盤に立つものであるとされている(五味, 1975)。また、思春期・青年期の生活感情の特質は愛や憎しみといった<対象感情>にとどまらず、退屈や不安という<状態感情>であり、それはそのまま<人間存在の現象学的情態性>を示している(五味, 1988)。

特に Cl.-Th.関係における陰性感情は、停滞ないしは混乱した相互関係性を、そのまま表出する現象学的情態性であるだけに、本論文では Cl.-Th.間の関係性そのものの重要な指標として考察する。

5. 面接(援助)構造³をできるだけ詳細に記述する。

² 最も広義には、人間の精神活動、特に意識や感情の特質は、<究極的には何かを必ず目指している>志向性として捉え、その意味と構造を追及するという思想的立場。表面的な現象のみを扱う現象論ではなく、<現象を通して本質へ> せまる態度を指す。

Rogers,C.R.(1957)の共感(empathy)を初めとする受容(acceptance)の概念は明らかにその影響を受けている。精神医学との歴史は古く Binswanger,L.(1947)の『現象学的人間学』や Tatossian,A.(1979)の『精神病の現象学』、更には Putnam,F.W. (1997)『解離 - 若年期における病理と治療』がある。これは本学大学院永井徹ゼミ(2014年後期)のテキストとして使用されている。

³ 援助構造(structure of psychotherapy)は、心理療法やカウンセリングにおいて Cl.-Th.の交流を規定する様々な要因や条件の構造総体を指し、意図的に設定された空間的、時間的な条件及び Cl.-Th.の交流を規定する面接ルールなどの枠組みをいう。

援助構造は内面的なもの(外的援助構造)と外面的なものに分けられ、外面的援助構造には、①Cl.-Th.の組合せ(個別か複数か等)、②場面設定(面接室や場面の状況等)、③Cl.-Th.の位置関係(対面式、90度式等)、④時間構造(回数、時間、期間等)、⑤有料・無料等があり、内面的時間構造には、①援助契約、②面接ルール、③秘密の保持、④禁欲原則(行

面接(援助)構造は援助関係の前提となる援助関係を構成する基本的条件を作り出し、Cl, の心理的成長を抱える心的環境機能を担うと同時に、時間経過に伴う内面的な心理・力動性の変動を捉えるために必要である。

従って、本論文ではこうした援助構造を出来るだけ詳細に記述した。また同様の観点から総合考察において面接(援助)プロセス検討をする条件として、Cl.-Th.関係の中心にある転移状況、それも筆者の陰性感情も含めた両者の気分や感情の流れの図示を試みた。

2.4.4 本研究における第二の個体化過程完了の特徴

また、各事例を比較検討するに当たり、第二の個体化過程の特徴についてその要点を提示しておく必要がある。Blos,P.(1967)は、第二の個体化は相対的な概念とした上で、事例を通してその過程完了の特徴として以下の点を挙げている。

1. 発達に寄与する退行によって、親イメージ及びプレエディパルの緩和、アンビバレントな対象との関係に修正と識別が再体験できるようになり、幼児期の全能であった親は青年期の子どもによって誤り易さの認識と virtues(気力・活力)によって人間化される。
2. 心的な再組織化が行われると、青年は鮮明な自己の感覚及び“これが私だ”という確信に満ちた主観的体験がある。これは自我の識別が明らかになったことの反映である。
3. 何よりも天職(vocation)⁴の選択は、第二の個体化過程の最終的で明確な具体化されたものである。

また Erikson,E.H.(1959/2011)はアイデンティティ拡散の防衛として若者の不寛容を指摘し、寛容であるためには以下の7点において確信をもつことが重要としている。

極めて日常的で具体的なので列記しておく。

① 自分は男性・女性である。 ② いつか必ず一つに統合的、魅力的人物になる。 ③ 自分の欲動をコントロールできる。 ④ 自分が何者であるかを理解している。 ⑤ 将来自分がどうなりたいか知っている。 ⑥ 自分が他人の目にどう映るか知っている。 ⑦ 悪友、性的パートナー、指導者、キャリアの影響を受けずに、独自に正しい決断ができる。

これらより、①~⑦を踏まえつつ、主な特徴を(1)~(3)として、各事例の第二の個体化過程の状況を考察する。

2.4.5 研究方法

先行研究の検討と本章の論述を踏まえて、本論文では臨床事例研究を以下の手続で行う。研究対象事例の思春期・青年期・成人期女性の計7事例の様相とその基本資料を表1に示

動化の禁止等)などがある(乾, 2002)。

⁴ Work(辛い労働)や labour(苦しい仕事)に対し、vocationは一般的に天職と訳され、その語源はラテン語 vocare(ボカーレ)の vo(声)から派生している(シブリー英語語源辞典 大修館書店)。即ち、天の声に呼びかけられて、自分の能力に相応しいものとしてその人の生きがいとなる職業という意味があり、profession(専門職)、occupation(職業)とは明らかに異なる含みがある(新明解国語辞典 三省堂)。

した。

1. 主訴が不登校、あるいは引きこもりであった思春期・青年期女性の事例より、経済的状况がある程度整い、同時に筆者が長期に渡って援助が可能であった 5 事例を提示し、その記録に基づき女性の第二の個体化過程の視点から再検討を試みる。その事例中で、両親・兄弟・姉妹・筆者に言及した Cl.の陳述と、筆者側の心情と対応について記述し、その関係性の変化を構造化し図式化して提示する。

また、青年期を過ぎた成人期の第二の個体化過程の状況も検討するため、成人期女性の事例 2 事例を比較提示し、同様に家族への Cl.の発言と筆者の心情を記述し、図示する。

2. 前述した第二の個体化の特徴に基づいて各事例を検討、Cl.と両親との関係性の変化と援助関係における筆者の役割について、緩やかな仮説的推論(abduction)を見出す。

3. 思春期・青年期及び成人期について、それぞれ娘 - 母親関係における分離 - 個体化過程の構造、およびその心理的力動をとらえ検討した後、各事例を通して、女性の第二の個体化過程の特徴について検討、アイデンティティ形成との関連について考察する。

最後に、第二の個体化を効果的に促進する筆者の援助促進的態度および具体的対応について論及する。

なお、各事例の年齢的区分については 2.2.1 に記載した Blos,P.の知見を参考に、本論文では便宜上それぞれ思春期(12～15 歳頃)・青年期(15 歳～25 歳頃)・成人期(30 歳以降)とした。

2.4.6 (補註) 事例記述について

(1) 本論文の事例記述について際して、各事例の全ての来談者もしくは被援助者については、本人および保護者の承諾書を得ている。

(2) 固有名詞は全事例を通してアルファベット順とし、固有名詞のイニシャルではない。また特定個人を想定できるような情報も殆ど省いた。但し、学外へ発表する場合は人権擁護の立場から、更に個人情報制限をすることがある。

(3) 会話部分の記述については、非言語の雰囲気をも表現するために、できるだけ本人の口調を生かした。

また事例記述の繁雑さを避けつつ、ニュアンスや雰囲気を伝える為に次の工夫をした。

① 常用漢字以外の漢字、及び常用漢字の音訓以外の読みも採用した。

② 外来語のみではなく擬態語、擬声語、また強調表現等もカナ書きにした。

③ 感情表出等については、非言語の情報も出来る限り記述するように心掛けた。

(4) 事例記述の語彙の表記については、主に『新明解国語辞典』 第 6 版(三省堂 2012 年)、『広辞苑』 第 6 版(岩波書店 2009 年)を、また必要に応じて『類語国語辞典』

(角川書店 1985 年)、『類語例解辞典』(小学館 1984 年)等を参考にした。

(5) その他、「心理臨床学研究」(日本心理臨床学会)及び「精神分析研究」(日本精神分析学会)の執筆要綱等を参考にした。

表 1 本論文対象事例と その基本文献資料

対象事例	年齢	主訴	面接(援助) 期間	援助 形態	使用した文献資料
第 1 事例 A	10 代	不登校	3 年 7 か月	治療的 家庭教師	篠原恵美(2002) 心理臨床的視点による家庭教師の援助 東京学芸大学大学院教育学研究科 修士論文 篠原恵美(2004)
第 2 事例 B	10 代	不登校 ・ ひき こもり	3 年 8 ヶ月	治療的 家庭教師	準専門家による訪問援助の実践的研究 カウンセリング研究 37(1) 64-73. 篠原恵美(2005) スクールカウンセリングにおける手紙の 活用とその限界 山梨英和大学心理臨床 センター紀要, 1,4-13.
第 3 事例 C	10 代 前半	不登校	8 年 10 ヶ月	心理面接	篠原恵美(2010b) 主訴の多層性およびその援助過程につい ての弁証法的考察 心理臨床学研究,28(3) 291-302.
第 4 事例 D	10 代 後半	ひきこ もり	10 年 8 ヶ月	心理面接	篠原恵美(2012) 青年期女性のアイデンティティ確立過程 における青年 - 両親関係の発展 - 長期間援 助関係の変遷を省みて - 心理臨床学研究,30(3) 331-343.
第 5 事例 E	10 代	不登校	3 年 4 ヶ月	治療的 家庭教師	篠原恵美・佐野秀樹(2002) 精神疾患を抱える生徒に対する治療的家 庭教師 - その援助関係と実践的視点 - 東京学芸大学教育学部附属教育実践総合 センター研究紀要, 26, 153-163.
第 6 事例 F	30 代 後半	夫婦 関係	6 年 10 ヶ月	心理面接	首都大学東京・筑波大学 合同カンファレンス発表資料(2013)
第 7 事例 G	40 代 前半	職場の 人間 関係	4 年 11 ヶ月	心理面接	首都大学東京臨床 カンファレンス発表資料(2012,2013)

第 3 部 臨床事例研究(要約)

本論の臨床事例及び成人期事例においては、本人が特定されない配慮を条件として、全ての事例該当者からは許可を得た上で面接経過の詳細な記述をしている。然しインターネット公表にあたり、該当者の個人情報を更に保護するために要約する。

第 1 章 第 1 事例

A 援助開始当時 10 歳代 不登校 援助期間 3 年 7 か月 総援助回数 325 回

中学入学後 3 か月して電車に乗れなくなり不登校状態となり、高校生の時に家庭教師の依頼があり、再登校と不登校状態を断続的に繰り返して留年のあと高校退学、大検合格、大学進学に至っている。

第 2 章 第 2 事例

B 援助開始当時 10 歳代 不登校・ひきこもり 援助期間 3 年 8 ヶ月 総援助回数 99 回 手紙 23 通

中学で不登校となり、3 年ほど自室にひきこもった後、登校する意欲を見せ、家庭教師を希望。家庭教師実施 3 か月後に再び不登校となったが、約半年間援助者が週 1 回手紙を送ったことで援助が再開され、通信制高校に入学し短大進学へと至っている。

第 3 章 第 3 事例

C 来談当時 10 歳代前半 不登校 面接期間 8 年 10 ヶ月 総面接回数 104 回

7 歳の時に父親が死亡。中学生の時より断続的な不登校状態となり、本人の意思で面接を開始。その後高校に進学したが中退、通信制高校を経て留学、通訳等の仕事を経て海外の企業に就職している。

第 4 章 第 4 事例

D 来談当時 10 歳代後半 ひきこもり 面接期間 10 年 8 ヶ月 総面接回数 371 回

D は高校生の時に進路が決まらないことを主訴に来談。D は権威主義的な父親に自分の進路が認めて貰えないことがきっかけで勉強する意欲を失い高校卒業後はひきこもりになる。面接開始後 5 年目からアルバイトを始め、資格を取得、正社員として就職する。

第 5 章 第 5 事例

E 援助開始当時 10 歳代 不登校 援助期間 3 年 4 ヶ月 総援助回数 323 回

E は中学で不登校状態となり、ある事件を起こし緊急入院。医師は統合失調症の疑いありと診断、通院とカウンセリングを並行し、援助者が家庭教師を担当する。家庭教師を開

始して1年経過、ある程度の学習も可能になるが父親が彼女の精神科医療を妨害したことで急激に病状が悪化する。結局父親の妨害は3年間に4回におよび中断に至る。

第4部 成人期事例(要約)

第1章 第6事例

F 来談当時 30 歳代後半 夫婦問題 面接期間 6 年 10 ヶ月 総面接回数 175 回

主訴は離婚裁判の心理的サポート。**F** は子どもをつれて実家に別居後、夫が親権を訴え裁判を起こす。数回の親権の再審査の後、離婚が成立し終結している。

第2章 第7事例

G 来談当時 40 歳代前半 対人不安 面接期間 4 年 11 ヶ月 総面接回数 221 回

職場の人間関係の問題を主訴に来談。人格障害の疑いありと診断され通院と並行で面接を開始。母親への強い恨みを訴える中で次第に自己洞察が深化、親子関係の再構築が進む。

職場の人間関係も安定化して終結に至っている。

第 5 部 総合考察

5.1 第二の個体化過程における青年 - 両親関係の変遷とその特徴

5.1.1 各事例の状況の概要

1. 各事例の家庭状況について

最初に、3, 4 章での各事例の家庭状況について概説する。個々の状況は事例の考察において詳細に述べた通りであるが、共通点として以下の点が指摘できる。

- (1) 家庭の状況は経済的には中程度かそれ以上であった。また程度の差や方向性の違いはあっても、Cl.の援助・面接にはおおむね協力的であった。
- (2) 両親の学歴は全て高卒以上で、娘の教育にも熱心であった。また各家庭によって程度の差はあったが娘の学歴にも拘りを見せていた。
- (3) 父親は全員就職し定収入がある。F, G の父親は既に退職していたが、それ以前は定職についていた。
- (4) C を除くケースの兄弟・姉妹には同性(A, D, G)・異性(B, E, F)が居るが、全てアンビバレントな関係、もしくは疎遠な状態。仲が良く親密と見えた兄弟姉妹関係は皆無であった。
- (5) 父親が再婚の家庭は 2 ケース(B, C)あったが、母親は全て初婚であった。また父親の死去により母親のみ(C)の場合を除いて、原家族が離婚しているケースはない。
- (6) Cl.の両親の夫婦関係の状況については、Cl.自身が両親を、「仲が良い」と語ったケースは皆無であった。A, C, E は両親の関係そのものについては全く触れず、B, D はその男尊女卑的な関係性への怒りを現し、F, G は両親のアンビバレントな状態についての葛藤を語っている。

また、各事例の特徴として以下の 2 点がある。

- (1) A, B は父方家族との三世同居。C は母親と本人のみ。D の家庭では姉は独立し、両親と同居していた。E の家庭では兄は下宿し両親と同居。F は来談以前は夫家族と同居し、夫と別居してからは両親・息子 2 人と同居。G は独り暮らしである。
- (2) C, E の家庭は就労しなくても家族成員が生活できるだけの十分な経済力があった。

2. 各事例の病態水準について

A～D, F のうち精神科を受診していたのは A, C, F であるが 3 人共に特に医師から診断名を告げられていない。A, C は投薬を処方されず、F は睡眠導入剤のみであった。

E は統合失調症との診断を受け、約 3 ヶ月間の入院歴がある。継続的な通院と投薬が必要な状態であった(E については 3.5.8 参照)。G は人格障害の疑いありとの診断を受け、

面接開始後約 1 年間は通院・投薬治療を続けている。

5.1.2 Cl.の自己理解の変遷とその特徴

1. 面接(援助)の停滞について

ある一定期間の面接(援助)の停滞については、全てのケースで見られている(表 19 参照)。その内容については ① 実際の援助中断・面接キャンセルの連続(B, C) ② 状態の停滞(A, D), 同様の面接内容の繰り返し(A,D,E,F,G) ③状態の不安定さ(F,G) 等が挙げられる。

また、面接(援助)開始状態に顕著な停滞が見られるケース(B,C,E,F)と、面接(援助)がある程度進捗してから停滞と言う形で抵抗が現れるケース(A,D,G)があり、前者は筆者との関係性を持つことに対する不安、あるいは主訴に直面する不安が影響していると考えられ、後者は面接によってある程度の心理的安定を得た後、より潜在的な問題が顕在化しそれを回避、あるいは否認しようとするような停滞(stagnation)が見られる。

また面接回数の頻度から見ると、面接(援助)予約を殆ど休まずに継続するケース(A, D, F,G)と、キャンセルを挟みつつ面接から面接の間を長く取るケース(B,C), 病状により突発的に援助をキャンセルするケース(E)があり、恐らくその Cl.の性格傾向と洞察の特徴によって面接頻度が決定されてくるのではないかと思われる。

2. 面接が変化した契機について

第 3 章、第 4 章で挙げた各事例の面接(援助)過程における自己理解の特徴を表 19、面接(援助)が変化した契機を表 20 に示した。Cl.が大きく変化する時には、E を除く全てのケースで対象喪失と、それがもたらす幻想の崩壊が見られている。

このうち明確に自らの対象喪失と幻想崩壊の過程を語っているのが C, D, F, G である。また A は、退学したら協力できないとの母親の言葉にショックを受けたと語り、その後は積極的に受験準備の活動を始めている。B もペットの猫の喪失を悲しむが、やがて捨て猫を保護するボランティア活動を開始していることから、A と B は言葉で詳細には語らないながらも行動で喪失を乗り越えようとしたことが推察できる。

喪失の対象の多くは両親である。それは Cl.が面接(援助)を継続し自己検討が深まると、それまで自分が抱えていた両親イメージについて矛盾が生じ、それが両親のある言動、もしくは出来事を契機に一気に顕在化して、両親への幻想が崩壊しそのイメージが激変すると考えられる。対象喪失の状況を見てみると、主に以下の 5 点が挙げられる。

- (1) 自分と一体であると感じていた親が、自分とは違う存在であると実感する(A, D, F)
- (2) 親に過大なイメージを抱いていたことに気付く(C, D, F, G)
- (3) 自分を脅かす、あるいは傷つける存在と思っていた親が、そうではないことを洞察す

る(D,F,G)

(4) 親への無意識的敵意と、それによる自責感を洞察する(C)

(5) 親への願望を諦める(C,D)

これらの幻想の崩壊によるイメージの変化には好転、暗転の両方と共に失望と発見が同時に見られ、結果的に Cl.の両親イメージの人間化を促進している。

また人間以外の移行対象を持っていたのは B, C, D, E である。このうち B は実際に対象を喪っているが、事例中にある通りその喪失により自分の幼児期自我から離脱し社会的活動を開始する契機としている。C, D は親イメージの崩壊及び分離が進むと移行対象への執着を語らなくなり、分離不安への防衛が最早必要でなくなったことが読み取れる。

7 事例の中で唯一対象喪失を体験しなかったのは E だが、彼女を取り巻く環境下では喪失を意識できるだけの心理的余裕を持てなかったこと、そして崩壊を体験できるだけの両親イメージすら持てて居なかったのではないかと考えられる。また実際に父親が死去していた C の父親イメージは、当然のことながら著しい理想化が見られ、分離は困難を極めた。彼女の喪の仕事と喪失受容の過程については第 3 事例の考察に示す通りである。

3. 面接(援助)過程に見られた特徴的な Cl. の感覚

(1) 空虚感の洞察

空虚感については D,F,G の 3 人が面接中で指摘しており、それぞれ「自分が空っぽ」(D,F), 「自分が貧しくなっちゃった」(G)と非常に解りやすい表現をしている。

その内容を更に詳細に検討すると、D は学校という限定された世界での評価が無くなったことでその空虚さに気づき(「優等生とか、成績がいいとかの飾りがなくなったら、自分は空っぽだった」#84)、さらにそれが分離不安(separation anxiety)からくる父親への服従がもたらしたことを洞察している(「父に見捨てられたくないと言う気持ちがある。でも父の期待に応えてばかりいたから…自分のやりたいことが解らなくなってしまった」#209)。

また F は、自分の空虚さを埋めるため過剰に努力してきたと語り(「自分がカラッポで、何でも中に詰め込みたいと思って居たけど、消化する時間が今は欲しい」#104)、その理由について父親の理解への希求を挙げている(「父に解って欲しいというのが凄くあったから」#104)。

G は自らの空虚さの要因が親への恨みであると明快に洞察し(「ずっと親を恨んで、何かあるとすぐ親のセイにして、怖がって世の中見ないようにして…そうやってきたから、私の人生貧しくなっちゃったと思いますね」#215)、その恨みは親が親らしい態度を取らず自分の愛情希求を満たしてくれないからだとして述べている(「母が母らしい対応をしてくれないと頭に来る。母が満たしてくれないのは酷いと」#74)。

表 19 各事例の面接(援助)における自己理解の特徴

	面接(援助)過程における停滞状況	空虚感の洞察	全能感の洞察	主体的自己の感覚について
A	登校及び心理的状態の停滞 (142～184:約 6 ヶ月間)	表現はなし (自責感発言)	・失敗せずに成功しようと思って居た (258)	・先生から独り立ちしなくちゃと思う(323)
B	援助中断 (11～21:約 6 ヶ月間)	表現なし (自責感発言)	表現なし	・自分のことも自分で決められる(99) ・自分はこれでいいんだ(99)
C	面接の無断キャンセル 突然の親子並行面接 (2～3:約 4 ヶ月間) 面接の連続キャンセル (22～23:約 6 ヶ月間)	表現なし (自責感発言)	・学校に行けないのは、みんなが私を知らないから(電話) ・いい気にならないでいようと思ったのに(72)	・私は私でいいんだ(90) ・自分の中に芯が出来た感じがする(104)
D	面接での同様の内容を(不安等)を繰り返し訴える (98～177:約 2 年)	・優等生の飾りがなくなった自分は空っぽだった(84) ・父の期待に応えてばかりいたから…自分が何をやりたいか解らない(209)	・劣等感というよりは自信過剰なんだと思う(82) ・今考えると本当に傲慢だったと思う(84)	・進路が決まらないのは自分の問題(261) ・自分の感情に振り回されることが無いと思うと凄く安心(349)
E	筆者への拒否的対応 (1～62:約 5 ヶ月間)	表現なし (自虐感発言)	表現なし	表現なし
F	初回面接から長期の面接間隔 (インテーク面接～3:約 4 か月間)	・前は自分が空っぽ(104)・必死に何かをつめこもうとしてた	表現なし	・本当の自分でいられるようになった(70) ・私はもう小僧じゃない(149)
G	身体的・心理的に起伏が激しくなり面接内容が不安定になる (180～212)	・親のセイばかりにしていたから自分が貧しくなっちゃった(216)	・自分は特別な存在だと言うバーチャルな幻想があった(125)	・自分の人生生きてるって感じがしない(26)・ようやく自分の足で立ち始めた(169)

表 20 各事例の面接(援助)が変化した契機

	面接が変化した契機	喪失の対象と、喪失の契機 と考えられる言葉	移行対象の 有無
A	①筆者と遊園地に遊びに行く ②テストでクラスの2番の成績を取る ③姉の留学先の外国に独りで行く ④母親が「高校退学後は力になれない」と発言	母親 ・高校退学後のことは余り 力になれないと言われた のが凄いショック(259)	なし
B	①筆者が手紙を継続して出す ②アルバイト開始 ③通信制高校へ進学 ④猫の死	猫 ・捨て猫を保護するボラン ティアをやりたい。私はあ の子に助けられた(91)	ペットの猫
C	①初回面接で父親を亡くした悲しみを聴く ②退学を決心する ③父親が認知症だったことを話し号泣する ④自分の価値観を認め、自己受容する	父親・母親 ・父を凄く嫌だと思った自 分が嫌でたまらない(57) これが私たちの関係(90)	(父親の所有であ った)土地
D	①ひまわりを育てる ②家族面接 ③母親のボランティア活動開始 ④筆者による直面化 ⑤両親への愛情希求の自覚と諦め	父親・母親 ・愛して欲しかった…でも 諦めないといけないかな (311)	ぬいぐるみ (100匹以上)
E	①Eの言動に筆者が冷静に対処 ②ノン・バーバルの関係構築 ③学習援助の継続	表現なし	アニメ
F	①長男が夫の元に帰る ②二男も夫の元に帰る ③息子達との関係を再構築する	父親・母親・息子 ・違う人間だと思った (48)・抱きしめてくれた (66)・親はなくとも子は育 つてことですね(81)	なし
G	①母親への理想化に気付く ②伯母とトラブルになる ③部署を異動する	父親 ・私の話を理解するのはと ても無理(137)	なし

つまり、彼女らが指摘した空虚感は、自らの愛情希求を満たそうと自分自身の意志、感情、判断等を放棄し、過剰に「良い子」となって父親または母親の意向に沿ってきたことからくる自我の未熟さを表現した言葉であり、それは彼女らの自己決定の回避と葛藤に対する耐性の低さに繋がっている。彼女たちの親イメージは未だ幼児期的な全能的存在であり、彼女らがその意向に従わないと容易に愛情が取り上げられ見捨てられるのではという一種の強迫的な錯誤が見られる。

また、空虚感に言及した D, G は成人期の女性で、D も青年後期の年齢になって初めて言葉にしている。空虚感の洞察にはある程度の年齢が必要かもしれない。

(2) 全能感の洞察

7 事例中 A, C, D, G の 4 人が自分自身の全能的 (omnipotent) な願望について言及し、このうち A, C, D が思春期・青年期の女性である。青年期の全能感については既に Blos, P. の発達理論中に皆川(1980)が指摘しており、青年の特徴の 1 つと言えるであろう。

彼女たちの全能感が表現された時期をみると、A は不登校状態にも関わらず「英語のテストで 100 点が取れない」と気にして学校を休んだと語っている(#179)。このとき A は 10 代後半であったが、自分の言動が全能的であることに全く気付いていない。その後進路決定における葛藤を体験した A は、「私失敗せずに成功しようと思って居た。失敗しなきゃ成功もないのに」(#258)と、自らの全能感を客観的に捉えることが可能になる。

同様の経過が C にも見られ、10 代半ばに不登校の要因について「私の小さい頃はみんなが私のことを知っていて凄く楽しかった。今そういうことが全然ないから」と語り、筆者のささやかな反論に驚く。この時の C も自らの発言の全能的な意味に気付くことはなかった。面接の進展と共に経験の積み重ねを経た #72 では、筆者の直面化に対し「社長の娘だからっていい気にならないで居ようと思った事があったんですが、それでもやっぱりあったんですね…」と認め、「父の一番いい時に一緒に居た自分の儘で居たいというのがある」と、自らの幼児期への回帰願望を表現している。

D は高校時代の全能的な自分の思考について、やはり 10 代後半に客観的な振り返りを見せて言語化している(「受験勉強でライバルを蹴落とすのは当然と思って居た。今思うと本当に傲慢だったと思う」#84)。これらの事例の状況から見ると、少なくとも青年後期には幼児的全能感の洞察が可能になり、個体化過程進展の契機になる様子が見られる。

一方で成人期事例の 1 人 G が自分自身の全能感を洞察したのは 40 代である。第二の個体化過程が遅延した要因については、また別章で検討する。

(3) 主体的自己感覚の表明

主体的自己感覚の表明は E を除いた全てのケースで見られた。この感覚は内容によって次の 2 点に分けられる。

① 自律性獲得感覚の表明

「先生から独り立ちしなくちゃ、と思って」(A, #323), 「自分のことも自分で決められる」(B, #99) 「自分の中に芯が出来た感じがする」(C, #104), 「自分の感情に振り回されることが無いと思うと凄い安心」(D, #349), 「私はもう小僧じゃない」(F, #149), 「ようやく自分の足で立ち始めた」(G, #169)等の形で、自分自身の意志で行動を決定し自己コントロールが可能になった感覚について表現している。これらの言葉はいずれも喜びと同時に驚きをもって語られており、有能感(competence)を自覚した様子が見られる。この感覚は彼女たちが自分の人生を主体的かつ能動的に生きる大きな鍵となっている。

② 自己受容感覚の表明

もう一つの主体的自己感覚として、「自分はこれでいいんだ」(B, #99), 「私は私でいいんだ」(C, #90), 「進路が決まらないのは自分の問題」(D, #261), 「本当の自分でいられるようになった」(F, #70)のように、自分自身を欠点まで含めた全体的人間存在として受け入れた感覚が見られる。これは彼女らが幼児的全能感を放棄し、他者に対しても単なる対象ではなく長所も欠点も備えた人間としての関わりが可能になったことを意味する。

これらの言葉を語る際には、喜びと共に静かな諦念がにじむのが特徴である。この感覚の獲得後は Cl.の対人認知に変化が見られ、例えば「母の言うことにも振り回されなくなった」(C, #97) 「母にもっと優しくなりたい」(D, #369), 「今考えると本当に子どもでしたね、向こう(夫)も私も」(F, #84)と、相手の弱さや欠点を許容できるようになる。

その他として B は不登校の要因を洞察し、その葛藤から解放された感じを「凄い吹っ切れたような気がする」(#62)と語っており、①の自律性感覚を獲得できた実感と思われる。また G の「自分の人生生きているって感じがしない」(#26)の言葉は、幼児期的親イメージから分離できずにいる“仮の分離”の感覚(孤立感)を非常に的確に表現している。

①のみを表明したのは A と G であるが、A は年齢的な制約があり、G の個体化過程は一進一退の状況である。①②の主体的自己感覚についてそれぞれ両方表現しているのは B, C, D, F であり、彼女らの面接過程と終結の状況を合わせると、第二の個体化過程完了にはこの2つの感覚の獲得が重要である。つまり、自己受容感覚は自己に向かう対自的なく個体化>に関連し、自律性獲得感覚は社会に向かう対他的なく分離>が関係している。

4. 各 Cl. の自己理解の変遷

前述と、各事例の考察より各 Cl. の自己理解の変遷について図 1 に示した。図 2 では、自己理解過程の核となる主体的自己感覚の表明について、まず自律性獲得感覚の表明(確信的 - 疑惑的)と、自己受容感覚の表明(積極的 - 消極的)の次元から暫定的にその変遷を図示した。また各 Cl. の変化を示す矢印の移動については、第 3 章及び第 4 章の各事例の記述に記載した各 Cl. の自己に関する発言(表 2・表 5・表 7・表 9・表 11・表 13・表 16)を基

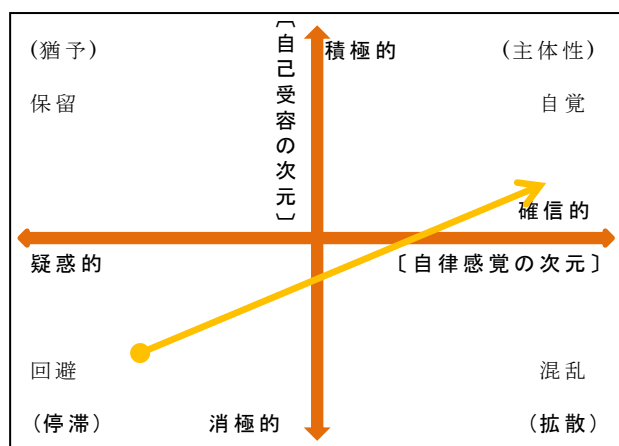
に、筆者が独自に作成した。

ここに提示した全ての事例で C1. の言動に変化が見られ、進学や就職に向けた自主的・具体的な行動の開始が見られている。実際に勤務を継続していた F,G も、資格獲得のための学習やより自分に合った部署に異動する等、更に深い自己理解に基づいた行動を起こしている。また E を除いた事例では自己肯定感が上昇している。

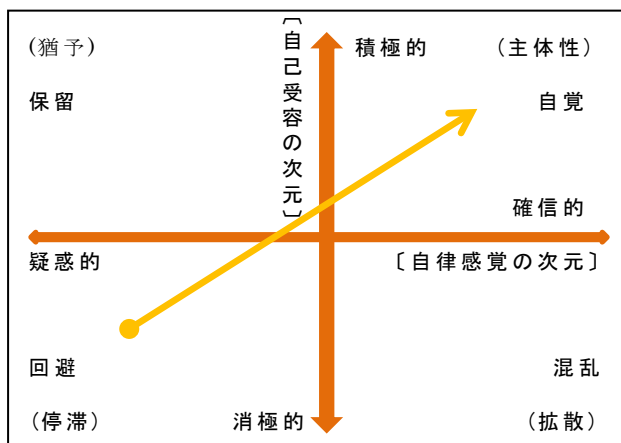
第 1 事例 A

図 1 援助過程における各事例の
自己理解(主体的自己感覚)の変遷
(注)

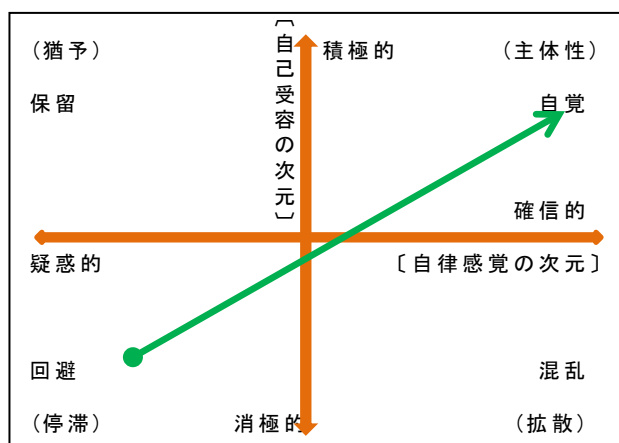
→ 思春期事例
→ 青年期事例
→ 成人期事例



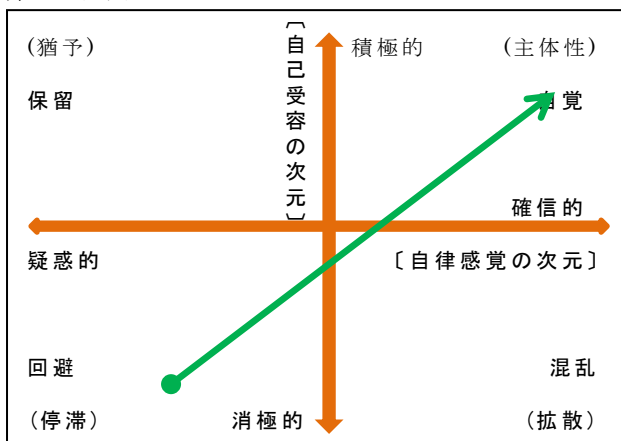
第 2 事例 B



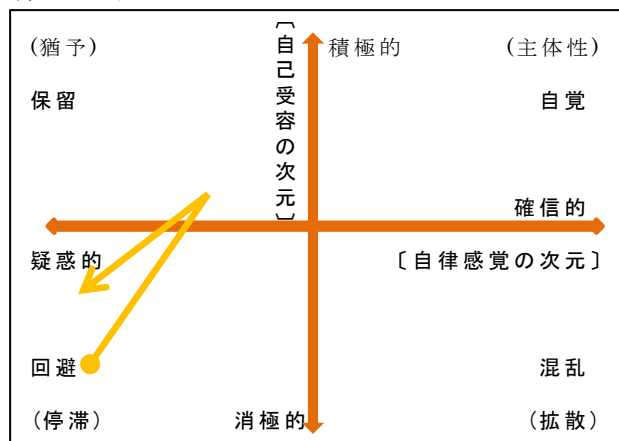
第 3 事例 C



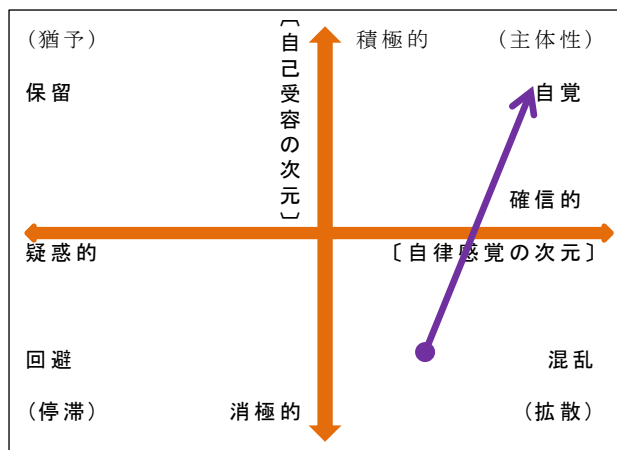
第 4 事例 D



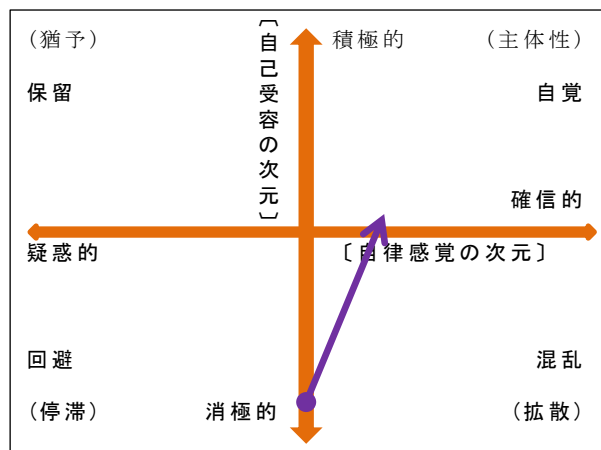
第 5 事例 E



第 6 事例 F



第 7 事例 G



思春期女性の A,B,E の事例では、陰性感情を含めた自分の気持ちを言語化することによって心理的安定が見られ、特に A,B は学業への復帰と進路決定、および進学により終結に至っている。援助期間は他のケースに対して比較的短期間であるが、受験、進学等乗り越えることが思春期 C1.にとって最大の課題であり、その葛藤を支える心理的援助と共に学習援助が個体化過程を促進する確かな手掛りとなっている。

青年期女性の C,D は、精神的・社会的にも最も成長が大きい。思春期よりも自己検討が深化し、親子関係についてもより深い理解が可能になる。活動そのものは具体的な援助が無くても開始が可能になり、活動範囲も大きくなる。異性である父親の方が先に対象となるが、母親に対しても、その関係性のあり方やマイナスの感情を意識化し検討できるようになる。また父親に対するエディプス・コンプレックス傾向も洞察できる。

成人期女性の F,G は、自分の感情、及び思考の言語化が顕著になる。深い段階の現実検討 (reality testing) が可能で、Th.による直面化も受け入れ易くなるが、自らの認知や行動パターンについては気付きが困難になる傾向がある。社会的活動については、これまでの活動の再評価に重点をおき、その再認識・再選択が行われている。

通常的青年期においては、自己受容感覚が積極的で自律性獲得感覚が疑惑的の場合は青年期発達過程においてはモラトリアム (猶豫 moratorium) である (Erikson,E.H. 1959/2001)。

例え自律性獲得感覚が確信的方向性にあったとしても、自己受容感覚が消極的であれば回避(停滞)が生じる。成人期女性の F の空虚感と G の全能感自己陶醉 (self-absorption) であるために、これを脱するには Th. - C1.間の双方に時間と忍耐とが必須である。

5.1.3 母親との関係性

1. 各事例の母親の就業状況と母娘関係との関連

前節で述べた様に、今や第二の個体化過程においては、親娘関係が影を落としていることは明らかである。先ず一層影が濃い母娘の関係性から取り上げる。

各事例の家族状況の特徴は 5.1.1 の 1 を参照されたい。7 事例中、母親が専業主婦であったのは A,B,C,D の母親である。このうち A の母親は会社の仕事を手伝い、その他の母親は家事等に専念していた。フルタイムの職業に就いていたのは E,F,G の母親で、G の母親は夜勤も行っている。パートタイムの仕事を持っていた母親はいなかった。

母親が専業主婦だったケースのうち、三世代同居だった A と B は孤立無援の母親を全面的に擁護している。A は母親の役に立てない罪悪感を語り(「お母さんに迷惑をかけているのが辛い」#67), B は自分の不登校の要因として母親を大切にしない父親と祖父への激しい怒りを挙げている(「学校に行けなかったのは、おじいちゃんに何も言えないお父さんに凄い頭にきてたから」#62)。

然し同様に母親が専業主婦だった C は母親とのかみ合わなさを話し(「お母さんと私は趣味が合わない」親子並行面接 2), D は淋しさと共に母親の弱さや無力さに怒りと苛立ちを現わしている(「母の人生は一体何だと思う」#96)。父方親族と同居か否かにより、母親に対する感情は大きく異なる。

一方、母親との関係において強い寂寥感、不全感、および愛情飢餓感を中心に訴えていたのは E(「もっと構って欲しかった。愛し方が解らないのかも」#87), F(「本当は凄い淋しかったと思う」#28,「母と私ってどうしても合わない」#43), G(「私は毛布が欲しいのに、スープを飲みなさいといってくる、そんな感じ」#2,「母との絆がちゃんとできていない」#46)である。母親の就業が直ちに母娘関係へ影響を及ぼすとは考えにくい、母親との関係性を考える上で重要な要因であることが推察される。

2. 援助過程における母娘関係の変遷

両親への依存と両親からの独立との内的自己矛盾は、児童期から思春期に突入して緊張は高まり葛藤となる。西平(1973)はこの様相を青年の手記の分析から現象学的に捉え、自己との共鳴・一致・近しさなどの〈愛の次元〉と、社会化された評価・崇拜・軽蔑視などの〈力の次元〉の 2 次元から考察している。筆者の援助過程で得られた知見とほぼ合致しているので、これを発展させ時間軸を加え新たに 4 領域を命名し図表化して示す。

母親イメージの変遷については図 2 に示した。図の座標と次元については西平(1973)の文献を参考にした。また各 Cl.の変化を示す矢印の異動については、第 3・4 章の各 Cl.の母親に関する発言(表 4・表 6・表 8・表 10・表 12・表 14・表 18 の母親関係欄参照)を参

考に筆者が独自に作成した。

本研究で取り上げた 7 事例は、母親を尊敬、あるいは理想の対象と語った Cl. は皆無である点が共通している。母を擁護していた A と B でさえ、母親の結婚に疑問をもち(「お母さんは、よくこの家にお嫁に来たと思う」A, #14), 母親の依存に気付いていた(「私が家にいると、お母さんはおじいちゃんと 2 人でなくて済むから安心するみたい」B, #62)。

面接が進展すると C, D, F の母親イメージは改善し、母親を肯定的に捉えることが可能になる。特に D の母親イメージは大きく変化し、母親に敬愛の感情を抱く(「母が父に怒鳴られながらも、落ち着いて自分の意見を言ったことに感心した」#243)。G の母親への感情も大きく好転しているが、母親存在を肯定するまでには至っていない。A の母親イメージは、幻想崩壊により親愛の情に僅かな変化を見せている。

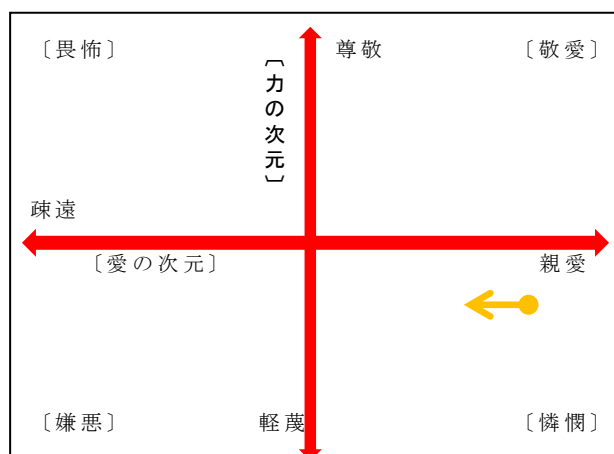
B, E に関しては援助中に母親イメージの変化を感じさせる発言はなかった。これは後述する葛藤の抑圧(repression)に大きく関係していると思われる。

第 1 事例 A

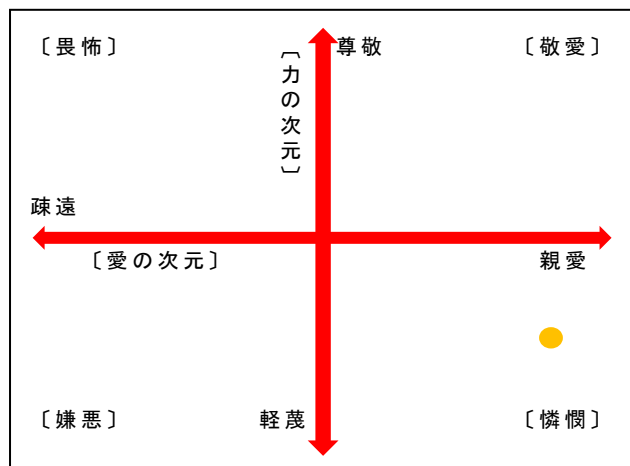
図 2 各事例の援助過程における
母娘関係の変遷

(注)

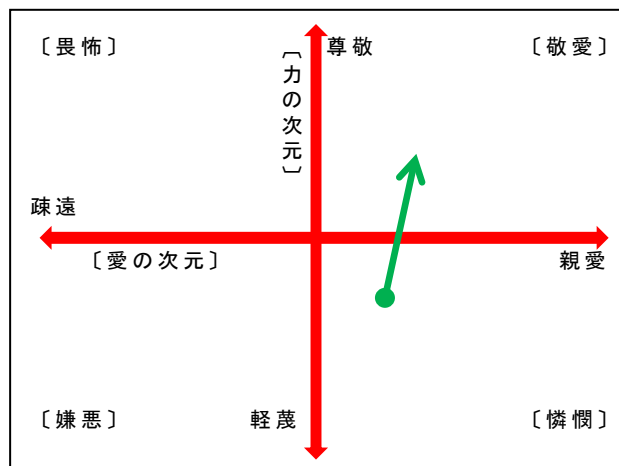
- 思春期事例
- 青年期事例
- 成人期事例



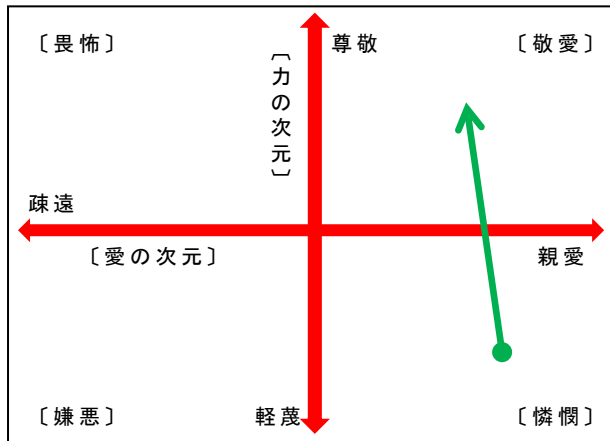
第 2 事例 B



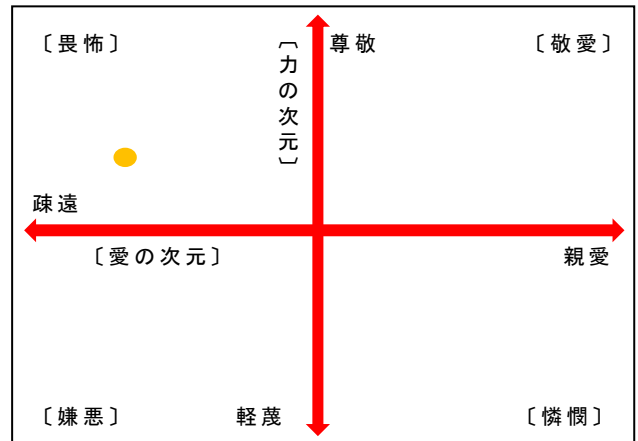
第 3 事例 C



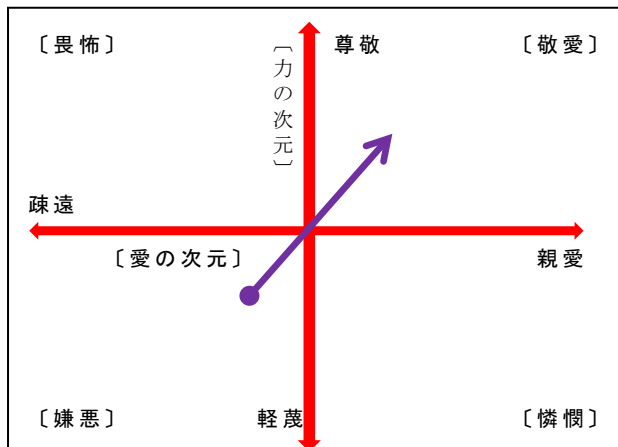
第 4 事例 D



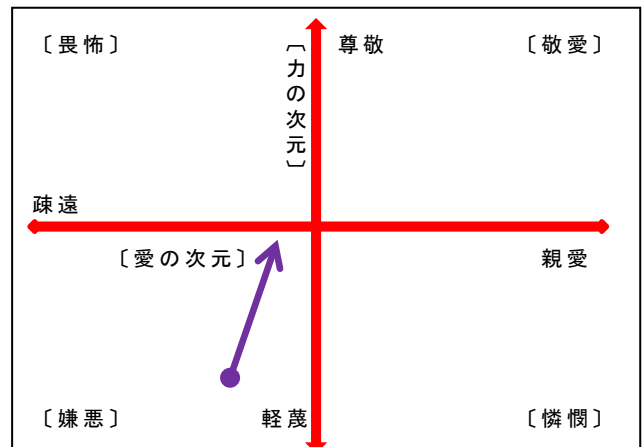
第 5 事例 E



第 6 事例 F



第 7 事例 G



3. 母親への陰性感情の抑圧

思春期・青年期女性の事例における母親との関係性の最も大きな特徴は、母親への陰性感情の強い抑圧である。特に思春期女性であった A,B,E は、家庭内で母親と大きなケンカを何度もしているにも関わらず、A は筆者にその出来事に触れたのみで(「お母さんに当たってしまう」#28), B は全く語っていない。E も母親の関心の薄さと厳しさは訴えたが(#87, #159), 母親を批判する発言は無かった。然し 3 事例とも、それぞれ筆者の援助に対し強い抵抗を見せていることから、母親への怒りを潜在的に抱えていた可能性がある。

また、C も第 1 期・第 2 期では母親との葛藤については「合わない」という形容以上には意識化できず、怒りを否認(denial)する様子が見られた(「母からあんたの人生はおしまいだと言われた。本当は母のことが大好きなのに」#3)。D も第 1 期では全く母親との関係には触れていない。C と D が母親への陰性感情について明確に語り始めるのは 20 歳を過ぎてからで、ここから両者の母娘関係が大きく変動している。これに対し成人期女性の F と G は面接開始当初から母親に対する批判を語っているため、母親への陰性感情を意識

し、他者に語ることが可能になるのは青年期後期の 20 歳前後と推測される。

父親と比較して、母親との葛藤の意識化がこれほど遅延する理由については、事例から以下の要因が考えられる。

(1) 未分化な母娘関係

母親を含めた家族の関係性は、既に C1.にとって日常的でごく自然な状態な為その偏りに気付きにくいことがある(例えば事例 A～D)。異性であり、エディプス葛藤が再燃する父親に対しては怒りや反抗等も意識しやすいが、同性でより密着した存在である母親は対象化するのが難しく、特に A,B,C,D の家庭状況及び両親関係では、母娘は自分達の関係が密着していると気付くことすら困難だったと思われる。

C1.の母娘関係が未分化な状態であると、C1.本人にとっては自分と母親を別の人格として捉え難い。「お母さんはよくこの家にお嫁に来たと思う。絶対この会社の跡とりたくないってお姉ちゃんと話す」(A, #14), 「お酒飲みとは絶対結婚したくない」(B, #24), 「母が父と結婚して苦労するのが運命だと言ったから、私が家に居るのも運命」(D, #128)等の言葉からは、C1.自身の陰性感情が母親の陰性感情と一体化している様子が見て取れる。同時に、あくまで母親を基準に未来の自分を予想し“自分も成長したら父親のような男性と結婚して、母親の様な生活を送らなければならない”と考えている様子が明白である。そこにはそもそも母親と自分が違う人格であるという観点が欠けており、彼女達が母親への批判はすなわち自分への批判だと捉えても不思議ではない。

父親が既に死去している場合でも、C は母親と異なる趣味や価値観をもつ自分について強い自責感と被害感情を長期間抱えていた。

(2) 潜在的な見捨てられ不安による分離の回避

母親との葛藤が意識できてはいても、F,G は母娘関係に不全感を抱いている。また C, D は母親との葛藤を意識してから、真に個体化するまでには、どちらも約 3 年以上要し、単に葛藤が意識されただけでは第二の個体化が達成されたとは言えないようである。

「母に罵倒されたので、気にはしないけどひっかかってる」(C, #74), 「お母さんは私が要らないんじゃないかと思う。信用できない」(D, #156)「私の言葉を受け入れてくれたことがない。それが凄く淋しかった」(F, #43), 「見捨てられる不安というのが大きい。それは親からで」(G, #163)等の言葉は、母親を批判しつつも、自分が母親から受け入れられないことへの強烈な不安を現わしている。母親とは違う自分に成ることを切望しながら、母親に背いて見捨てられることを恐れている様子が明白である。

恐らく思春期の自我の段階ではこの葛藤を抱えられず、その発端となる母親への陰性感情そのものを抑圧すると思われる。後述の父親へのエディプス葛藤による羨望がもたらす母親への敵意が加わることでより不安が高まり、母親との関係性が葛藤状態のまま第二の個体化過程が停滞する要因となったと想定される。

5.1.4 父親との関係性

1. 各事例の家族形態と父親との関係性の関連

父親との関係性の検討には、先ず各事例の家族の状況を再度提示しておく必要がある。

各事例中、伝統的な家父長的雰囲気を持に残していた家庭は A, B, D のケースであったが、この家庭の父親は家事・育児・娘の教育等に殆ど協力していない。A,B のケースでは同居していた父方祖父母も彼女らの育児等に積極的に関わった様子がなかった。D の父親は娘の学歴に強い拘りを見せていた。

また、祖父母との同居が無く夫婦共働きであった E, F, G の家庭では、E,G の父親は娘の育児及び教育にある程度の協力はしているが、E の父親は自己中心的対応が顕著である(「お金さえ与えとけばいいと思っている。本当にして欲しいことは何もしてくれない」#87)。また G の父親は娘の愛着の対象となるよりも、むしろ妻の関心を取り合っていた可能性がある(「母の愛情も、父がヤキモチ焼いて邪魔して居たら無いのと同じ」#50)。一方 F の父親は妻と同等かそれ以上に家事に堪能で、育児に熱心であった様子が見られる(「父は家事がマメ。進学する大学も学部も凄い押し付けられた」#83)。

どちらの家庭の形態でもなかった C の父親は、孫ほどに年齢の離れた娘を溺愛している。

2. 援助過程における父娘関係の変遷

各事例における父親イメージの好悪は、1.で挙げた父親と娘の関わりのあり方が如実に反映されている。各 C1.の父娘関係の変遷については図 3 に示した。図の各事例の矢印の異動については第 3・4 章中にある C1.の父親に関する発言(表 4・表 6・表 8・表 10・表 12・表 14・表 18 の父親欄参照)を基に筆者が独自に作成した。座標及び次元の名称は 5.1.3 の 2 に準じた。

父親への感情は、母親に比べて極端になる傾向が見られる。父親に対して非常に肯定的イメージをもっていたのは C,F で、両者とも父親への絶対視が非常に強かった。特に父親が死去していた C にとっては憧れの対象になっており、F も面接開始当初は父親とのわずかな意見の相違すら語ることはなかった。

一方、面接(援助)開始当時の A,B,D には父親に対する怒りや嫌悪感が顕著である。このうち A は生理的に嫌悪している感が強く、B と D は恐怖または畏怖している様子が見られた。特に D の父親に対する憎悪は殺意を喚起する程であった(D,#2)。

G, E の父親に対する感情は複雑で、G は父親の存在そのものよりも、自分を理解せずに自分と母親との関係を阻害することに強い怒りを見せ、E は父親を軽蔑し、自分が必要な時だけ父親を利用していた感があった。

面接(援助)経過による父親イメージの変化についても図 3 に示した。B,D,G のケースで

は父親イメージが好転している。BとGは実際に父親に親しみを感じるようになったことで関係が改善し(「お父さんが凄く変わったと思う」B, #62・「なんか普通の親子になった」G, #198), Dは父親の未熟さを許容できるようになる(「もっと大人になろうよ, と思う」D, #371)。Aも彼女の進路決定を父親が支持してからは, 少なくとも筆者に嫌悪感を表明することは無くなっている。

反対にCとFは過剰な理想化が軽減されることで父親イメージからの分離(separation)が開始され, 個体化過程が進展すると同時に, 母親の存在が再発見される(「母も私の世話と父の看病で大変だったと思う」C, #59・「そういうお母さんを選んだのはお父さんでしょ」F, #83)。

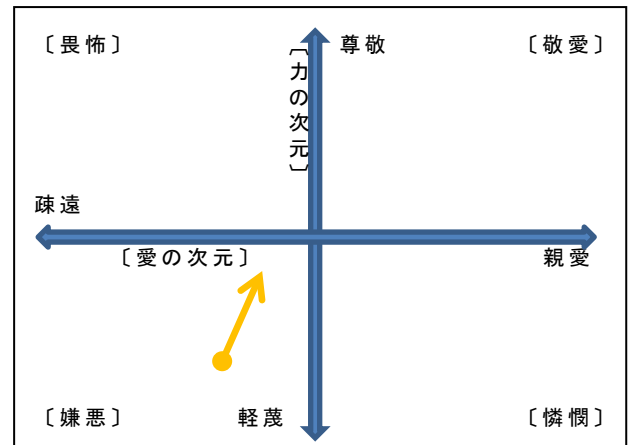
7事例のうちEの父親イメージのみに変化が見られなかった。Eは父親の欠点を認識しつつも病状悪化の為それ以上検討が進展することはなかった。致し方ないこととは言え, これが第二の個体化過程の状況に影響していないとは言えない。

図3 各C.I.の援助過程における
父娘関係の変遷

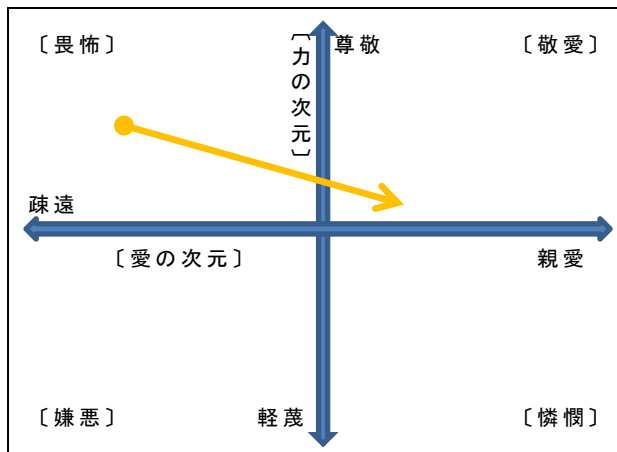
(注)

- 思春期事例
- 青年期事例
- 成人期事例

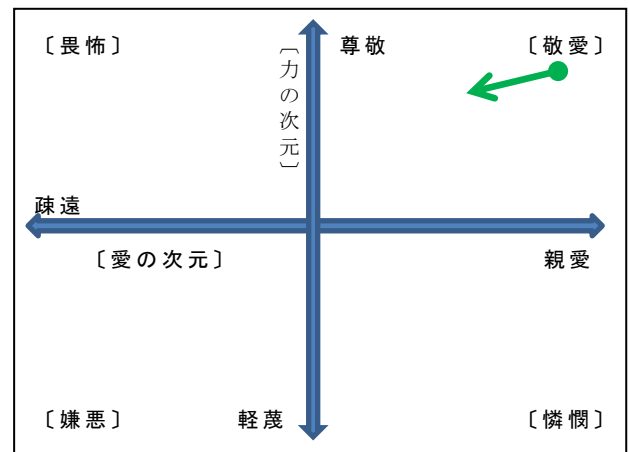
第1事例 A



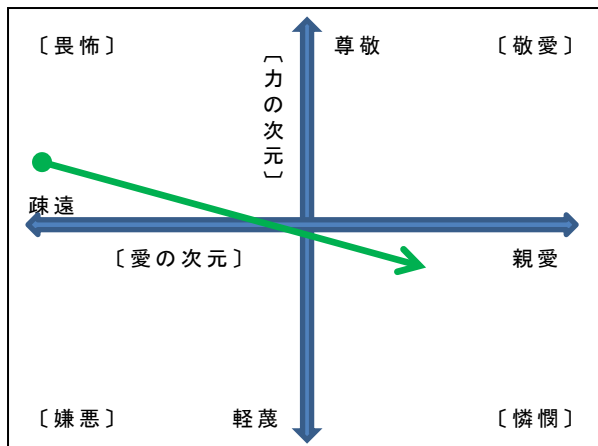
第2事例 B



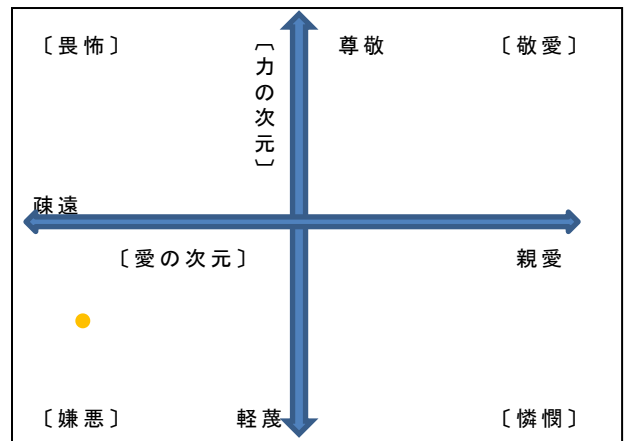
第3事例 C



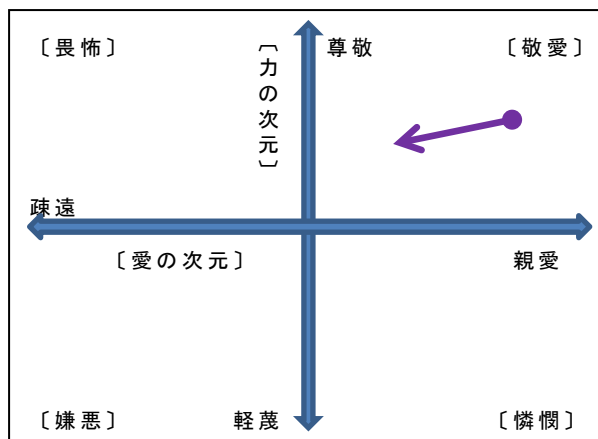
第 4 事例 D



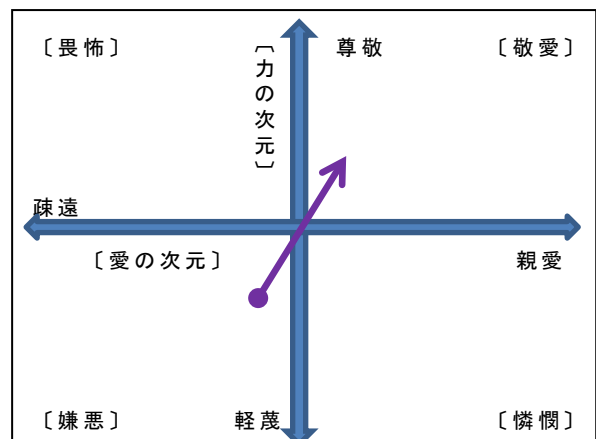
第 5 事例 E



第 6 事例 F



第 7 事例 G



3. エディプス葛藤の影響

面接過程において、父親に対するエディプス的葛藤を語っているのが C,D,F である。特に D は父親に対して強い否定的感情を抱いていたにも関わらずエディプス葛藤を語り(「父を守ってやりたい自分に気付いてあれっ? って思った」 #163, 「父を恨む気持ちと執着して居る気持ちがあって、その両極端を受け入れるのが凄く辛い」 #197, 「私は未だ父に期待している…どこかで分かって欲しいと思って居る」 #198), 愛情希求の自覚を経て、父親に認めて欲しかったことを洞察している(#347)。

父親を絶対視していた F は、面接当初は父親の意見に従うのみであったが、自分と父親が違う人格であることを洞察し(「やっぱり違う人間なんだと思った」 #48), 父親の愛情は支配でもあったことに気付くと(「今思うと支配されてたっていうか」 #83), 本当は父親に理解して欲しかったと語っている(#104)。

従来の女性におけるエディプス葛藤の定義では、娘が父親を理想化し母親を敵視すると

いう三角関係的構造とするものであったが、必ずしも父親に対する感情は理想化のみとは限らず、強い恨みや嫌悪の場合でも同様の過程が起こっている。また理想化されている場合でも、その理想化の内実には自分が理解されていないという不全感や、喪失感および喪失への怒りが見られる。

面接が進展するにつれ自我の成熟が進むと、父親が嫌悪の対象である場合も、あるいは理想化の対象である場合も次第に人間化され、最終的に母親とのカップリングが受容される(「父は母がいないと生きていけない」D, #371・「まあ仲良くやってね、って感じ」F, #153)。エディプス葛藤の克服は、父親イメージからの完全な分離を意味している。

4. 父親との関係性と女性性受容との関連

前章のエディプス葛藤については、A,B,Eは全く語っていない。恐らくこの葛藤を言語化するには年齢的な限界があるのであろう。

然し女性性の受容については、父親との関係性好転によって思春期でも変化が見られている。Bが父親の変化に気付く(「この頃お父さんが凄く優しくなったような気がする」#33)、夫婦関係が改善しつつあるのを理解すると(「お父さんがお母さんにシクラメンの鉢を買ってきた。凄くびっくりした。あんなこと初めて」#43)、彼女は身体的にも急激に成長し、一気に女性らしくなる。偶然彼女の成長期に自分と父親、及び両親の和解が重なっていたとも考えられるが、父親との関係が改善したことで、Bは女性としての自分を受容し、大人の女性となる未来が開けた感じをもてたと思われる。彼女はそれを言葉にするよりも実際に行動として示したといえる。

また成人期女性でも、父親との関係改善によって女性性を受容する動きがある。

Fが父親を絶対視していた時点では、彼女の異性関係に偏りがあったことは既に主訴で明らかである。父親からの分離が始まると、これまでの交際相手についても検討が進み(「男性関係に問題がある」#80・「ちゃんと私と関係作っていける人がいい」#88)、彼女の意志を尊重するパートナーを選択する。

Gは面接当初では恋愛に拒否的であり(「恋愛からも勉強からも逃げていた」#3・「高校生の時、同級生の男子と立ち話していたらもの凄く怒られた。それで恐怖症になった」#83)、男性への対抗意識が顕著である(「男性にバカにされるのは絶対嫌」#38)。

然し父親への幻想が崩れ、人間同士としての関係が再構築されると(「初めて親子らしい会話した」#155)、始めて男性と人生を歩むことに望みを見せる(「自分のパートナーと一緒になれたらいいな」#188)。父親との適切な関係は、娘の健全な女性性を育み、異性との真のパートナーシップを形成する上で重要な役割を果たしている。

5.1.5 本論事例の第二の個体化過程の状況と母娘関係と父娘関係の関連

1. 母娘関係と父娘関係の関連

前述のように母親との関係について「合わない」「かみ合わない」という表現を用いたのは7名中C,F,Gの3名である。また母親に対しての愛情飢餓感を示したのはE,D,F,Gである。このうちCとFは父親に強い親和性を見せ、DとGは父親により母娘関係が阻害されたことを語っている(「母は弱いから、私と父が対立したら私を捨てるんじゃないかと思って居た」D,#134・「母が愛してくれても、父が邪魔して居たら無いのと同じ」G,#)。

一方、前章で指摘した父親へのエディプス葛藤が各事例の母娘関係にもたらす影響を見ると、D,Gには母親への羨望が見られる(「母が父と結婚して苦労するのが運命だと言ったから、私が家に居るのも運命」D,#128,「でも父はそんな母が好きなんですよ」(G,#171)。然し同時に彼女らは母親への同調を拒否する(「母の様には絶対なりたくない」D,#96・「こんな母親に育てられたから、私もロクな子育てができない」#183)。これらの言葉から感じられるのは、“父に愛されるには母の様にならないといけませんが、母の様には決してなりたくない”という強いアンビヴァレントな矛盾と葛藤である。

一方C,Fは母親への嫉妬、羨望については余り表現していないが、彼女らの母親の対応を見ると、「母からアンタの人生はおしまいだと言われた」(C,#3)「母には朝食ぐらい作って欲しいと思うときがあります」(F,#2)等、どこか拒否的な様子が窺われる。彼女らの父娘関係からすると、むしろ母親側が娘を羨望していた可能性があり、彼女らの母娘関係が葛藤的となる要因の1つであったと思われる。またCとFは、父親との関係が良好だったにも関わらず、面接終期まで寂寥感と自責感を抱え続けている。

これらの事例の様相から見ると、女性にとっては、まず重要な主関係として先行するのは母娘関係であり、父娘関係はそれを補償する形で動いていることが明らかである。

7事例について、母娘関係と父娘関係の関連性を表21に示した。

表21 第二の個体化過程を停滞させた母娘関係と父娘関係の関連性パターン

関係性の推移の状況	事 例
・母親との関係固着⇔父親の排斥→母親は娘の分離を阻止しようとする→母親への同一化拒否→父親を拒絶・母親への潜在的反抗	A,B
・母親との関係不全⇔父親への過剰な愛着→父親の関心は娘に向く→母親の拒否的対応→母親への同一化拒否→父親への理想化・母親への不全感	C,F
・母親との関係不全⇔母親の愛情をめぐる父親との競争関係→母親の関心は父親に向く→母親への同一化拒否→父親を嫌悪・母親への怒り	D,G
・父親との表面的愛着⇔母親との関係不全→強い分離不安	E

父親は女性性獲得について、母親はアイデンティティ形成についてそれぞれ重要な役割を担っているため、彼女らは両親双方に対して葛藤を抱えつつも、その存在から将来の指針を見出さなければならない。特に母親に対しては嫉妬と羨望を持ちつつ同時に親密性を満たさなければならないことが、女性の第二の個体化特有の困難さであると思われる。

2. 各事例の第二の個体化過程の推移の状況

第2章での Blos,P.の特徴から見た各事例の第二の個体化過程の状況を表22に示した。

表22 Blos,P.の3つの特徴から見た各事例の第二の個体化過程の推移の状況

	両親の人間化	主体的自己の感覚	天職の選択
A	・両親共に言及なし	・先生から独り立ちしなくちゃと思う(323)	大検合格 大学進学
B	・私の性格ってお父さんに似てるのかも(25)	・自分のことが自分で決められるようになった(99) ・自分はこれでいいんだ(99)	通信制高校入学 短大進学
C	・父は私と共にいるから(97) ・ケンカばかりだけど、これが私と母の関係(90) ・あの人まじめすぎるんで(102)	・私は私でいいんだ(90) ・自分の中に芯が出来た感じがする(104)	就 職
D	・こんなダメ親父だったんだ(243) ・もっと母に優しくになりたい(369) ・もっと大人になろうよ(371)	・進路が決まらないのは自分の問題(261) ・自分の感情に振り回されることが無いと思うと凄い安心(349)	就 職
E	・両親共に言及なし	・表現なし	選択できず
F	・両親共イライラせずに話せるようになった(153)	・本当の自分でいられるようになった(70) ・私はもう小僧じゃない(149)	現職を天職として 再選択
G	・両親が私を理解できないのを私が理解すればいい(137) ・なんであんなに親のセイにしていたのか解らない(170) ・始めて一人の女性だと思った(171)	・ようやく自分の足で立ち始めた(169)	現職が好きだと 語る

(1) Blos,P.の特徴から見た各事例の第二の個体化過程の推移の状況

両親の人間化については、A,E は両親共に言及がなかった。B は父親と自分との共通点

については語っているが、母親も含め、人間化できるまでには至っていない。C,D,F,G の4名は、両親共に欠点を抱えた独りの人間として捉えようとする傾向が顕著である。

主体的自己の感覚は前述の 5.1.2.の 3(3)に記述した通りである。天職の選択は、A,B は自分の希望する職業をある程度定め(A#263 B#30,#91)進学を決定している。E は筆者の援助期間中に具体的な選択は出来なかったが、進路の希望を表明している(#89)。

C,D は就職しているが、彼女らが選択した職業が彼女ら自身にとって天職(vocation)と成りうるかどうかについては更に経過を見る必要がある。

既に長年就労していた F は、改めて自分の職業的専門性を周囲の利益に役立てたいと明言している(#73)。G は現職が好きであることを自覚する(#176)。

(2) 筆者が面接中に覚えた第二の個体化過程進展の特徴

一方、既に 5.1.2 の 2 で述べたように、幻想の崩壊と対象喪失が各 Cl.の両親の人間化に大きな関連があることが各事例の経過を見ても明らかである。またこの気付きの対象は、大きく両親そのものに対して言及される場合と、特に父親に対しての発言、母親に対しての発言が見られる。

父親については“父親への過大評価に気付く”形が自然である(D,#212, F,#58, G,#137)。これは父親が異性であるために、元々親密な一体感を持ちにくく、またアイデンティティ形成の目標とするにはやや距離があるという事情がある。

これに対し Cl.が母親と自分とは違う存在であることに気付けないうちは、自分が母親と同様だと考え強い無力感に陥る、あるいは自分の葛藤に対する母親の無理解を裏切りとして強い怒りと恨みを抱える等の混乱が見られる(C,#69, D,#156, F,#44, G,#26)。その時の母親像は圧倒的な力を有して Cl.自身の感情や人生を支配する存在ととらえられているが、それはまさに Cl.の幼児期的母親イメージそのものである。そしてその裏には、“母親なら私が口にしなくても私の全てを理解し、解決し、犠牲になってくれる筈”という強烈な依存と全能感が存在している。

しかし Cl.が母親と自分が違う存在である事実気付くと、Cl.の価値観には大きな転換が起こる(C,#90, D,#243, F,#66, G,#171)。母親への依存から抜けだして Cl.自身が主体的に生きる方向性を模索し、その責任と孤独を背負う準備を始める。幼児期的母親イメージからの分離は、女子青年がより統合された人間的な価値観に基づいて行動できるか否かの決定的な分岐点になっている。

これらの点より、筆者は Cl.の第二の個体化過程の進展と考えられる有力な特徴として以下の 2 点を挙げ、7 事例より該当すると思われる Cl.の発言を表 23 に示した。

- (a) “自分と親とは違う個別の人間である” 事実につづく。
- (b) Cl.自身の視点が親との関係性よりも、「自分の人生をどう生きるか」に移動する。

表 23 篠原の 2 つの特徴から見た各事例の第二の個体化過程の推移の状況

	“自分と親とは違う人間である” 事実気付く	C1. 自身の視点が“自分はどうか”に 移動する
A	・ お母さんに高校退学後はお母さんもお姉ちゃんも未経験だから、あまりあなたの力になれないと言われて凄くショックだった (259)	・ 大学に行ってカウンセラーになりたいんです (263)
B	・ お母さんがおじいちゃんと一緒に居られないっていう。(中略)でもそれじゃいけないと思って、私バイトを始めたんです。お母さんとくっついたままになるから (62)	・ 将来は絶対動物関係の仕事に就きたい (30) ・ ボランティア活動やってみようと思う。私はあの子(猫)に助けられたから (91) ・ 私は私の人生を楽しむ積り (95)
C	・ 父を凄く嫌だと想ってしまった (57) ・ やっぱり離れていた方がいいみたい (104)	・ 苦しんでいるよりも将来を考えたい (23) ・ 父はもういないし、楽しかったあの時代も戻ってこない。でもまた新しい何かが作れると思う (104)
D	・ 母親に自分の気持ちを言っても理解して貰えないし、母の言葉も私にはピンとこない。母娘でも、他人なんだと思う (161) ・ 父には、がっかりしたのもあるし、もういいや、と思ったりする (354)	・ とにかく何かやってみようと思った (244) ・ 自分の力を試したい (340) ・ 今の仕事も次につなげたい (371)
E	表現なし	・ 先生の大学にいて、0 先生の仕事がしたい (89)
F	・ 父は私のことを解ってくれると想っていたのに。やっぱり違う人間なんだと想った (48)	・ 自分の専門性を学んで役立てていくことが私の行く道 (73)
G	・ 私を理解してもらうのはとても無理 (137) ・ 母は自分が一番不幸だと思って居る。でももうそういう人とは距離を取りたい (184)	・ 私は仕事ができるように成りたいんです (212)

(3) Blos, P. の 3 特徴と篠原の 2 特徴との関連

Blos, P. (1967) は第二の個体化完了の特徴として事例より両親の人間化、主体的自己感覚の獲得、天職の選択を挙げているが、これらの考察には精神内界の力動的状況に重点が置かれている。従って青年の第二の個体化過程では、主に分離-個体化過程のトラウマの再履行及び修正のための退行の重要性が強調され、その内容についても幼児期対象からの脱離による欲動の成熟と、自我構造の再構築に焦点を当てている。

一方面接過程中の C1. の発言より捉えた篠原の 2 つの特徴は、より C1. の実感に即したも

のとなっている。そのため Blos,P.の特徴よりも青年期のもつ“再生”と“決断”の意味が強調され、幼児期の分離-個体化過程の再試行の性質よりも、むしろ独りの人間としての新しい価値観の獲得と人生目標の設定に重点が置かれている。この特徴から見ると、思春期 C1.の第二の個体化過程の開始状況が理解し易くなると共に、精神疾患を抱える C1.の場合でも、第二の個体化過程が進展する状況(E, #89)が見られる。

つまり、第二の個体化過程は、その進展においては篠原が挙げた 2 つの特徴を示し、Blos,P.の 3 つの特徴はその完了の指標になると言えよう。

(3) 篠原と Blos,P. による 5 つの特徴から見た、各事例の第二の個体化達成の状況

思春期女性 A,B の第二の個体化過程では、5.1.2 3(3)で指摘した ①自律性獲得感覚 ②自己受容感覚 の、少なくともどちらかの主体的自己感覚を実感できている。然し両親の人間化は難しく、両親かまたはどちらかの親と自分との類似点を認める、あるいは親イメージの幻想の崩壊に気付く段階で止まっている。また天職の選択は年齢的にも困難であるが、A と B は葛藤を経験した上で自分自身の意志で進路を決定している。彼女らは自らの決定により、第二の個体化過程を開始させている。また E も疾病や家庭環境等に困難を抱えつつも、第二の個体化を開始させようとする意志と行動を示している。

青年期の C と D は、両親の人間化と共に、特に母親と自分が違う存在であることを明確に理解する。主体的自己感覚も①②の両方を実感し、自らの能力・意欲・人生の方向性を吟味した上での職業選択が可能になる。然しその職業が彼女らにとって真の意味の“天職”となるかどうかは更なる社会経験の蓄積が必要である。

Blos,P.(1967)が第二の個体化過程達成のメルクマールとして挙げた“天職(vocation)”とは、単にその個人の適職というだけではなく、仕事をする上での使命感や他者への貢献の発見という要素を含んでいる。また Blos,P.は指摘していないが、女性の場合はその家庭内役割のために歴史的に社会的進出を阻まれてきた(中根, 1977)現実がある。従って“天職の選択”には報酬を受ける仕事を得る、ということのみならず、その家庭内役割に真の生産性(productivity)を見出すことも含まれる。その意味では成人期女性の F は自らの職業と共に母親役割にも新たな意義を見出して再選択しており、7 事例中第二の個体化達成に最も成功したケースといえよう。然し成人期女性の場合は、個体化過程で必要不可欠なモラトリアム期間と場が大幅に制限され、生物学的にも心理・社会的にも制約が厳しくなる。親イメージの幻想が崩壊しても、現実の自分、そして過去の自分のあり方への後悔が、個体化過程を困難にする場合も見られる(G, #129)。

3. 女性の第二の個体化達成の条件

前述より第二の個体化過程を達成したと考えられる C,D,F の 3 事例について母親との関係性の関連を見てみると、いずれも母親との関係性の再構築が見られる。再構築の内容については表 24 に示した。

表 24 母娘の関係性再構築の状況

再構築の内容	再構築に関する Cl. の発言	関係再構築の時期
・母親受容 ・諦念	・ケンカばかりだけど、これが私と母の関係なんだと思います(C)	面接開始より約 8 年後 (C, # 90)
・母親の再評価 ・敬愛	・母が父に怒鳴られながらも、落ち着いて自分の意見を言ったことに感心した(D) ・もっと母に優しくになりたい(D)	面接開始より約 6 年後 (D, # 243)
・和解	・母はいつか L も M(子供達)も解ってくれるよ、と言って抱きしめてくれた(F)	面接開始より約 3 年 6 か月後 (F, # 66)

3 事例の母親のうち、実際に母親自身が行動を起こしているのは D と F の母親である。これを契機に D と F それぞれの従来の母親イメージが崩壊し、新たな母親像を形成したことで関係性が良好になっている。C の場合は母親の言動に変化は見られないが、C 自身の自己洞察により母親との関係性そのものを諦念と共に受け入れると同時に、母親自身への受容が可能になっている。

ここで注目すべき点は、この 3 事例で C と F は理想化された父親イメージ、反対に D の父親イメージは最悪であったように、3 名の父娘関係は極端な相違を見せていたにもかかわらず、3 名とも母親との関係性の再構築により自己受容に至っていることである。つまり、女性の第二の個体化達成に決定的な役割を果たすのは、母親との関係の再構築であることが指摘できる。

再構築のあり方については、実際に母親の働きかけによる母親イメージの改善と、Cl. の自己洞察による母親受容の 2 つが見られる。そして 3 事例とも面接開始から関係再構築までに数年を要していることから、恐らく長期的に両方の変化が相互的に呼応して新たな関係性が形成されたと思われる。

4. 女性の第二の個体化過程の推移

これまでの論述より、女性の第二の個体化の進展過程について図 4 に示した。

ケースによって多少の相違はあるものの、女性の第二の個体化過程では、まず反抗の顕在化も幼児期的親イメージの崩壊も父親が先行する。援助開始時に既に父親への反抗を表

明していた A,B,D はもとより，母親との関係不全を先に訴えていた G や，父親を理想化していた C,F のケースでも親イメージの崩壊は父親が先に意識される(C, # 57, F, # 48)。

父親との関係再構築については母親よりも先行する場合(C,G)と母親とほぼ同時期に行われる場合(D,F)がある。父親との関係再構築は，娘の女性性受容とある程度の自己肯定感をもたらす(C,D,G)。しかし父親との関係のみが再構築されても，幼児期的母親イメージの崩壊及び母親との関係再構築が行われなければ，両親のカップリングを認めるまでに至らず，第二の個体化達成までに到達するのが困難になる(G)。

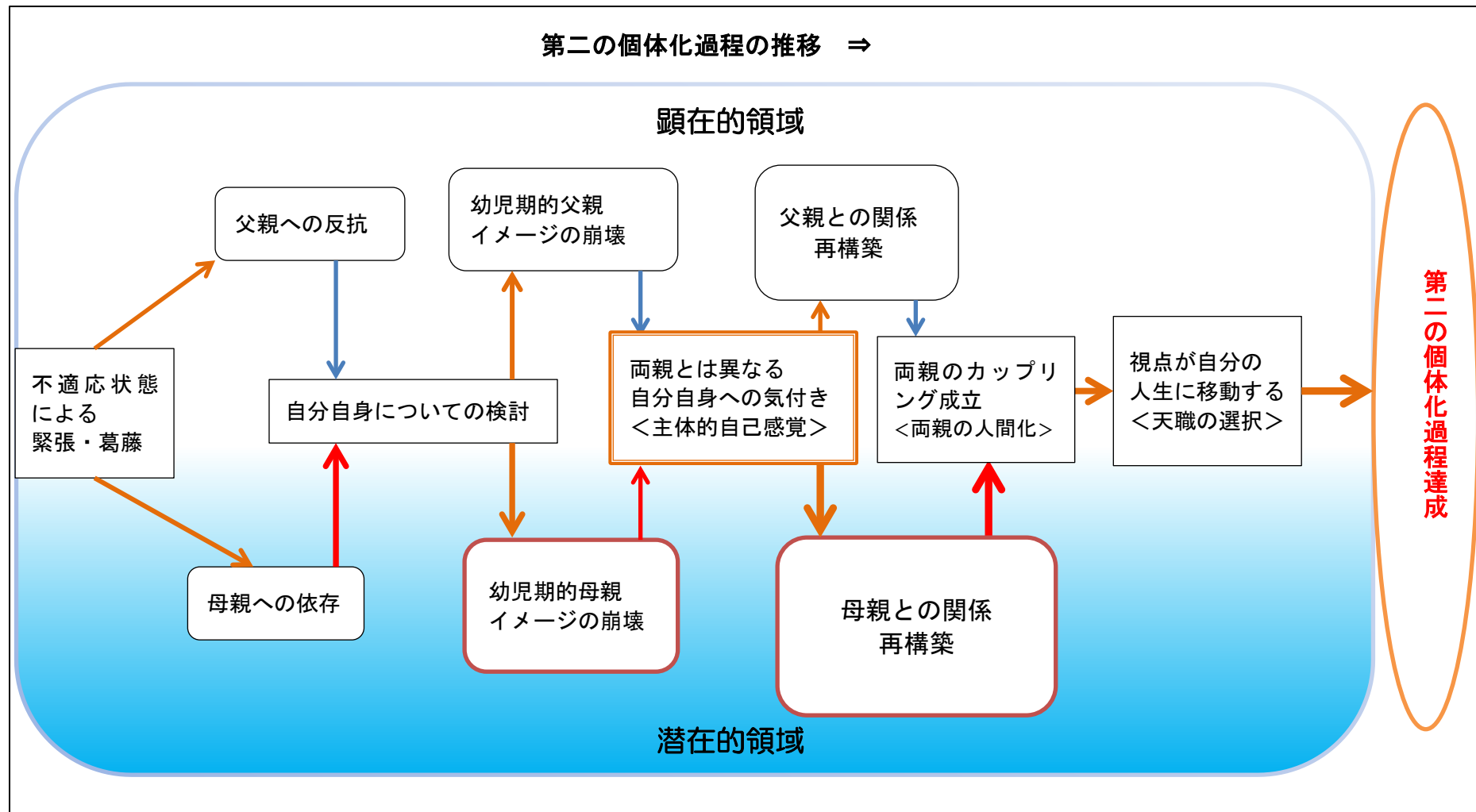
一方同性で親密性を基とする母娘関係では，先ず母親への依存を意識することが困難で，依存の反動形成(reaction formation)である反抗も抑圧される。従って娘が，反抗に伴う幼児期的母親イメージの崩壊と個体化過程の重要な契機となる“母親とは異なる自分自身”への気付くには相当の退行と進捗の繰り返しが必要であるが，ここで重要なのは先行した父親への反抗と幼児期的父親イメージの崩壊である。父親との関係における葛藤と自己検討は，同時に母親への反抗を顕在化し，娘の幼児期的母親イメージからの分離を促進する大きな契機となる。

娘が一旦主体的自己感覚を実感すると，社会化は更に進展し，家族外の人間との愛着関係形成の可能性が開かれる。同時に自主的な職業的経験をすることで自信と心理的安定が獲得される。その結果，娘は母親の愛情の限界を受容することが可能になり，母親との関係再構築が達成される。

両親それぞれと関係再構築が達成されてカップリングが成立すると，娘の視点そのものが自らの人生の生き方に移動する。最終的には天職の選択により生殖性(generativity)が発揮されると，その女性の第二の個体化過程は十分に達成されたといえよう。

女性の第二の個体化過程の推移を示す図 4 は，顕在的領域と潜在的領域を合わせた全体と，両親との心理-力動性 (psycho-dynamics) の揺れを中心とした弁証法的発展の様相を描いている。然し，Th,との関係性を含まない限り現象学的全体性には至っていない。

図4 女性の第二の個体化過程の推移



5.1.6 その他の関係性

1. CI.の病態水準と第二の個体化過程との関連

(1) CI.の病態水準と両親関係との関連

5.1.1 で指摘したように、7 事例中病態が精神病水準にあったのは E、境界例水準にあったのは G である。特にこの 2 事例の両親関係について表 25 に示した。

表 25 E, G の両親関係の状況

	父親との関係性の推移	母親との関係性の推移	両親関係の特徴	第二の個体化過程の状況
E	嫌悪・軽視→否認→見捨てられ不安	淋しさ・怒り→不信→見捨てられ不安	攻撃・否認・疎外	停滞
G	嫌悪・怒り→父親の再発見→幻想の崩壊→関係の再構築→父親受容	怒り・恨み→認知の齟齬の自覚→理想化の軽減→分離不安の洞察	葛藤・認知の齟齬・両価性	一進一退の長期化

E においては両親共に対象喪失と幻想崩壊が見られなかったことは 5.1.1 に前述した通りである。また G は父親に対しては父親イメージの崩壊から関係の再構築が見られているが、母親に対する理想化そのものは軽減されてはいるものの、幻想崩壊を体験するまでには至らず、分離に強い抵抗を見せている。両親イメージの崩壊および再構築には、分離不安の程度が深く関係していると推察される。

また、両親との関係性の特徴を見ると、E の事例では、「お金を与えとけばいいと思っている。私が本当にして欲しいことはしてくれない」「お母さんにもっと構って欲しかった」「愛し方が解らないのかも」(#87)のように、両親の自分への愛情の存在そのものに疑問を呈している。両親も E の感情を徹底的に無視する(父親、#216)、あるいは疎外し攻撃する(母親、#159・#217)等、E の人間性を否定する傾向が強く見られる。

G の場合は「愛してくれているとは思いますが。でも私がして貰いたいことと常にズレている」(#2)の言葉に象徴されるように、両親共に彼女に愛情はあるものの、G の感情への的確な応答に常に失敗し続けたために、彼女は両親のどちらにも愛着が持てずに強い欲求不満の状態に陥っていたことが見てとれる。面接が進むと、G も両親の不器用な配慮を認知できるようになり、「両親が私を理解できないことを、私が理解すればいい」(#137)「変わってるけどいい人だよ」(#171)等理解が深化する。

一方他事例を見ると、A,B,D は潜在的な反抗心はあるにせよ基本的に母親と強い繋がりを持ち、父親も彼女らにそれなりの配慮を見せている。また C は死去していても愛情深い父親イメージをその根底に持ち、F も支配的だが協力的な父親を強く信頼していた。

精神的な疾病は身体的な要因も大きいので一概に言えないが、両親関係に限って言えばこの両親への信頼の有無が E, G との大きな相違であり、同時にこの両親の愛情の質が E と G の病態を分けた大きな要因と言える。

(2) 再接近期への固着と第二の個体化過程のレベルについて

分離 - 個体化過程における再接近期危機による対象恒常性(object constancy)の獲得失敗が、再接近期の固着の要因であることは既に Masterson, J.F. et al.(1980 /1982)が指摘しているが、分離 - 個体化過程の停滞が第二の個体化過程に与える影響について検討する必要がある。

Cl.の再接近期への固着が強度である程、Cl.の使用している防衛機制は未熟で原始的であると考えられる。原始的防衛機制は自我, エス, 超自我の構造も未分化な抑圧の段階以前で発生し、二者関係および自己と外界の境界も明確に区別されず分裂が基盤となっている(花岡, 2004)。第二の個体化過程においても、境界例水準で行われる個体化過程は文字通り幼児期の分離 - 個体化過程における再接近期の再試行であり、対象恒常性の確立により境界例水準から神経症水準への移行を伴うと思われる。実際に G の面接過程では、面接開始当時には両親、特に母親は“悪い対象”として歪曲され、攻撃することに全く罪悪感を覚えていない様子が見られる。また彼女の同僚、および上司とのトラブルには、彼女の内的世界が文字通り投影(projection)され、同僚と上司は妄想的投影(paranoid projection)の対象となっており、良い対象と悪い対象が二分された状態が見て取れる。

然し面接の継続により、G は職場の人間関係に自分の内的世界が投影されていることに気づき、同時に両親を“悪い対象”とみる無意味さを洞察する(#129)。ここで彼女は初めて両親を全体対象として内在化することに成功する。母親に関しては再接近期危機の葛藤を抱えられるようになっている。

神経症水準の Cl.では、Blos, P.(1967)が指摘した“内在化された幼児期対象からの独立過程”という第二の個体化過程本来の意味に即した分離(separation)が行われる。C, D, F のケースでは分離により自我構造の再構築が行われ、両親を完全に独りの人間として見る事が可能になると共に、それぞれの年代の発達課題の達成に繋がって居る。

Blos, P.(1967)は、第二の個体化の心理的再構築過程では、自我の退行により最初の分離 - 個体化過程におけるトラウマが再体験されると述べ、通常の退行的現象と疾病特徴の識別が臨床家にとっての課題であると提言している。つまり神経症水準の Cl.であってもその根底には分離 - 個体化過程の再試行の問題が存在し、同時に境界例水準の Cl.の分離にも幼児期対象からの自立という青年期的な要素も含まれているために、疾病による安易な決めつけは第二の個体化過程の心理的援助を阻害すると言えよう。

しかし E の場合は、両親側の病理が子どもの分離 - 個体化過程を困難にしている状況を端的に提示している。E の分離 - 個体化は常に妨害され続けたため、感情および行動も分

離不安を抱えたままであった。最初の分離 - 個体化過程が停滞し続けると、その退行は強固なものとなり、第二の個体化過程の展開も非常に困難になるようである。

2. 第二の個体化過程が遅延する要因

臨床事例 5 事例の検討により、発達的に見ると第二の個体化は 30 歳前後には達成が可能になると思われるが、成人期事例の F,G は 40 歳前後でも個体化過程が停滞したままであった。成人期 2 名の面接過程より、第二の個体化過程が遅延した要因として以下の点が指摘できる。

(1) 母親への強い不全感

F,G が共通して訴えたのは“かみ合わない”母親への強い不全感である。「母のすることと、私のやって欲しいことはかみ合わない」(F, # 28)「母親が母らしい対応をしてくれないと頭に来る」(G, # 74)等の言葉からは、時間の経過による許しが全く感じられず、彼女らの苛立ちがいかに根強いものであったかが窺われる。

彼女らと母親との疎通の悪さについてはいくつかの要因が指摘できる。両者とも、母親との親密な時間が持てなかった不満を訴えると同時に、母親の応答性の拙さを指摘している(F, # 26・# 28, G, # 2・# 74)。父親や弟妹の存在も、彼女達と母親との関係性形成を阻害していたようである(G, # 50)。

更に、F と G の母親自身の何らかの外傷体験が、彼女たちの母娘関係に強い影響をもたらしていた可能性がある。これらの事情から彼女たちは母親との物理的な離別を関係性で埋めることに失敗し、その補償として自分よりも周囲の欲求を優先し満たす“良い子”になることで関心を集める方略を選択している(F, # 104・G, # 132)。それは同時に“良い子”となることで、内的な両親像への幼児期的依存の継続を可能にしたともいえる。

(2) 葛藤の回避

もう 1 つの要因として、「私はこれまでの人生、スーッと来ちゃったんですね」(F, # 73), 「恋愛からも勉強からも逃げていた」(G, # 3)に見られるように、葛藤からの回避が挙げられる。通常的女性なら思春期・青年期の発達課題で直面する葛藤を彼女たちが回避できたのは、彼女らが“良い子”であったために、ライフ・イベント(進学, 就職, 結婚等)の際には自らの意志よりも周囲の期待に添った決定を優先させたのが要因と思われる。

また、彼女らは母親との信頼関係が真の意味で形成されていないために、葛藤を抱えられる自我の強さ(ego strength)を保てず表面的な対応しか取れなかった可能性がある。しかし会社の人間関係、もしくは夫婦関係という、“良い子”の方略が通用しない場に立たされた時、彼女らは強いパニック状態に陥り、葛藤に直面せざるを得なくなったといえる。彼女らが葛藤を回避してきた代償は大きく、F は離婚問題で、G は精神的バランスを著しく崩した状態で来談している。

(3) 成長モデルの不在

彼女らには友人もいたが、学校の教師等、彼女らの成長モデルとなった存在についての発言はなかった。また彼女らもそのようなモデルを求めた様子も見られなかった。そこには幼児期の愛情飢餓感を埋めるための“良い子”のパターンにより、彼女らは自らの意志を無視して周囲の期待に添うことで葛藤を回避抑圧し、彼女自身の自我は未熟なままのため空虚感は解消されずに、更に“良い子”パターンが強まるという悪循環が関係している。

そのため彼女らは自分の自我の成長の契機となるような成長モデルの発見や、成長する上で決定的な影響を与えるような経験を受け入れる余地を持てなかったようである。

3. その他重要な他者との関係性がもたらす影響

(1) 祖父母関係

祖父母については、三世代同居の A,B は母親を孤立させる父方祖父母を嫌悪している。B は母方祖父と父方祖父を具体的に比較し、母方祖父の優しさと父方祖父の冷淡さについて語っている。同居している祖父の存在は、程度の差こそあれ A,B の家族の雰囲気の根底にあると言ってもよいであろう。

その他のケースでは全く祖父母に対しての言及はなく、祖父母が C1.の愛着の対象となって両親と娘との関係を調整する役割を果たした等の事実も見られなかった。その意味ではこの 7 事例の C1.は、母娘関係のアンビバレントな状況に直接巻き込まれていたといえる。

(2) 兄弟・姉妹

全てのケースの C1.は兄弟・姉妹とはアンビバレントな関係か、または疎遠であることは前述した通りである。その中で女性の姉妹がいる A, D, G は、筆者との関係についても殆ど言及しない(D)か、対応にアンビバレントな様子が見られた(A, G)。一人っ子の C および弟がいる F とは面接開始当初から関係が安定、B(兄)も援助再開後は筆者との関係そのものは安定していた。

女性の姉妹の有無と筆者との関係性については、A,D には姉が、G には妹が居たが、いずれも援助関係に微妙な影を落としているといえよう。他は C を除けば兄弟が居たが、筆者の援助関係に大きな影響をもたらしている。即ち女性である筆者に転移関係が、それも陰性転移は否定できないのではないかと思う。然し後述するように、母娘関係の影響に比較すればその比重は軽い。

(3) 叔父・伯母等

叔父や叔母や、A は会社内での父親と叔父とのトラブルについて言及。また祖母が伯母と比較して自分の母が大事にされないことに怒りを現わしている。また B は父親を非難する理由の 1 つとして叔父や叔母への対応を指摘している。

また、Gが自分の全能感を洞察した契機は母方祖母の葬式での伯母とのトラブルである。叔父(伯父)や叔母(伯母)は、間接的に両親イメージが投影されることが少なくなく、C1.の洞察の契機になる場合もある。

(4) 友人関係

7事例中最も友人を希求し、同時に友人関係の葛藤を最も訴えたのはAであったが、そこには友人の多い姉との競争意識と劣等感が強く働いている。またEは援助開始当初は自分の中学時代をととても楽しかったと語るが、筆者との関係が深まるにつれいじめの体験を話すようになる。友人関係を最も重視するのはやはり思春期女性であり、実際に友人関係の進展によって彼女たちの個体化過程が促進される様子がA、B共に顕著である。

既にBlos,P.(1967)は“青年は同世代の群れから接触の供給を得ることなしでは個体化を理解できない”と指摘し、その理由として個体化する罪の意識を軽くする作用を挙げている。AとBは筆者との関係を足掛かりにして同世代の友人関係に移行している。C1.の友人関係形成の準備段階となる親密な関係性の構築は、学習援助と並んで治療的家庭教師の重要な援助機能である。

(5) 同僚・上司

同僚や上司とのトラブルが頻りに語られるのはGである。彼女は自らの親娘関係の葛藤や緊張を上司・同僚に投影(projection)しトラブルを頻発させる。特に陰悪な関係にあった同僚には母親像が投影されていて、同僚への怒りの言葉は母親に対するものとほぼ同じ状態を示していた。既に事例7で詳述したとおりである。

5.2 第二の個体化過程を促進する心理臨床的援助の検討

5.2.1 第二の個体化過程における Cl. - 筆者間関係の変遷

1. 筆者から見た Cl. の心的状況の変化

第二の個体化過程を促進する心理臨床的援助の検討を行うに当たって、まず面接(援助)における Cl. - 筆者間関係を見落とすことは出来ない。各事例の考察からも、Cl.の変化には、Cl.の自己理解の深化と同時に、筆者への陽性 - 陰性感情の大きな影響が明らかである。各事例の Cl. - 筆者間関係の心的状況の検討にあたり留意点として以下を挙げた。

(1) 筆者の援助的立場による相違

筆者の援助的立場とそれぞれの Cl.の援助期間については図 5 に示した。

事例 A,B,E については、筆者は治療的家庭教師として学習援助を実施している。その本来の目的は心理臨床的援助であるが、筆者と Cl.の関係性には学習が重要な媒体となっている。それは彼女らと筆者との関係性にも大きく影響し、A と E のアンビバレントな態度は彼女らの学習への強い抵抗と忌避感の現れである可能性がある。また B は学習援助時には中断や休みがあったが、彼女が進学し筆者の援助を訪問 Co.に切り替えると安定した面接が可能になった点から見ても、不登校生徒が学習に抱く不安と劣等感の強さが窺われる。

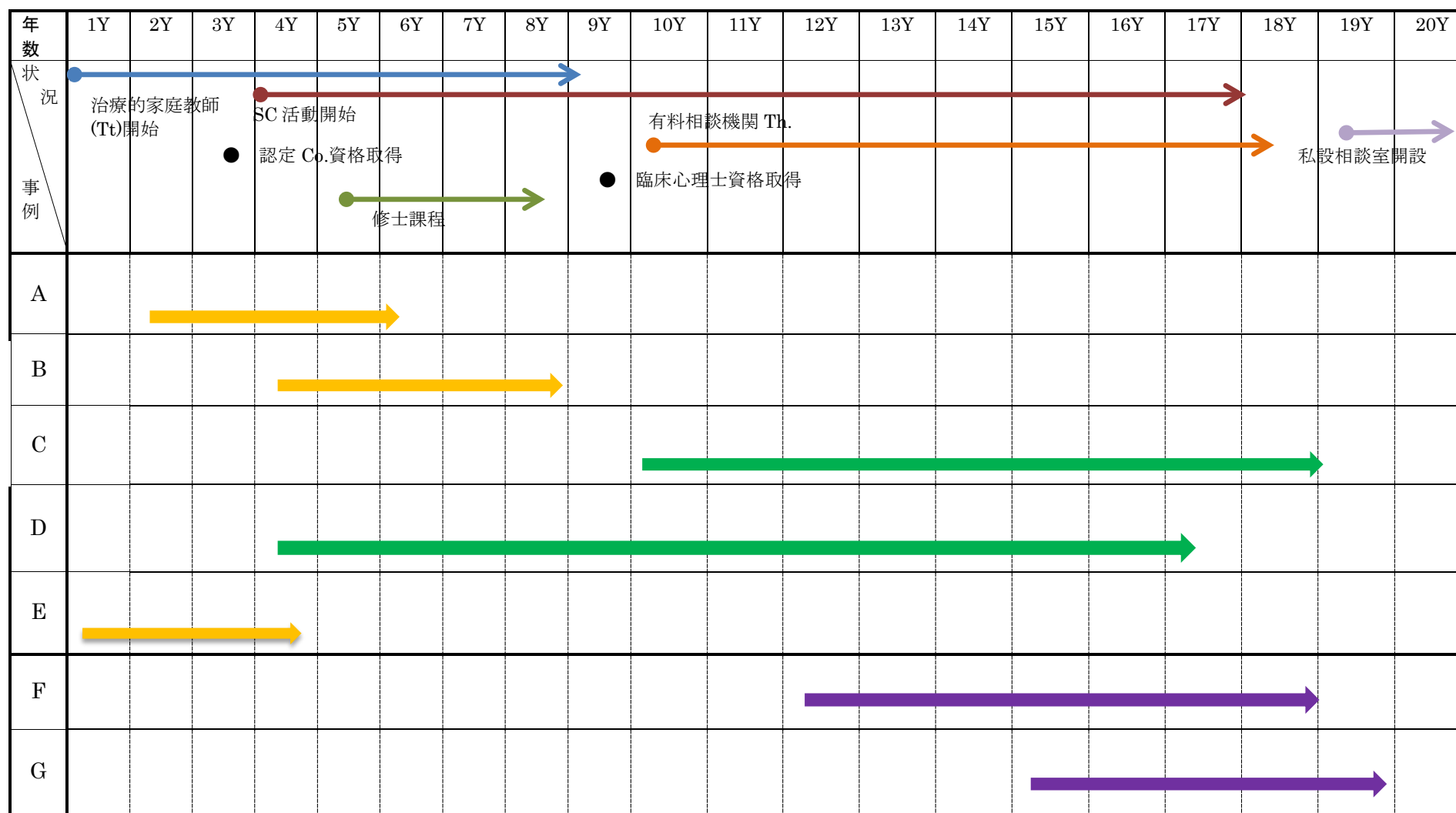
また C と D には筆者は SC として対応し、面接開始当初は学校内でカウンセリングを実施していたが、C は不登校状態であり、D は成績や受験等について強い抵抗が見られる等、学校そのものに消極的イメージがあった様子が見られる。それらは同時に学習や登校を強制する両親イメージと重なっている。C は学校での面接が中心だった第 1 期では無断キャンセルを続け、D も淡々とした態度を通してしている。両者とも面接が展開し始めたのは退学や卒業等により学校との直接的な繋がりが切れ、面接場所が学校外に移動してからである。思春期・青年期 Cl.の援助には、よくも悪くも学校イメージが強く関係している。

成人期 Cl.の場合は最初から有料の相談室で面接を行っているため、面接構造上の変化がもたらす影響はあまり見られない。しかし G は筆者の個人面接室に移動してから心的状況に変化が大きくなり、筆者との関係性にもアンビバレントな様相が濃くなっている。

(2) 本章における筆者の陰性感情について

Cl. - Th.間の関係性を検討するには、Th.の逆転移(counter transference)感情を考慮する必要がある。しかし本研究で提示した第二の個体化過程の援助における面接場面では、青年期特有の退行と推進の繰り返しにより Th.が強い葛藤を抱える場面が多々ある。そのため筆者はより深い Cl.理解には Th.の陰性反応(negative reaction)への検討が必要不可欠と考え、筆者自身の陰性感情を対象とした。援助関係における陰性感情は、その相互関係性そのものをそのまま表出する弁証法的・現象学的情態性を示している(2.4.3 参照)。

図5 各事例の援助状況と援助者の立場



注 Tt. Therapeutic tutor Co. Counselor SC. School Counselor Th. Therapist

逆転移の定義については、患者に対する治療者のすべての情緒的反応とする水戸(2004)の指摘を参考にした。また Cl.の心的状況についても、Cl.の発言と筆者が実際に Cl.から受けた感じを基にして検討・提示し、陰性感情への対応も考察した。

2. 筆者の心的状況の変化と面接経過との関連

1.を踏まえ、第3・4章の、各 Cl.の自己に関する発言及び筆者の対応の変遷(表2・表5・表7・表9・表11・表13・表16)を基に、陽性感情・陰性感情の観点から筆者が見た筆者と Cl.の心的状況の関係の変化について Cl.-筆者間関係の並行過程(parallel process)を図6に示し、各事例に特徴的な筆者の陰性感情が起こった個所を表27の表記に従い記入した。全面接(援助)過程から見ると、筆者と Cl.の心的状況の大まかな形状そのものは類似しており、両者の関係性が繋がっていることが理解できる。この図を詳細に見ていくと、① 筆者と Cl.共に安定している時期 ② 筆者は安定しているが Cl.は大きく揺れている時期、③ Cl.には余り変化がないが筆者が動揺している時期、④ 筆者と Cl.共に大きく揺れている時期 の4点に分類できる。各心的状況について表26に示した。

表26 筆者と Cl.の心的状況の関係

	筆者が安定	筆者が不安定
Cl.が安定	① B 第3～4期 E 第3期 C 第4期 D 第3期 F 第4期	③ D 第2期 G 第2期
Cl.が不安定	② A 第2期 B 第2期 C 第1～2期 D 第1期 F 第1,3期 G 第1,3期	④ A 第1,3～4期 B 第1期 C 第3期 E 第1～2,4期 F 第2期 G 第4期

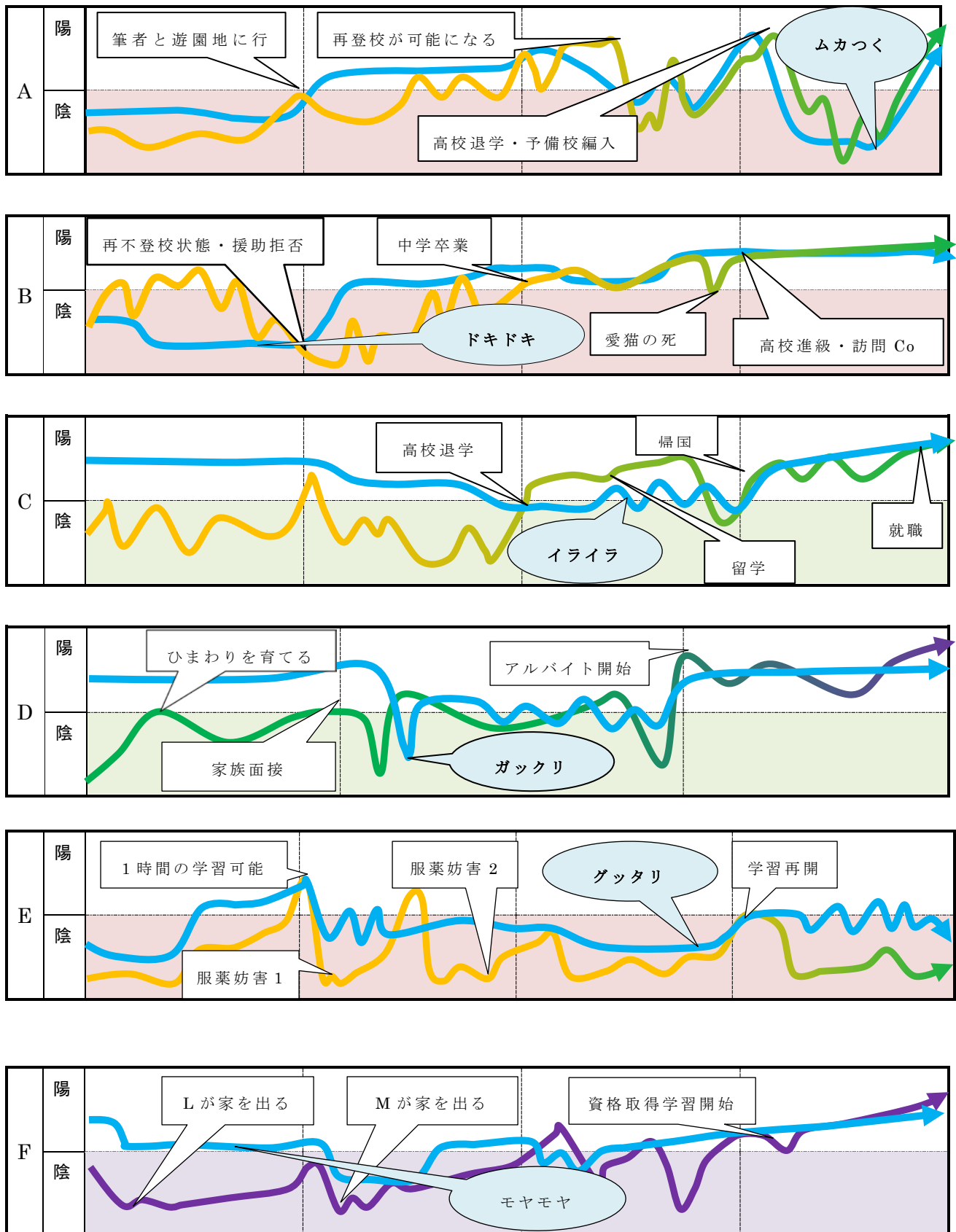
(1) 筆者と Cl.が共に安定している時期

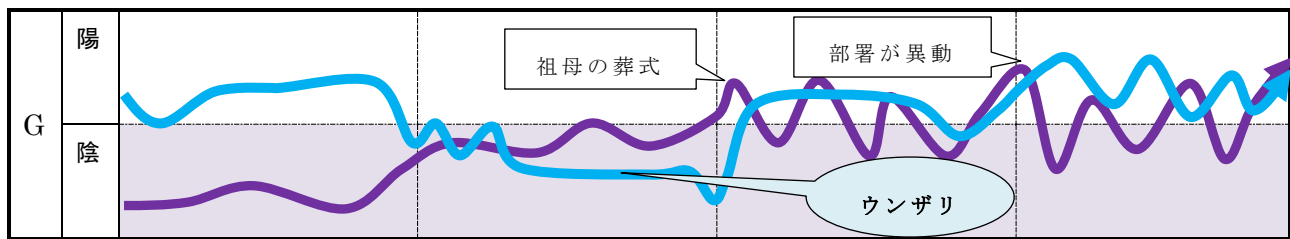
この期は主に、既に Cl.の主訴が殆ど解決され、面接(援助)過程が終結に向かっている段階である。Cl.の葛藤はある程度解消され、より社会化が進み、面接でも自己検討と共に外界への適応状態が話題に加わる。筆者と Cl.間にはラポールが形成され、筆者も安定した対応が維持できるようになる。そしてこの段階で Cl.にとって、より成熟した発達段階への移行の契機となる真の洞察が起こることが少なくない。恐らく、Cl.-筆者間関係の安定と葛藤の低減により、Cl.が自らの問題に直面できる心理的余裕を持てた結果だと思われる。

しかし E の第3期の安定は他ケースとは様相が異なる。この段階の E は3度の服薬妨害により、状態が悪い方に停滞していた。筆者も E の様子に“もう大変なのかもしれない”という強い無力感を覚えつつ援助を続けていた。この場合は筆者と Cl.が悪い意味で安定し、両方ともより良い状態を目指す気力も持てないままに、関係の維持だけに尽力していたと言える。

図 6 筆者から見た 筆者と各事例の CI. の心的状況の変化

陽・陽性感情 陰・陰性感情 点線は各期を現わす





Cl.の年代: → 思春期 → 青年期 → 成人期 → 筆者

(2) 筆者が安定しているがCl.が不安定な場合

Cl.が揺れているにもかかわらず筆者が安定している場合にはいくつかの要因がある。Aの第2期の場合は、筆者がようやくAと関係性を築けたことに安心し、その先の援助の展開まで考えが至っていなかった点がある。当時の筆者にとっては自分がまず治療的家庭教師として認められることが重要で、それが満たされた安堵感から、本当はAの葛藤がよく理解できていないにもかかわらず意識上は安定している積りでAに対応していた。この見かけの落ち着きがAの反抗を強めた可能性がある。

同様にGの第1期も、筆者はインタビュー面接ではGの状態に不安を覚えたものの、その後のGの洞察の速さに驚き、不安を覚えつつも順調に回復するのではないかと期待を持つようになっていた。然し現実には、筆者がGの対人行動パターン(＃156)に巻き込まれていた。このように筆者側の経験不足やCl.に対する幻想、および筆者の願望により、Cl.の状態を正確に掴めていないことで筆者に見かけの安定がもたされる場合がある。

その一方、筆者がCl.の状態を了解し、別の関わりに専念したことで筆者がCl.の不安定さを抱えられた時もある。Bの第1期は中断となったが、筆者は自分の対応に不安を覚えつつも、Bの様子から中断はやむを得ないとも考えた。そして手紙による援助に切り替えたが、そのうち手紙を書くことが面白くなり、Bの反応が楽しみになった。その後Bは第2期でも学習援助の復活と中断を繰り返したが、筆者は特に動揺せず援助を継続している。

またCの第1～2期、Dの第1期、及びFの第1,3期では、彼女らの唐突な行動に驚いたり心配したりしたもの、筆者の中に“これらの行動は今の彼女らにとって必要な事だ”との確信があったため、不安にならずに彼女らが自己決定を行うのを待つことが可能になっている。Gの第3期でも、彼女が面接で同じような内容の話を繰り返しても、彼女自身が答えを出すのではという予測ができたために一貫した対応を取っている。

(3) 筆者の心的状況が不安定だがCl.に大きな変化が見られない場合

Cl.に大きな変化はなく筆者の心的状況に波が見られた時は、自らの援助方針や姿勢について検討し模索している(D,第2期)、またCl.の言動に強い怒りや苛立ちを覚え、その陰性感情を押さえようと苦慮している時期(G,第2期)である。どちらの場合もCl.の変化に先立つ形で筆者の心的状況が不安定になっている。

これは Cl.が潜在的に抱える問題を、先ず筆者が陰性感情の形で意識することで、その後の面接の展開に繋がったと考えられる。その陰性感情は、筆者が葛藤しつつ抱え続け、Cl.の言動から直面化した方が良いと判断して言葉にした場合(D, #235・#236)と、筆者が抱えるだけで直接表現しない場合(G, #93)があったが、これはその時点までの Cl. - 筆者関係の内容と面接状況、および Cl.の自我の強さ(ego strength)が大きく関係する。

(4) 筆者も Cl. も共に不安定の場合

A,B,E の第 1 期では筆者の心的状況が低下しているが、これは主に援助経験の未熟さからくる緊張と自信の無さによるところが大きい(図 6 を参照)。これには A とは通常の会話が成立するまで時間がかかり、B の場合は援助中断となり、E からは攻撃的な態度を取られる等、筆者と Cl.の関係形成に至るまでが困難だったことも影響しているが、むしろ筆者の援助関係を形成するスキルの未熟さや緊張が、彼女らの抵抗をより強く引き起こしていた可能性がある。A の第 3,4 期の反抗についても、筆者は A の状態に見通しが持てないことへの苛立ちと同時に、彼女の反抗の意味が掴めないことで更に混乱し、特に第 4 期では A 自身への共感よりも自分自身を平静に保つことで精一杯であった。また E の場合も統合失調症の悪化と、度重なる家族の不適切な対応のために援助の目的が見いだせなくなったことが筆者が不安定になった要因である。

G の場合は、彼女の実年齢とかけ離れた心的状況の未熟さに筆者が衝撃を受け、苛立ちと怒りを覚えたことが大きい。また C の第 3 期では、筆者自身が C の悲嘆の大きさに共感することが出来ず自分の対応に不安を抱えていたが、C 自身の告白によって対象喪失の感情を洞察できたことで安定を取り戻している。F の第 2 期では二男の家出により筆者も動揺したが、F がパニックから立ち直り冷静に対処する様子を見て再び安定、F に落ち着いて関わる事が可能になった。

3. 陰性感情への対応

(1) 筆者が覚えた主な陰性感情と、それらが援助の進展にもたらした意味

1.で記載した筆者の心的状況のうち、陰性感情について更に詳細に検討するために、面接(援助)過程に覚えた主な陰性感情と、面接(援助)過程から推察した Cl.側の感情、及び筆者の対応について表 27 に示した。

面接(援助)期間中に主に筆者を不安定にしたのは ①援助の見通しが持てない ②Cl.の状態が理解できない ③自分の対応に確信が持てない の 3 点である。特に②については苛立ちや怒り等の強い陰性感情に繋がり易く、Cl. - 筆者関係の信頼形成とその維持が困難になる最大の要因と思われる。

ここでいう理解とは旧来の自然科学的理解ではなく、了解的共感を伴った体感的理解(empathic understanding)であることは言うまでもない。しかし、筆者が Cl.の状態を理

表 27 筆者が面接(援助)期間に覚えた主な陰性感情

感情	事例及び期	筆者側の状況	面接(援助)過程より 想定したC1.側の状況	筆者が取った対応
緊張 ドキドキ ピリピリ	A,B,E 第1期	・経験不足からくる自信 のなさ	・C1.自身の対人関係ス キルの未熟さ ・学習への劣等感	・気分転換を図る
不安 ソワソワ	A,B,E 第1期 D 第2期	・援助の見通し持てない ・自分の対応に確信が持 てない	・心的問題の表面化 ・自我の未熟さによる 自己決定の回避	・自分の対応の再 検討 ・類似の事例の検討
苛立ち イライラ	A 第3,4期 C 第3期 D 第2期 G 第2期	・C1.の様子が理解できな い状態のまま面接を継 続する	・C1.自身も気付かない または気付きたくな い葛藤の表面化また は回避	・直面化を視野に入 れつつ苛立ちを抱 える ・C1.の状態に添って 直面化を行う
退屈 ウンザリ	D 第2期 G 第2,4期	・同様の面接内容の反復 に耐えられなくなる	・強い固着から来る不 安や怒りを何とか解 消しようと試みる	・C1.にとってこの状 態が持つ援助的意 味を考える
不可解 さ モヤモヤ	A 第4期 C 第3期 D 第2期 E 第2期 F 第1期 G 第3期	・C1.の語る内容や態度, または C1.自身の状態 そのものが理解できな い	・C1.自身も自らの問題 が把握できず混乱し ている	・C1.にとっても解ら ない原因があるの だろうと考え、C1. が語るのを待つ (傾聴に徹する)
怒り ムカつく	A 第4期 E 第3,4期 G 第2,4期	・C1.の退行と筆者自身の 陰性感情の許容の限界	・C1.自身も自分の状態 の辛さに怒っている ・筆者に依存や羨望等 を覚えて腹立たしく なる	・自分の怒りが逆転 移感情であることを 自覚する ・怒りを行動化しな いよう配慮する
失望 ガックリ	B 第2期 D 第2期 G 第4期	・筆者の予想に反してC1. の状態が停滞する	・自己理解の怖れ ・変化し成長する不安	・筆者自身の全能感 を自覚する
無力感 グッタリ	E 第3,4期	・自分の援助が役立たな い感覚	・自分の努力が無にさ れる	・援助そのものに集 中する

解できない時は、Cl.は更に混乱しており自分の状態が把握できないと推察される。

その時に不用意な直面化を行っても、混乱を強めて面接が停滞する(D,第2期)、行動化が顕著になる(G,2・3期)等の状況を引き起こすのみで効果が薄いようである。

Cl.の中で自らの葛藤の要因が明確になると、Cl.自身が明快に言語化する(B, #62・C, #57・F, #104・G, #126)。また筆者の直面化(confrontation)もCl.の葛藤がかなり表面化した時点で行うとCl.はそれを自己検討に役立てている(C, #71, 72・D, 244)。

(2) 陰性感情を抱える意味 - Cl.の再接近期の再試行を支えるTh.の姿勢

(1)で指摘した直面化の時期については、Cl.の個人差もあるので明確には言えないが、それ以前にTh.が陰性感情を抱えつつ話を聴く対応をある一定期間継続していることが前提である。Th.が解釈や直面化と称して不用意な対応を行うのは、実際はTh.が自分自身の陰性感情に耐えられなくなり、楽になろうと性急に行動化することにある。

Kahn, M. (1991/2000)はTh.の純粋性について、“そのTh.にずっと持続している感情があり、しかもCl.の前に十分に存在しているための能力をこのままでは妨害していると思える場合のみ、その感情の表出をCl.に求めるもの”と述べ、その感情はCl.への配慮を伴い注意深く表現されるべきとしている。つまりTh.の感情の表現は、Th.の能力を妨害しない限り慎重になることが望ましく、行う場合もCl.の状況等を十分に検討する必要がある。

5.2.2 第二の個体化過程を促進するTh.の援助の検討

1. 第二の個体化の援助におけるTh.の役割

Th.及びTt.の重要な役割として以下の点が指摘できる。

(1) 安心して葛藤できる場の提供 (全事例)

各事例の母娘関係からは、彼女達が安心して葛藤するのが困難な、あるいは葛藤を意識することすら難しい状況にいたことが見られる。特にA, B, Dのケースの母親は彼女達が反抗できる程の強さを持たず、C, E, F, Gの母親は甘えられる程の親密性を持つのが難しい関係性であった。結果的に彼女ら自身の葛藤は全く意識されず抑圧(repression)か、強い罪悪感を引き起こして第二の個体化過程の停滞を招いている。

Cl.が安心して葛藤するには、①面接(援助)場面が葛藤を自由に安心して表明できる場であること ②陰性感情を表明してもTh.はそれに応え(耐え)て信頼できる対象(object constancy)であること の2点である。思春期女性のA, Bは筆者に攻撃的な言動や、援助を中断する等、実際に反抗的態度をとることで、自らの個体化過程を促進している。またD, Gは面接で筆者に葛藤を言語化し十分に迷い続けることで自我の成長に役立てている。同時に家族関係についても調整を行い、支持的な雰囲気維持にも配慮している。

(2) 同性の同一化モデルの提示 (A, B, C, E)

何を同一化(identification)のモデルとしたかは、Cl.によって異なる。主に女性性モデル

の役割が大きかった事例は B と C である。両者共それぞれ母親とは異なるタイプの女性像として筆者を捉え、自らの母親からの分離と女性性受容に役立てている。また成長モデルとしての役割が大きかったケースは A, E で、A は実際の進路決定に筆者の影響を受け、E は筆者と同じ大学に進学したいと話すなど、将来の進路の目安にした様子が見られる。

同一化対象となることに筆者への対応については、3.3.5 の 2(1)に記載している。

(3) 親密性の提供とその保持（全事例）

(1)にも共通しているが、彼女らが抱いているのは、自分が自分らしく振舞うと関係性が破綻するという強い不安である。彼女等が素朴に Th.に望むのは、自分が反抗し分離しても、または変化して成長しても、親密性(intimacy)は変わらず維持されることであろう。

親密性の内容を検討すると、主に母親の代替としての役割が大きかったケースは A,E,D, G である。A と G は母親に対してはできなかった反抗や甘えを筆者にぶつけることで修正感情体験(corrective emotional experience)を重ねている。また、E は現実の母親や家族と持てなかった親密な交流を経験したことで精神的安定が図られた。D は両親との関係を検討する場として筆者との受容的關係を利用し、そこで得た洞察を反映させている。

また、より親密な友人としての役割が大きかったケースは B,C,F である。B は筆者と猫や映画等の何気ない会話を積み重ねることより、同世代の友人関係の構築が可能になる。C は母親とは困難だった共感的な関わりを経て自己洞察を進め、F は筆者と chum 的な関係を持つことにより、親密性を共有できる異性と出会い第二の個体化過程を達成している。

以上 3 項目を挙げたが、ケースによって変化はあっても、基本的に(1)(2)(3)の項目は全面接(援助)過程に共通して見られている。それらは本来、母親が個体化する娘に対して提供する態度である。「私あなたに話をしながら、本当は両親との間でやる筈のことをここでやってる」(G, #221)の発言に象徴されるように、Th.に求められるのは彼女等が両親、特に母親に対して出来なかったことを想起再体験し、かつ修正する体験を、共感性の高い母親の代替となって提供することである。

しかし Cl.にとっての幻想的(つまり母親転移性)Th.に対する言動を Th.が理解することは至難である。Cl.に比べれば健康水準の高い Th.にとっては、Cl.の緊張や葛藤は既に過去のものである。とりわけ成人期事例の場合には、“大の大人が？”と思わせる言動に不快感や焦燥感等に Th.が襲われるのは当然でもあろう。然し Cl.は決して意図しているわけではないが、個体化以前の自我は、必要以上に自分の存在を主張することを受容できなくてはならない。第二の個体化過程では、神経症レベルの Cl.であっても幼児期の分離 - 個体化過程における再接近期の問題が顕在化することを 5.1.6 の 1(2)で指摘した。

Th.がその再試行を支持し援助するには、幼児期的母親対象からの分離を試みようとする Cl.の言動が引き起こす陰性感情を、意識しつつ抱えることが必要不可欠である。

つまり Th.(Tt)は、自分の過去に通過した Cl.の感情を理解しつつ、母親的なものを包含

した対応を要求されている。最初の分離 - 個体化過程に問題を抱える Cl.は、第二の個体化過程でこの再試行を成功させてくれる対象を希求していると考えられる。従ってその対象は幼児期的な母親イメージの刷新を援助し、かつ現在の母親との関係再構築の橋渡しとならなくてはならない。そのため Th.は、単に性別や年齢等の外的条件のみでなく、養護、共感、親密性といったポジティブな母親的役割をとることも必要であろう。

2. Cl.の第二の個体化過程における Th.の役割

(1) 第二の個体化過程の各段階における Th.の援助

Cl.の第二の個体化過程における Th.の主な援助について図 7 に示した。女性の第二の個体化の援助過程について弁証法的発展の様相を描いたものであり、図 4（女性の第二の個体化過程の推移）より一層現象学的全体性に近付いている。

図中の 1.で示した面接(援助)の初期段階では、Th.は意図的に受容的対応に専念し、Cl.との信頼関係の形成に重点を置く。この段階の Cl.は自分の感情や意志を表現することに罪悪感を覚えていたり、あるいは自らの感情そのものを抑圧して感じられなくなっている場合が少なくない。このような状態の Cl.が不安を覚えずに自らの感情を想起し、自由に発言できるよう、面接は心理的な安全基地として機能する必要がある。それは同時に幼児期の分離-個体化過程における再接近期の母親的役割につながる。

特に思春期 Cl.の場合は、この時期に中断や無断キャンセルといった事態が起こりやすい。思春期の事例は不登校という課題に特化されやすいために、意識的・顕在的には、学校復帰が援助目標に成り勝ちになる。既に事例で検討した様に、例えば学校復帰が主訴であったとしても潜在的で最終的な解決は、第二の個体化過程の促進である。つまり主要な主訴は不登校であっても、根本的な課題は潜在的な課題である(篠原, 2010)。学校復帰できたとしても、根本的課題が未解決であれば課題の先送りに過ぎない。然も防衛(defense mechanism)が働き、援助関係に転移(transference)が入り込むという事情に備えるべき姿勢を Th.は十分に自覚する必要がある。

次に図中の 2.で示した段階に入ると、Cl.は面接場面を利用して自分の親子関係を再検討し始める。意識できなかった怒りや恨みの言語化が可能になるが、同時に Cl.自身の自我の未熟さも表面化するために抵抗や退行が顕著になる。面接の停滞や面接構造の緩みもこの時期に多く見られる。この段階では、Th.は Cl.の自己検討を援助しつつ、面接の話題をそれとなく方向づけることで Cl.の作業の方向性を明確にする。親子関係では特に母親関係の検討を促し(抵抗が強い場合は父親関係のみ)、同時に Cl.自身の人生についての模索を援助する。同時に Cl.の抵抗を許容し、“抵抗したくなる気持ち”を理解する必要がある。

図中の 3.で示した段階に入ると、Cl.の自己検討は更に深化する。ここの Th.の対応は焦点化が中心で、Cl.が両親関係を整理し自分の生き方の検討に集中できる様に援助する。

この段階の Cl.は既に自分自身の検討方法を掴んでおり、無理な直面化は行わずとも面

接は進展するが、分離不安の強い Cl.の場合は幼児期的母親イメージから離れられずにここで面接が停滞する場合がある。その時は基本的な対応に立ち返り、Cl.の不安を受容しつつ Cl.自身が前進するのを待つ必要がある。

(2) 援助的な“母親の代替”役割の検討

4.(3)で Cl.の第二の個体化達成には Th.が母親の代替となって再接近期の再試行を援助し、トラウマの修正感情体験を持つことが重要であると述べたが、Th.が単なる母親代わりとなって Cl.の依存を満たすだけでは援助として全く意味をなさない。また、母娘関係に葛藤を抱える Cl.は、いかにも母性を感じさせる対応には自分自身が侵害される恐れを感じて拒否的反応を示すことが少なくない。

それを防ぐには、Th.は親しい関係性を形成しつつ、Cl.自身の感情と意志決定は明確に尊重する態度を維持する。つまり Cl.が母親との間に持てずに苦しんでいる個体化の感覚を、Th.が意識して持ち続けることが必要である。Cl.はその体験を通して母親との親密性と自分の主体性を両立する感覚を掴み、同時に母親への羨望を低減することが可能になる。

何よりも第二の個体化過程の援助には、Th.自身が第二の個体化を達成していることが重要であろう。

(3) 共感的・受容的対応と解釈

Th.(カウンセリング)の場合は言うまでもなく、治療的家庭教師(Tt.)の場合においても、Cl.に対する受容的・共感的対応は心理臨床活動の核心である。既に7事例で見た様にとりわけ母娘関係を巡る生育史的課題は、深く然も微妙な葛藤である。筆者の Co ルームの基本的姿勢は〈傾聴〉であり、治療的家庭教師としての活動はその応用的展開である。

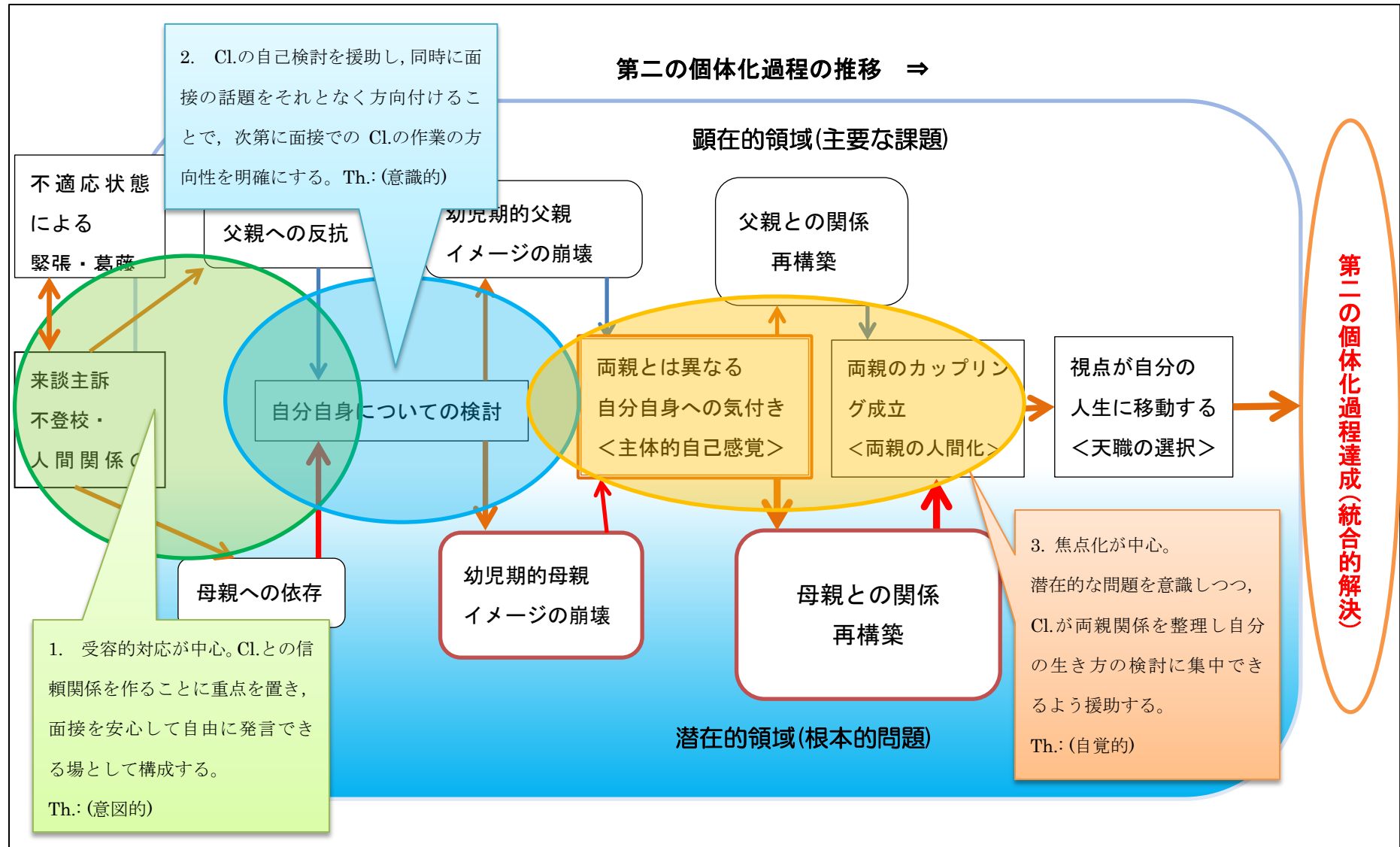
いずれにしても傾聴によって生じる自己洞察は、最も確かな解決（行動変容）の路である。然し、自己洞察を促すための解釈(interpretation)は Cl.に安易に提示すべきではないであろう。特に精神分析解釈は、それが適切であったとしても（不適切のものであれば一層）、Cl.を傷付け易いために控えることが望ましい。

むしろ、精神分析知見は Th.の自己内省、自己分析として活用する必要がある。

(4) 援助（面接）構造における指導的・管理的条件

前節1において筆者は Cl.に母親の代替となる態度を提供する意義を指摘したが、この中には母親の指導的・管理的態度は含まれてはいない。筆者自身は面接(援助)場面において、Cl.に管理は基より指導を連想させるような発言を行わない配慮をしている。むしろ指導的・管理的側面は、面接場所・面接(援助)時間・学習内容・料金等による援助構造を、Cl.と同時に Th.も遵守するという潜在的な形で提示している。つまり躰や家庭教育は母親の支配を示すものではなく、人間がより良い社会的生活を営む上で必要な条件であることを Cl.が体感すべきことなのである。また、面接構造は Cl.にとって現実生活に直結している為に、構造の遵守は現実検討(reality testing)を高めるための前提条件である。

図7 CLの第二の個体化過程におけるTh.の援助



5.2.3 まとめ

1. 各年代 C1. に対する効果的な援助について

各年代の C1. の様相をより詳細に示すため、各事例の C1. の年齢と援助期間について図 8 に示した。

(1) 思春期 C1.

思春期 C1. の援助は短期間で終わる傾向がある(家庭教師としての役割の特徴でもある)。思春期 C1. にとっては受験、進学等の関門を乗り越えることが最大の目的であり、学習援助や心理面接はその援助が最重要である。それを超えた自己検討や、アイデンティティ形成まで目的に含めると、C1. の不安が強まり援助関係が中断する可能性が高い。つまり、〈遠い援助目標〉であるアイデンティティ形成については、共同援助者である SC. 及び CO. に任せて、治療的家庭教師はその内包とする〈近い援助目標〉に専念するという共同作業の自覚が必要である。

また思春期事例では自分の気持ちを言語化することそれ自体に援助的效果が大きい。将来についても漠然とした形ではなく、比較的年齢の近いモデル像を提示すると気持ちの安定に繋がる。同時にアイデンティティ形成の鍵となる友人関係の構築は、思春期 C1. には勇気や決断が必要なため、その前段階として Th., 或いは治療的家庭教師が親しみのある人間関係形成の相手になるのが効果的である。

親子関係についての直面化や解釈は未だ受け入れるのが難しく、それはむしろ彼女等の第二の個体化過程の背景にあって最も根本的な矛盾であり葛藤である。特に母親は対象化すら困難な状態である。親子関係の検討よりも、むしろ本人が感じた怒りや葛藤等マイナスの感情を受容し、彼女らが感じたことを自由に表現できる自主性を認め安定させる支持的受容的対応が最善である。心理的安定は言語化と同時に自らの社会化の探索的行動となって現実化される。

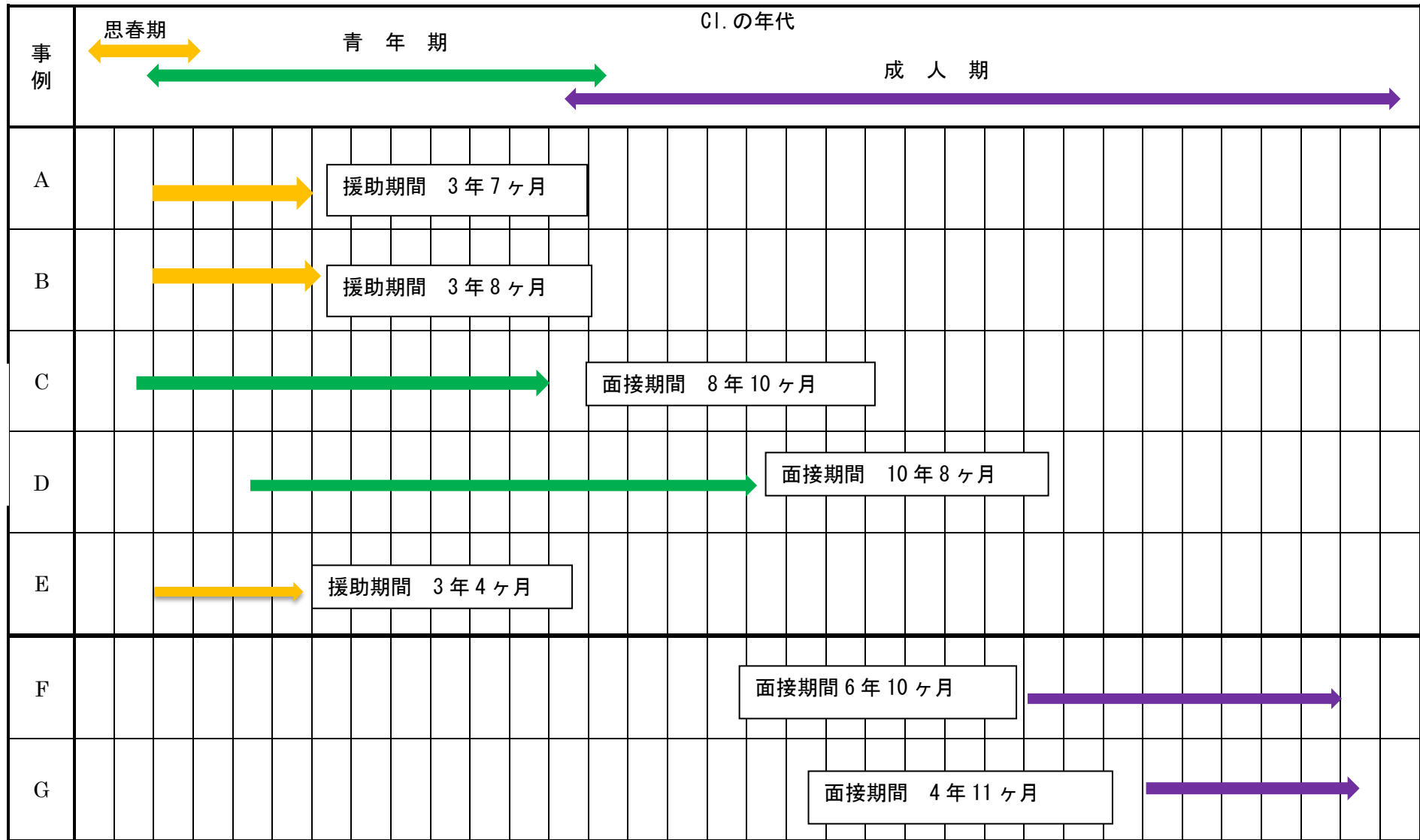
(2) 青年期 C1.

青年期 C1. は精神的・社会的にも最も成長が大きい。思春期よりも自己検討が深化し、社会的活動には具体的なモデルが無くても開始が可能になり、活動範囲も広範になる。

親子関係についても深い検討が可能である。異性である父親の方が先に対象となるが、母親に対しても、その関係性のあり方やマイナスの感情を意識化し検討できるようになる。また父親に対するエディプス・コンプレックスも洞察できる。援助では面接場面を、親子関係を検討できる安全な場とする必要がある。また彼女らの外界での活動を認め配慮する必要がある。

困難例では生活習慣・体調管理・服薬等の日常的な生活態度の確認に重点を置く。また人間関係上のマナーや態度もその都度教える等の対応が必要である。援助側も実際に

図8 各事例のCI.の年齢と援助期間



面接構造を守り、生活態度やマナーを実践する(篠原・佐野, 2002)。

面接では傾聴に重点を置く。解釈および直面化はかなり困難なので。こちらからの働きかけによる自己検討は混乱させ病状を重くする可能性がある。ただし本人から自分及び他者を検討する言葉がでたらそれを受容、支持的対応に専念する。

(3) 成人期 Cl.

成人期 Cl.になると自分の感情、および思考の言語化が顕著になる。相当に深い段階の自己検討が可能になる。その一方、自らの認知や行動パターンが硬直化し気付きにくく、気付いても実際の行動に移すまでに時間がかかるが、信頼関係ができると Th.による直面化も受け入れ易くなる。むしろそれがないと却って焦燥感が起こり、手ごたえが無い、物足りないと思われる可能性がある。社会的活動については、これまでの活動の再評価に重点をおき、その再認識・再選択が行われるよう援助する。その上で Cl.自身が新しい活動が必要と判断すれば自主的に開始する。

親子関係においては、両親に対してこれまでとは全く異なる評価が行われる。また自己のみではなく、真の意味での生殖性(generativity)が問われる。

また、各期の心理的援助に共通の Cl.- Th.間の信頼関係の構築とその維持の為に、面接構造は意識して堅持する対応を継続する。特に守秘義務や、面接以外の場では会わない等の倫理面にも細やかな配慮が必要である。また Th.自身の燃え尽き(burn out)の自覚とその対策は必須である。

また面接が長期になると、Cl. - Th.関係は一見安定するため互いに都合のよい面接を続ける、Cl.の行動変化を見逃す等の問題が起きて結果的に関係性が破綻する危険が生ずる。特に留意すべきことは、社会的イベント(就職、結婚、出産等)を自他共に難なく越えたと思い込んでいる仮の分離を通過した人々の場合である。つまり生活様式(life style)が形成されるに従い、第二の個体化は固着(fixation)と停滞(stagnation)が強まるのである。

2. 本研究の結果と今後の課題

(1) 女性の第二の個体化過程の適用

本研究のテーマである女性の第二の個体化過程は、少なくとも本研究で検討した7事例すべてにおいて開始と進展が見られている。

また、女性の第二の個体化過程には同性の母親との複雑で微妙な関係性が潜在し、最終的には母親との関係再構築によって完了される様子が見られた。同時に成人期女性の2事例から、第二の個体化過程の視点はアイデンティティ形成が課題となる思春期・青年期のみならず、成人期の精神力動においても適用が可能であることが示された。むしろ成人期の情緒的不適応状態は、第二の個体化過程の遅延が要因となることが少なくな

いと思われる。

さらに、境界例水準の Cl.や統合失調症等の精神疾患を抱えた Cl.の場合であっても、援助体制が整えば第二の個体化過程の進展は可能であることが事例より示唆された。然し神経症水準の Cl.と比較すると、その進展には情緒的不安定さや症状等によるストレスの影響を受けやすく、より多くの時間を要する状況が見られた。今後の課題として、発達障害等の症状を抱えたケースや、経済的・家庭的に困難な Cl.の場合等、他の第二の個体化過程が進展する外的、および心的条件についても更に検討を重ねれば、より効果的な心理臨床的援助のために有効であろう。

また事例中にも挙げたように、母娘関係におけるお互いへの過剰な理想化と執着は、女性の第二の個体化過程の困難さのみとは言い切れない観がある。最近の愛着の研究では Bowlby,J.の理論は母親偏重であるとの批判が強まっているが(高橋, 2013)、母親の愛情を神聖化・絶対化する現代の社会的風潮が、今の子どもの、そしてかつて子どもであった大人の幻想と全能感を増強させて、母親存在への過度な要求となっている可能性は大きい。最も個人的な関係である母子関係と社会との関連については、これからも検討を進める必要がある。

さらに男性の第二の個体化過程については既に Blos,P.(1967)が記述しているが、前述の通り基本的な情報が記載されていない。一方北山ら(2006)は Freud,S.の詳細な分析記録を紹介している。これらの資料や事例研究の蓄積から男性の第二の個体化過程の特徴が検討できれば、男性の心理臨床的援助の重要な視点の 1 つとなる可能性がある。

(2) 女性の第二の個体化過程を援助する心理臨床的援助について

第二の個体化過程を推進する心理臨床的援助では、Th.がポジティブな母親役割の代替となって現実の母親との関係再構築を援助する対応が効果的であることが示された。

同時にその援助には、Cl.が幼児期的母親イメージから分離し、個体化する過程で必然的に起きる退行がもたらす陰性感情の受容が必要不可欠であることが導き出された。陰性感情がもたらす援助の問題は同時に〈転移〉それも援助者側の〈逆転移〉に連続し、今後とも検討されなければならない課題である。

また、本論で考察した第二の個体化過程進展の特徴として、筆者は Cl.が“自分と親とは違う個別の人間である”事実気付くこと、及び Cl.自身の視点が親との関係性よりも“自分の人生をどう生きるか”に移動することを指摘した。これは 7 人の Cl.の言葉を集積した結果であったが、同時にそれは Frankl,V.E.(1946/1957)が主体的人間の条件として、孤独を見据えた〈人間の独自性〉と、死の現実と意味を受け入れた〈人生の一回性〉に連なる実存概念に連動していたのに驚かされた。

今後の課題として、Cl. - Th.の関係性の更に詳細な検討の必要性が挙げられる。本研究では、筆者も Cl.も共に女性であったために女性同士の Cl.-Th.間の関係性のみに限定

して論述したが、例えば Th.が男性であった場合でも、母親的役割を意識して Cl.に対応すれば、女性 Cl.の第二の個体化を促進する援助は可能と思われるが、思春期女性の Cl.の場合は困難であるかもしれない。あるいは女性 Th.と男性 Cl.の場合等、異性間による Cl. - Th.関係についても考察が必要であろう。

(3) 事例研究法への仮説的推論(abduction)の適用

残された課題の1つとしては、事例研究法のより深い検討が挙げられる。本論考の前提には事例研究(case study)のベースとしての Schön,D.の反省的実践(reflective practition)位のものであったが、本論文中の第3事例発表の際、考察の基底に弁証法的方法(dialectical method)を導入することにより、心理-力動的(psychodynamics)援助過程全体がより鮮明になることに気付かされ、事例考察の観点として導入を試みている。

さらに本研究の事例研究には Peirce-,C.S.の発想法、或は仮説的推論(abduction)の導入を試みたが、部分的展開のみで統合的方法論までには至っていない。本論文中の図表の活用はその確かな成果である。事例研究展開の方法論は残された大きな課題である。

そもそも、第二の個体化過程の研究をめぐる先達の臨床的知見は、あくまで臨床活動の中でこそ意味を持つのであって、安易な結論は慎むべきことかも知れない。臨床の援助過程より見いだされた第二の個体化過程は、卒業、就職、結婚等の社会的慣習(ethos)からの影響も無視できない。即ち第二の個体化の探求は、自ずと諸科学協働的

(interdisciplinary)にならざるを得ない研究テーマである。臨床的概念の重さは、関連した最新の研究成果に注意深く眼を配りつつも、やはり様々な要因が重なった臨床的援助関係の中にこそ見られるものであろう。

3. あとがき

もともと筆者にとっては、Blos,P.や Erikson,E.H.の概念は理解し難く、疎遠のものに思われていた。ところが多くの女性 Cl.と出会い様ざまな人柄、様ざまな生き方に触れながら臨床体験を重ねるうちに、あっ、これが彼女らの課題だったのか、ああ、このことを我われに伝えたかったのか、と言う実感が持てるようになり始めた。まさしく女性の第二の個体化過程は、筆者にとっても自らの心理臨床家形成過程そのものでもあった。

Erikson,E.H.の発達概念の難解さは、〈親密性 対 孤立〉や〈生殖性 対 停滞〉などという対立概念で示されているからである。これが対立関係の止揚発展という弁証法的捉え方であると知れば理解はし易いであろう。然し、これが肯定的もしくは積極的概念のみで示されていたとすれば、恐らく本論に登場する Cl.の援助は途中で頓挫していたに違いない。特に成人期女性たちの複雑で、困難で、混沌とした状況に、到底耐え

抜く自信はなかったであろう。〈信頼〉にしても〈自律性〉にしても、むしろ似つかわしくない彼女らにと対峙しながら、〈不信〉や〈疑惑〉に始まり〈孤立〉や〈停滞〉〈絶望〉にさえ至る生涯発達上の課題を示す言葉が、対立する積極的概念とどのように折り合いを付けるかという難題として突き付けられた。

第二の個体化過程が達成し難く、また研究者側にとっても捉え難い事情は、人生全体に関わる多次元多層的な実存に連動した概念だからであろう。筆者も心理臨床家として、第二の個体化過程の難問を抱えて飛び移る事情は同じである。

もっとも画家出身の Erikson, E.H. は、青年期をサーカスの曲芸師が、思春期という空中ブランコから彼方の成人期という揺れ動く彼方の空中ブランコへ飛び移る時期だと譬えた。彼は実存 (existence) の核心を、飛び立つ (ラテン語; ex-sistere, 英語; stand out) 状況として見事に描いて見せている (Ellenberger, H.F. 1958)。

それにしても、筆者はどうしてアイデンティティに興味を持ち、第二の個体化過程をテーマとして選んだのであろうか。Blos, P. は文学的造詣の豊かな教養人のようである。放浪画家であった Erikson, E.H. を Freud, A. のもとに呼び寄せたのは、彼であった。Freud, A. と共に彼らの友情が精神分析的自我心理学を発展させたことはよく知られている。Erikson, E.H. の精神発達の漸成理論図 (epigenetic chart) に象徴されるように、人生全体を俯瞰して見通し、人間のありようを力動的に捉えた彼らのセンスに筆者は惹かれたのかもしれない。としたら、彼らの言う“臨床的直観”は、美術科出身の筆者の中にも少しだけあって、それを確かなものにするのが筆者の根本的な発達課題であらうか。

最後にどうしても忘れてはならない課題、Nouwen, H.J.M. (1977/1981) の〈傷ついた癒し人〉⁵ という概念の臨床的検討は、どうやら筆者の臨床家としてのアイデンティティ検討の更に根源的な課題である。

⁵ Nouwen, H.J.M. (1977) はオランダのカトリックの司祭でありながら、トペカのメニンガー研究所で精神医学や臨床心理学を学び、更に禅思想や仏教の実践から啓示を受けて、プロテスタント神学校の実践神学の教授として活躍した人物。

カウンセラーや心理臨床家は、日常で傷ついた自らの傷を癒しながらも、ここに痛みを負った人々の支援に尽くす存在だと言うのである。心理臨床家は例え日常の生活の中で、傷つくことがあっても、真実を見通す感受性を失ってはならないという、深いメッセージが込められている。

引用文献一覧

- Anderson, S.A., & Fleming, W.M. (1986). Late Adolescence's Identity Formation *Individuation from the Family of Origin. Adolescence*, **21**, 785-796.
- 馬場禮子(1996). 分離・個体化への関わりをめぐって. 精神分析研究, **40**, 234-235.
- 馬場禮子(2008). マーラーの分離-個体化の発達 精神分析的人格理論の基礎
心理療法を始める前に 岩崎学術出版社, pp152-182.
- Binswanger, L. (1947) *Ausgewählte Vorträge und Aufsätze. Band I. Zur phänomenologischen Anthropologie*. Francke, Berne. 木村敏・荻野恒一・宮本忠雄(訳)
(1967) 現象学的人間学. みすず書房. Pp55-62
- Blos, P. (1962). *On Adolescence Psychoanalytic Interpretation*. The Free Press of Glencoe, Inc. 野沢栄司(訳)(1971). 青年期の精神医学. 誠信書房.
- Blos, P. (1967). The second Individuation Process of Adolescence. *Psychoanalytic Study of the Child*, **22**, 162-186.
- Blos, P. (1985). *Sons and Father. Before beyond the Oedipus Complex*. New York: Macmillan Publishing Company, Inc. 児玉憲典(訳)(1990). 息子と父親
エディプス・コンプレックス論をこえて 青年期臨床の精神分析理論. 誠信書房,
pp208-210.
- Bowlby, J. (1973) *Attachment and Loss, Vol.2 Separation. Anxiety and Anger*.
The Tavistock Institute of Human relations. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子
(1977)(訳). 分離不安 母子関係の理論 II. 岩崎学術出版社, pp398-406.
- Bowlby, J. (1980) *Sadness and Depression. Attachment and Loss, Vol.3*. The Tavistock Institute of Human Relations. 黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子(訳)(1981)
対象喪失 母子関係の理論 III. 岩崎学術出版社, pp289-329.
- Brandt, D.E. (1977). Separation and Identity In Adolescence. Erikson and Mahler-Some Similarities. *Contemporary Psychoanalysis*, **13**, 507-518.
- Cooper, M.L et al (2004). Rholes, W.S. & Simpson, J.A. (Eds.) *Adult Attachment. Theory, Research, and Clinical Implications*. The Guilford Press. 工藤晋平(訳)(2008)
アタッチメント・スタイルと個人内適応 - 青年期から成人期前期への長期研究 -
遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・串崎真志(監訳). 成人のアタッチメント 理論・研究・
臨床 北大路書房, pp395-420.
- Davila, J. & Cobb, R.J. (2004). Rholes, W.S. & Simpson, J.A. (Eds.) *Adult Attachment. Theory, Research, and Clinical Implications*. The Guilford Press.
岡島泰三(訳)(2008). 成人期のアタッチメント・セキュリティの変化についての予測値
遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・串崎真志(監訳). 成人のアタッチメント 理論・

- 究・臨床 北大路書房, pp124-149.
- Donovan,J.M.(1975). Identity Status Interpersonal Style. *Journal of Youth and Adolescence*, 4, 37-55.
- Ellenberger,H.F. May,R. & Anger,E.(Eds) (1958) *Existence : A New Demension in Psychiatry and Psychology*. Basic Book Inc. 伊東博(訳)(1977) 精神医学的現象学 実存分析への臨床的序説 岩崎学術出版社, pp151-206.
- Ellenberger,H.F.(1970).*The Discovery of the Unconscious : The History and Evolution of Dynamic Psychiatry*. Basic Ins., New York. 木村敏・中井久夫 (監訳) (1980) 無意識の発見. 下 動精神医学発達史, 弘文堂, pp276 - 279.
- 遠藤利彦(2007). アタッチメント理論とその実証研究を俯瞰する 数井みゆき・遠藤利彦(編著) アタッチメントと臨床領域 ミネルヴァ書房 pp1-58.
- Erikson,E.H.(1950).*Childhood and Society*. W.W.Norton&Company,Inc. 仁科弥生(訳)(1977). 幼児期と社会. みすず書房, pp317-353.
- Erikson,E.H.(1959).*Identity and the Life Cycle*. W.W.Norton & Company,Inc. 西平直・中村由恵(訳)(2011). アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房, pp95-102.
- Erikson,E.H. (1968). Identity : Youth and Crisis. W.W.Norton&Company,Inc. 岩瀬庸理(訳)(1973). アイデンティティ 青年と危機. 金沢文庫, pp226-288.
- Erikson,E.H.& Erikson,J.M.(1997).*The Life Cycle Completed*.New York: W.W.Norton&Company,Inc.村瀬孝雄・近藤邦夫(訳)(2001). ライフサイクル, その完結. みすず書房, pp87-103.
- Foley,D.V.(1974).*An Introdtution to Family Therapy*. New York: Allyn & Bacon,Inc. 藤縄昭・新宮一成・福山和女(訳)(1984). 家族療法 初心者のために. 創元社, pp20-83.
- Fonagy,P.(2001).*Attachment Theory and Psychoanalysis*.London: Orher Press. 遠藤俊彦・北山修(監訳)義田俊之(訳)(2008). 愛着理論と精神分析. 誠信書房, pp70-88.
- Frankl,V.E.(1946).*Aerztliche Seelsorge*. Wien: Verlag Franz Deuticke. 霜山徳爾(訳)(1957). 死と愛ー実存分析入門. みすず書房, pp119-132.
- Freud,S.(1905). *Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie*. 渡邊俊之(訳)(2009). 性理論のための三篇. フロイト全集 6 岩波書店, pp163-312.
- Freud,S.(1917).*Trauer und Melancholie*. *Gesammelte Werke Bd. X III*. Frankfurt:S.Fischer Verlag GmbH. 井村恒郎・小此木啓吾(訳)(1970). 悲哀とメランコリー. フロイト著作集 6 人文書院, pp137-149.

- Freud,S.(1931). *Über die Weibliche sexualität*. 高田珠樹(訳)(2011). 女性の性について. フロイト全集 20 岩波書店, pp215-238.
- 五味義夫(1974). 登校拒否に関する研究－親との面接過程についての考察. 日本教育心理学会発表論文集.16,596-598.
- 五味義夫(1975).現象学的研究法 精神分析的研究法 青年心理学研究の課題と方法 現代青年心理学講座 1. 金子書房, pp89-122.
- 五味義夫(1985).青年理解と適応指導. 藤原喜悦(編).青年心理学.鷹書房, pp110-117.
- 五味義夫(1988).青年の生活感情と感動 青年心理学ハンドブック. 福村出版, pp326-352.
- 五味義夫(2000). ブロス (Blos,Peter) 久世俊雄・斉藤耕二(監修). 青年心理学事典 福村出版, pp45.
- Greenberg,L.S. , Rice,L.N. & Elliott,R. (1993) *Facilitation Emotional Change : Themonent-by-Moment Process*. Guilford Preess. 岩壁茂 (2006) 感情に働きかける面接技法 心理療法の統合的アプローチ, 誠信書房.pp47-48.
- 花岡直子(2004). 原始的防衛機制. 心理臨床大辞典. 培風館, pp1053-1055.
- Hegel, G.W.F.(1832).*Phänomenologie des Geistes*. 長谷川宏(訳)(1998). 精神現象学. 作品社, pp545-554.
- Hell, D. & Fischer－Felten, M (1993).*Schizophrenien Vertandmiisgrundlagen und Orientierungshilten 2. Auflage* Springer－Verlage. 植木啓文・曾根啓一 監訳(1996). みんなで学ぶ精神分裂病 正しい理解とオリエンテーション. 星和書店.
- Herman,J.L.(1992).*Trauma and Recovery* .New York:Basic book,a division of Harper Collins Publishers,Inc. 中井久夫(訳)(1999). 心的外傷と回復. みすず書房, pp241-272.
- 平井孝男(1989).事例を通じた理解 心の病いの治療ポイント. 創元社.
- Horney,N.(1926).*Flucht aus der Weiblichkeit*.Intern Zeitschr.f.Psychoanal XII. 泉ひさ (訳)(1971). 女性の深層心理. 黎明書房, pp46-62.
- 稲村博(1994). 不登校の研究. 新曜社 pp1-21. / pp301-324.
- 乾吉佑(1980).青年期治療における “new object” 論と転移の分析. 小此木啓吾(編). 青年期の精神病理 2. 弘文堂,pp249-276.
- 乾吉祐 (2002) 治療構造. 小此木啓吾(編) 精神分析事典 岩崎学術出版 pp343-344.
- 乾吉祐 (2009) 思春期・青年期の精神分析的アプローチ 出会いと心理臨床. 逸見書房 pp15-21.
- 伊藤洸(1980).精神発達と分離 - 個体化理論. 小此木啓吾(編) 青年の精神病理 2 弘文堂, pp67-85.

- 伊藤良子・丸山令子(2006). 青年期における親の養育態度と第二の分離個体化に関連する精神的健康について - 分離個体化期の不安の検討を通して -. 神戸親和女子大学大学院研究紀要, **6**, 51-62.
- 井梅由美子(2007). 母親との分離に葛藤のある青年期女性の事例. お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要, **9**, 18-29.
- Josselson,R.(1973). Psychodynamic aspects of identity formation in college woman.*Journal of Youth and Adolescence*,**2**,3-52.
- Josselson,R.(1987).*Finding Herself*. San Francisco London: Jossey-Bass Publishers. pp168-191.
- Josselson,R.(1996).*Revising Herself. The story of Women's Identity from College to Midlife* New York: Oxford University Press,Inc. pp45-173.
- Kahm,M.(1997).*Between Therapist, The Relationship*.W.H.Freedman&Company.
- 園田雅代(訳)(2000).セラピストとクライアント. 誠信書房, pp232-233.
- 金沢吉展(1993). 大学生における分離・個体化の様相.家族システム理論の有用性に関して. 日本教育心理学会総会発表論文集 **35**. 204.
- 神田橋條治(1989). 精神療法 1 神経症. 土居健郎・笠原嘉・宮本忠雄・木村敏(編). 異常心理学講座IX 治療学. みすず書房, pp71-118.
- 神田橋條治(1990). 精神療法面接のコツ. 岩崎学術出版社, pp27-42.
- 片山登和子(1969). 発達的にみた青年期治療の技法原則. 精神分析研究, **15**, 1-6.
- 河合隼雄 (2003) .臨床心理学ノート. 金剛出版 pp62-76.
- 川喜田二郎(1970). 続・発想法 KJ 法の展開と応用.中公新書. pp8.
- Kernberg,O.(1976).*Object Relations Theory and Clinical Psychoanalysis*. Jason Aronson Inc. 前田重治(監訳). 岡秀樹・竹野孝一郎(訳)(1983). 対象関係論とその臨床. 岩崎学術出版社, pp44-133.
- Kimmel,D.C.& Weiner,I.B.(1995). *Adolescence. A Developmental Transition Lawrence*. Erlbaum Associates,Inc. 川村望・菅原健介(訳) (2002).川村望・永井徹(監訳). 思春期・青年期の理論と実際. ブレーン出版, pp32-68.
- 北山修・高橋義人・井口由子・笠井仁(2006) フロイト「ねずみ男」精神分析の記録 人文書院.
- Kleiger,J.H.(1999).*Disordered thinking and the Rorschach.theory,research, and differential diagnosis*. New York.:The Analytic Press,Inc. 吉村聡・小嶋嘉子他(訳)(2010). 馬場禮子(監訳). 思考活動の障害とロールシャッハ法. 創元社, pp151-158
- 小橋みち子・武田実紀(2010).患者 - 看護師の 2 者関係を構築することの重要性 分離・

- 個体化理論を用いての考察. 日本精神科看護学会誌, **53**, 32-36.
- 近藤孝司(2010). S-HTPP 法における第二の分離個体化の様相.
中京大学心理学研究科・心理学部紀要, **10**, 21-35.
- Kroger,J.(1985).Separation-Individuation and Ego Identity Status in New Zealand University Students. *Journal of Youth and Adolescence*,**14**,133-147.
- 熊倉伸宏(2002). 面接法. 新興医学出版社, pp34-45.
- Lewis,S.M.&Takahashi,K.(2005)(Eds.) *Beyond the Dyad Human Development. Vol.48.No.1-2*.Basel,Karger. マイケル・ルイス・高橋恵子(訳)(2007) 愛着からソーシャル・ネットワークへ 発達心理学の新展開 新曜社
- Levine,J.B.,Green,C.J.,Millon,T.(1986). The Separation-Individuation Test of Adolescence. *Journal of Personality Assessment*,**50**,123-137.
- Levy,T.M.&Orlans,M.(1998).*Attachment,Trauma, and Healing.Understanding and Treating Attachment Disorder in Children and Families*. Washington.D.C..Child Welfare League of America.藤岡孝志・ATH 研究会(訳)(2005).
愛着障害と修復的愛着療法 児童虐待への対応. ミネルヴァ書房 pp20-34.
- Mahler,M.S.,Pine,F.,Bergman,A.(1975).*The Psychological Birth of the Human Infant*. New York: Basic Books Inc. 高橋雅士・織田正美・浜畑紀(訳)(2001).
乳幼児の心理的誕生 母子共生と個体化. 黎明書房.
- Marcia,J.E.(1966).Development and Validation of Ego-identity Status. *Journal of Personality and Social Psychology*,**3**,551-558.
- Masterson,J.F. & Costello,J.L.(1980).*From Boderline Adolescent to Functioning Adult.The Test of Time*. New York.:Brunner/Mazal Publishers. 作田勉・ 恵智彦・大野裕・前田陽子 (訳)(1982). 青年期境界例の精神療法 その治療効果と時間的経過. 星和書店, pp3-44.
- 松田孝治・安村直己(1990) 三代分析での三角関係についての若干の検討. 岡堂哲雄・ 鑪幹八郎・馬場禮子(編). 臨床心理学大系4 家族と社会. 金子書房, pp182 - 183.
- 皆川邦直(1980). 青春期・青年期の精神分析的発達論 - ピーター・ブロスの研究をめぐって -. 小此木啓吾(編). 青年の精神病理 2 弘文堂, pp43-66.
- 水戸淳子(2004). 転移, 逆転移. 心理臨床大事典 培風館. Pp209-211.
- 三浦和夫(1992). 訪問家庭教師. 心理臨床大辞典. 培風館, pp1129 - 1131.
- 宮下一博(1998). アイデンティティ形成に関する研究 鑪幹八郎・宮下一博・岡本祐子(共編). アイデンティティ研究の展望 V-1. ナカニシヤ出版, pp85-11.
- Moore,D. & Hotch,D.F.(1982). Parent-Adolescent Separation.The Role of Parental Divorce. *Journal of Youth and Adolescence*,**11**,115-119.

- 森田洋司(2007).ボンド理論による不登校生成モデル 伊藤茂樹(編)(2007) いじめ・不登校 広田照幸(監修)日本の教育と社会⑧ 日本図書センター pp103-128.
- 村瀬嘉代子(1979).児童の心理療法における治療者の家庭教師の役割について. 大正大学カウンセリング研究所紀要. 2, 18-30.
- 鍋田恭孝(2007).不登校・ひきこもりの現状と対応 鍋田恭孝(編)思春期臨床の考え方・すすめ方 新たな視点・新たなアプローチ 金剛出版. pp77-100.
- 永井徹(2007). 青年期課題の時代的な変遷. 現代のエスプリ, 483, pp38-46.
- 内藤志美・土屋美千恵(1995).大学生における分離個体化と家族機能の関連について 人間研究, 31, 111-119.
- 中村雄二郎(1992).臨床の知とは何か.岩波書店, pp112-140.
- 中根千枝(1977).家族を中心とした人間関係 講談社学術文庫,pp157-166.
- 成田善弘(1986). Mahler.M.S.の分離個体化とボーダーライン. 北田穰之介・馬場謙一・下坂幸三(編). 精神発達と精神病理. 金剛出版, pp163-188.
- Neimeyer, R.A.(2001).*Meaning Reconstruction the Experience of Loss*.American Psychological Association.富田拓郎・菊池安希子(訳)(2007). 喪失と悲嘆の心理療法構成主義による意味の探究. 金剛出版, pp25-41.
- 二村晃(1994).“訪問”による「臨床心理的地域援助」の試論 日本人の間柄を“気”を用いて表現して. 心理臨床学研究, 12, 62-72.
- 西平直喜(1973).世代葛藤と“青年-両親”関係 青年心理学. 有斐閣, pp106-123.
- 西平直喜(1990).成人になること 生育史心理学から. 東京大学出版会, pp64-76.
- Nouwen,H.J.M.(1977).*The Wounded Healer*. The seabury Press.西垣二一(訳)(1981) 傷ついた癒し人 苦悩する現代社会と牧会社 日本基督教団出版局 pp114-135.
- 岡本清孝・上地安昭(1999). 第二の個体化の過程からみた親子関係および友人関係. 教育心理学研究, 47, 248-258.
- 岡本祐子(1985).中年期の自我同一性に関する研究. 教育心理学研究, 33, 295-306.
- 岡本祐子(1998).家族とアイデンティティに関する研究. 鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子(共編). アイデンティティ研究の展望. ナカニシヤ出版, pp179-221.
- 岡本裕子(1999). 第1章 女性の生涯発達に関する研究の展望と課題. 女性の生涯発達とアイデンティティ 個としての発達・かかわりの中での成熟. 北大路書房,pp1-30.
- 小此木啓吾(1980).青春期・青年期の精神分析的発達論と精神病理. 小此木啓吾(編) 青年の精神病理 2. 弘文堂, pp9-42.
- 小此木啓吾(1992).映画で見る精神分析 彩樹社 pp70-75.
- 尾久裕紀・狩野力八郎(1986).Masterson,J,F の青年期発達論と精神障害. 北田穰之介・馬場謙一・下坂幸三(編). 精神発達と精神病理. 金剛出版. pp92-114.

- 小野田直子(2006). 依存対象を希求しながらも依存を拒否する女性の症例.精神分析研究, **50**, 369-402.
- 大島啓利・鈴木康之(1990). 精神分裂病をもつ家族の受容プロセス. 岡道哲雄・
 鑪幹八郎・馬場禮子編 臨床心理学大系 4 家族と社会. 金子書房, pp278 - 284.
- 大矢泰士(1999).自我同一性対と青年期の個体化過程 集団思考 TAT に見る親表象との
 関係から. 心理臨床学研究, **17**, 333-341.
- Putnam,F.w.(1997) *Dissociation in Children and Adolescentes. A developmental
 Perspective*. 中井久夫 (訳) (2001) 解離 青年期における病理と治療. みすず書房.
 pp.300-339
- Pine,F.(1985). *Developmental Theory and Clinical Process*. Yale University.
 齊藤久美子・永井一郎(監訳)(1993).精神分析的考え方・関わり方の実際. 臨床過程と
 発達 2. 岩崎学術出版社, pp173-224.
- Rholes,W.S.& Simpson,J.A(2004).*Adult Attachment Theory,Research,and
 Clinical Implications*. A Division of Guilford Publications,Inc. 金政祐司(訳)(2008)
 遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・串崎真志(監訳). 成人のアタッチメント 理論・
 研究・臨床. 北大路書房, pp367-394.
- Rogers,C.R. (1957) The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic
 Personality Change. *Journal of Consulting Psychology*.Vol.21. No.2.1957.
 95-103. Kirschenbaum,H. & Henderson, V.L.(Eds) (1989) The Carl Rogers Reader.
 Sterling Lord Literistic inc. New York. 伊藤博・村山正治 (監訳)
 (2001) ロジャーズ選集 (上) 誠信書房.pp265-285
- Sabatelli,R.M.& Mazor,A.(1985).Differentiation, Individuation,and Identity
 Formation. The Integration of Family System and Individual Developmental
 Perspectives. *Adolescence* **20**, 619-633.
- 齋藤久美子(1990).青年期後期と若い成人期 女性を中心に. 小川捷之・齋藤久美子・
 鑪幹八郎(編). 臨床心理学大系 3 ライフサイクル. 金子書房, pp163-176.
- 齋藤久美子(2002).分離 - 個体化. 精神分析事典. 岩崎学術出版社, pp434-435.
- 齋藤万比古・生地新 (編) (1996) 不登校と適応障害 思春期青年期ケース研究 3.
 岩崎学術出版社.
- 榊田陽子(1996). TAT に見る青年期の自立と諸様相. 東京都立大学大学院人文科学研究
 科修士論文.
- 佐野直哉(1998).精神分裂病の精神分析的心理療法. 河合隼雄・山中康裕・小川捷之(編)
 心理臨床の実際 4 病院の心理臨床. 金子書房, pp175 - 183.
- 讃岐真佐子(2004).分離 - 個体化過程. 心理臨床大事典. 培風館, pp996-998.

- Schön,D.A.(1983).*The Reflective Practioner*. Basic Books.Inc. 佐藤学(2001) 専門家の知恵 反省的実践家は行為しながら考える ゆみる出版,pp172-206.
- 篠原恵美(2002). 心理臨床的視点による家庭教師的援助. 東京学芸大学大学院 教育学研究科 修士論文.
- 篠原恵美(2004). 準専門家による訪問援助の実践的研究. カウンセリング研究,37, 64-73.
- 篠原恵美(2005). スクールカウンセリングにおける手紙の活用とその限界. 山梨英和大学心理臨床センター紀要, 創刊号 4-13.
- 篠原恵美(2007). インテーク面接における援助関係の予備的考察. 山梨英和大学心理臨床センター紀要, 3 2-11.
- 篠原恵美(2010a). 親面接における 3 形態とその基本的対応についての考察. 山梨英和大学心理臨床センター紀要, 5 2-12.
- 篠原恵美(2010b). 主訴の多層性およびその援助過程についての弁証法的考察. 心理臨床学研究, 28, 291-302.
- 篠原恵美(2012). 青年期女性のアイデンティティ確立過程における青年 - 両親関係の発展. 心理臨床学研究, 30, 331-343.
- 篠原恵美(2013). 思春期・青年期女性の第二の分離 - 個体化過程の文献研究 - その課題と展望 -. 首都大学東京心理学研究, 23, 29-37.
- 篠原恵美・佐野秀樹(2001). カウンセリング過程における沈黙の意味 - 不登校状態にある女子高校生との面接を通して -. 相談教育研究(筑波大学), 39, 23-30.
- 篠原恵美・佐野秀樹(2002). 精神疾患を抱える生徒に対する治療的家庭教師 - その援助関係と実践的視点 -. 東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 26, 153-163.
- Smoller,J.&Youniss,J.(1985).Parent-Adolescent Relations in Adolescents Whose Parents are Divorced. *Journal of Early Adolescence*, 5.1 129-144.
- Stern,D.N.(1985).*The Interpersonal World of the Infant.A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology*. New York:Basic Books Inc.小此木啓吾・丸田俊彦(監訳) 神庭靖子・神庭重信(訳)(1989). 乳児の対人世界 理論編. 岩崎学術出版社,pp45-81.
- 菅野信夫(1991).治療の進行にともなうケース理解. 三好暁光・氏原寛(編). 臨床心理学 2 アセスメント. 創元社, pp123-147.
- 杉村和美(1999).現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達. 岡本祐子(編). 女性の発達とアイデンティティ 個としての発達・かかわりの中での成熟. 北大路書房, pp55-86.

- Sullivan,H.S.(1953).*The Interpersonal Theory of Psychiatry*. New York: W.W.Norton&Company Inc. 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鑪幹八郎(訳)(2002). 精神医学は対人関係論である. みすず書房, pp276-296.
- Sullivan, H.S.(1954).*The Psychiatric Interview*. New York:W.W.Norton&Company. 中井久夫・秋山剛・野口昌也・松川周二・宮崎隆吉・山口直彦(訳)(1986). 精神医学的面接. みすず書房, pp56-57.
- 鈴木正義(1997).「分離 - 個体化」理論から人格形成を考える. 学校教育学会誌, **2**, 167-182.
- 鈴木乙史(1997). 青年から大人への移行 - アメリカにおける青年の分離 - 個体化研究の展望. 母子研究, **18**, 15-22.
- 高橋裕行(1984). 自我同一性と Marcia の同一性地位面接 批評的展望. 教育心理学研究, **32**,320-328.
- 高橋裕行(1988).同一性と親密性の危機の解決における性差 - 自我同一性地位の Rasmussen の EIS による並存的妥当性の検討 -.教育心理学研究, **36**,210-219.
- 高橋恵子(2013). 絆の構造 依存と自立の心理学. 講談社現代新書, pp65-88.
- 高橋蔵人(1989).青年期における分離個体化に関する研究 質問紙調査による考察. 心理臨床学研究, **7**, 4-14.
- 田村絹代(1996).居場所を求めて転々とした後, 母親と同一の所属を選択した同一性拡散の症例 - その病理と治療関係について -. 精神分析研究, **40**, 228-233.
- 鑪幹八郎(2002). アイデンティティ. 精神分析事典. 岩崎学術出版社, pp2-3.
- Tatossian,A.(1979) *Phenomenologie des Psychoses*. Masson,Editeur,Pari. 小川豊昭・山中哲夫(訳)(1998) 精神病の現象学. みすず書房. Pp27-58.
- 内山喜久雄(1983) 登校拒否へのアプローチ 内山喜久雄(編) 登校拒否 金剛出版 pp81-154.
- 上山春平(2005). 弁証法の系譜 マルクス主義とプラクマティズム. こぶし書房.pp157-149
- Wade,N.C.(1987).Suicide as a resolution of Separation-Individuation among adolescent girls. *Adolescence*, **22**, 169-177.
- 渡辺久子(2012).乳幼児の心理的誕生. 立木康介(編著) 精神分析の名著 フロイトから土居健郎まで. 中公新書, pp245-256.
- 山本誠一(1993). 青年期における分離 - 個体化と不安. 筑波大学心理学研究, **15**, 195-200.
- 米盛雄二(2007). アブダクション 仮説と発見の論理 勁草書房 pp53-128.

謝 辞

博士論文を丁寧にご指導いただいた首都大学東京大学院の永井 徹 教授に深く感謝いたします。そして下川 昭夫 教授，平井 洋子教授，須田 治教授，沼崎 誠教授，山下 利之教授，石原 正規准教授，山際 勇一郎准教授，天野 陽一先生のご指導，ケースカンファレンスでの渡部 みさ教授，村松 健司准教授，佐藤 章子先生のご指導に心からお礼申し上げます。

心理臨床学会の事例発表でご指導いただいた佐野臨床心理研究所の佐野 直哉先生，FD 研究会で貴重なご助言いただいた中野臨床心理研究室の馬場 禮子先生に心より御礼申し上げます。

この博士論文の基礎となる修士論文をご指導いただいた東京学芸大学教授の佐野 秀樹先生，カンファレンスでご意見をいただいた小倉クリニックの小倉 清先生に深謝いたします。

治療的家庭教師の頃から長期に渡り私の SV を担当していただいた甲府心理臨床研究室的五味 義夫先生には，お礼の申し上げようもございません。本当にありがとうございました。

そして事例発表を快諾して下さいましたクライアントの皆様と保護者の方々に，本当に感謝いたします。私は皆様に臨床家としても，独りの人間としても育てていただきました。心より厚く御礼申し上げます。

最後に，この博士論文執筆を温かく見守ってくれた私の家族に深く感謝致します。

2014.10.31

篠原 恵美